

成田市三里塚馬場遺跡

1982

千葉県住宅供給公社

財団法人 千葉県文化財センター

成田市三里塚馬場遺跡

— 三里塚団地建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1982

千葉県住宅供給公社

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

本遺跡の所在する成田市には、著名な成田山新勝寺をはじめ多くの文化財が所在しています。市の西方は印旛沼に面し、豊かな自然に恵まれてきたところであり、埋蔵文化財の豊富に所在する地としても知られています。近年は新東京国際空港の開港に伴い周辺地域の整備が望まれている今日です。このような状況から、千葉県住宅供給公社では成田市三里塚に約13万m²の宅地造成を計画しました。このため県教育庁文化課が宅地造成地内の遺跡の分布調査を実施したところ、縄文式土器や土師器等の埋蔵文化財包蔵地の所在が確認され、その取扱いについて関係機関と協議した結果、記録保存の措置も止むを得ないと結論に達し、造成工事に先行して発掘調査を実施することとなりました。

発掘調査は、当文化財センターが委託をうけ、途中、中断はありましたが、昭和55年度から同56年度の二か年にわたり確認調査及びそれに基づく本調査を実施しました。

調査では、先土器時代の石器群が13か所にわたって検出され、その他に縄文式土器や土師器、さらに近世の牧に関連して構築されたと思料される溝や堀も発見されました。

この度、これらの成果を本報告書として刊行することとなりましたが、なかでも、先土器時代の発掘資料については、すでに周辺で発見されている資料と比較検討することにより北総地域の先土器時代文化を一層明確にし得る資料と思われます。本報告書が学術資料としてはもとより社会教育、学校教育の教材として郷土の文化を理解するうえで活用されることを願って止みません。

最後に、現地での発掘調査に御協力いただいた地元の方々、及び成田市教育委員会ならびに千葉県住宅供給公社の関係各位等に対し深く感謝申し上げる次第です。

昭和57年 9月

財団法人千葉県文化財センター

理事長 今井 正

例　　言

1. 本書は、成田市三里塚団地建設に伴い調査された三里塚馬場遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、昭和55年4月1日から同9月30日までと、昭和56年4月1日から同9月30日までの二次に分かれ、千葉県教育委員会の指導の下に、千葉県住宅供給公社との委託契約に基づき、財團法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 現地調査は、下記の担当で実施した。

調査部長 白石竹雄 部長補佐 栗本佳弘（55年度） 同 天野努（56年度）

・第一次調査（昭和55年度）

班長 堀部昭夫

調査研究員 谷 旬 小林清隆

・第二次調査（昭和56年度）

班長 古内茂

調査研究員 小林清隆 田井知二

4. 整理作業及び本書の執筆は、小林がこれにあたった。

5. 本遺跡の遺跡コード番号は、211-014を使用し、大字名と小字名を組合させて遺跡名とした。

6. 本文中の石器実測図の縮尺は統一し、原寸の3分の2とした。また、本文の挿図番号の下には遺跡で付した遺物番号を示した。

7. 発掘調査から本書の刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課・千葉県住宅供給公社の関係者各位をはじめとし、多くの方々から御指導・御助言をいただいた。深く謝意を表する次第です。

目 次

序文

例言

目次

第1章	調査の方法と経過	1
第2章	遺跡	4
第1節	地理と周辺遺跡	4
第2節	遺跡の概要	7
第3節	層位	10
第3章	検出した遺構と遺物	13
第1節	先土器時代	13
第2節	その他の遺構と遺物	46
第4章	小結	59

挿図目次

第1図 遺跡全体図	3
第2図 遺跡周辺地形図	5
第3図 第1地点全体図	8
第4図 第2地点全体図	9
第5図 第4地点全体図	10
第6図 標準土層	11
第7図 遺跡内土層柱状図	12
第8図 Aブロック出土遺物①	14
第9図 Aブロック出土遺物②	15
第10図 Aブロック出土遺物③	16
第11図 Aブロック遺物出土状況（折込）	17
第12図 Bブロック出土遺物	20
第13図 Bブロック遺物出土状況	21
第14図 Cブロック出土遺物	22
第15図 D・Eブロック出土遺物	23
第16図 F・Gブロック出土遺物	25
第17図 Fブロック遺物出土状況	25
第18図 Hブロック出土遺物	27
第19図 Hブロック遺物出土状況	28
第20図 Iブロック出土遺物	29
第21図 Iブロック遺物出土状況	30
第22図 Jブロック出土遺物①	32
第23図 Jブロック出土遺物②	33
第24図 Jブロック遺物出土状況	34
第25図 Kブロック出土遺物	36
第26図 Kブロック遺物出土状況	37
第27図 Lブロック出土遺物	38
第28図 Lブロック遺物出土状況	39
第29図 Mブロック出土遺物①	41
第30図 Mブロック出土遺物②	42
第31図 Mブロック遺物出土状況（折込）	43

第32図 Mブロック出土遺物③	45
第33図 ブロック外出土遺物	47
第34図 002号跡	49
第35図 003号跡	50
第36図 005号跡（折込）	53
第37図 005号跡断面図（同上折込内）	53
第38図 005号跡出土遺物（同上折込内）	53
第39図 001号跡・006号跡	56
第40図 縄文時代遺物①	57
第41図 縄文時代遺物②	58
第42図 文化層別石器集成図①	64
第43図 文化層別石器集成図②	65
第44図 文化層別石器集成図③	66

表 目 次

第1表 細石刃一覧表	19
第2表 石鏃一覧表	58
第3表 ブロック別石器一覧表	67
第4表 ブロック別石材一覧表	67

図版目次

- | | | |
|------|-----------------|----------------|
| 図版 1 | 1・II区近景 | 2・同 (裏) |
| | 2・III区近景 | |
| 図版 2 | 1・第2地点調査後 | 2・同 (裏) |
| | 2・第4地点調査後 | |
| 図版 3 | 1・土層断面 | 2・Aブロック遺物出土状況 |
| 図版 4 | 1・Bブロック遺物出土状況 | 2・Fブロック遺物出土状況 |
| 図版 5 | 1・Iブロック遺物出土状況 | 2・Jブロック遺物出土状況① |
| 図版 6 | 1・Jブロック遺物出土状況② | 2・Kブロック遺物出土状況 |
| 図版 7 | 1・Mブロック遺物出土状況① | 2・Mブロック遺物出土状況② |
| 図版 8 | 1・002号跡 | |
| | 2・003号跡 | |
| 図版 9 | 1・004号跡 | 2・004号跡土層断面 |
| 図版10 | 1・005号跡 | 2・005号跡土層断面① |
| | | 3・005号跡土層断面② |
| 図版11 | 1・001号跡 | 2・001号跡土層断面 |
| | | 3・006号跡 |
| | | 4・006号跡土層断面 |
| 図版12 | 1・Aブロック出土遺物 (表) | |
| | 2・同 (裏) | |
| 図版13 | B・Cブロック出土遺物 | |
| 図版14 | D～Hブロック出土遺物 | |
| 図版15 | 1・Iブロック出土遺物 (表) | |
| 図版16 | 1・Jブロック出土遺物 (表) | |
| | 2・同 (裏) | |
| 図版17 | 1・Jブロック出土礫器 (表) | |
| | 2・同 (裏) | |
| 図版18 | K・Lブロック出土遺物 | |
| 図版19 | 1・Mブロック出土遺物 (表) | |
| | 2・同 (裏) | |
| 図版20 | ブロック外出土遺物 | |
| 図版21 | 1・縄文時代遺物 (土器) | |
| | 2・同 (石器) | |

第1章 調査の方法と経過

三里塚馬場遺跡の調査は昭和55年度事業として、同55年4月1日から調査に伴う準備作業を開始した。5月1日からは現地にて環境整備を始め、本格的調査には5月6日から入った。

当初昭和55年度における調査は、127,100m²に及ぶ遺跡全体の確認調査が目的であった。そのため調査方法は、グリッド法を基本として、トレンチ法を併用し、遺跡の性格・範囲を捉えることとした。

調査区域は、広範であり飛地も存在していたことから、公共座標を基に全体に20m方眼網を設けこれを大グリッドとした。さらに大グリッド内を4m×4mの小グリッド25個に分割した。また、便宜上調査区域をI～V区に分けた。トンレチは、大グリッドごとに東側に幅2m、南に長さ18m、北側に幅2m、西に長さ16mの匁状に設定した。このトレンチにより上層の確認を行い、状況に応じて2m×4mのトレンチを設け下層の確認を実施することとした。

調査は、II区からトレンチの発掘を開始し、6月末にI区を併せて終了した。7月1日にはIII区に移動し、8月13日に終了した。この結果、II区において1箇所、III区において3箇所の本調査対象地点を確認した。しかし、この時点で計画に変更が生じ、IV・V区は調査対象から除外され、新たにI'区・II'区の確認調査と、II区の本調査が加えられた。これにより8月14日から終了地区の埋戻しを行い、8月21日からII区の本調査（第1地点）と並行してI'区・II'区の確認調査を開始した。本調査は、9月末日までを要し、第VII層に3箇所の石器集中地点を検出・発掘し、55年度の調査を終了した。結果的には約84,000m²についての確認調査と、約1,200m²の本調査となった。

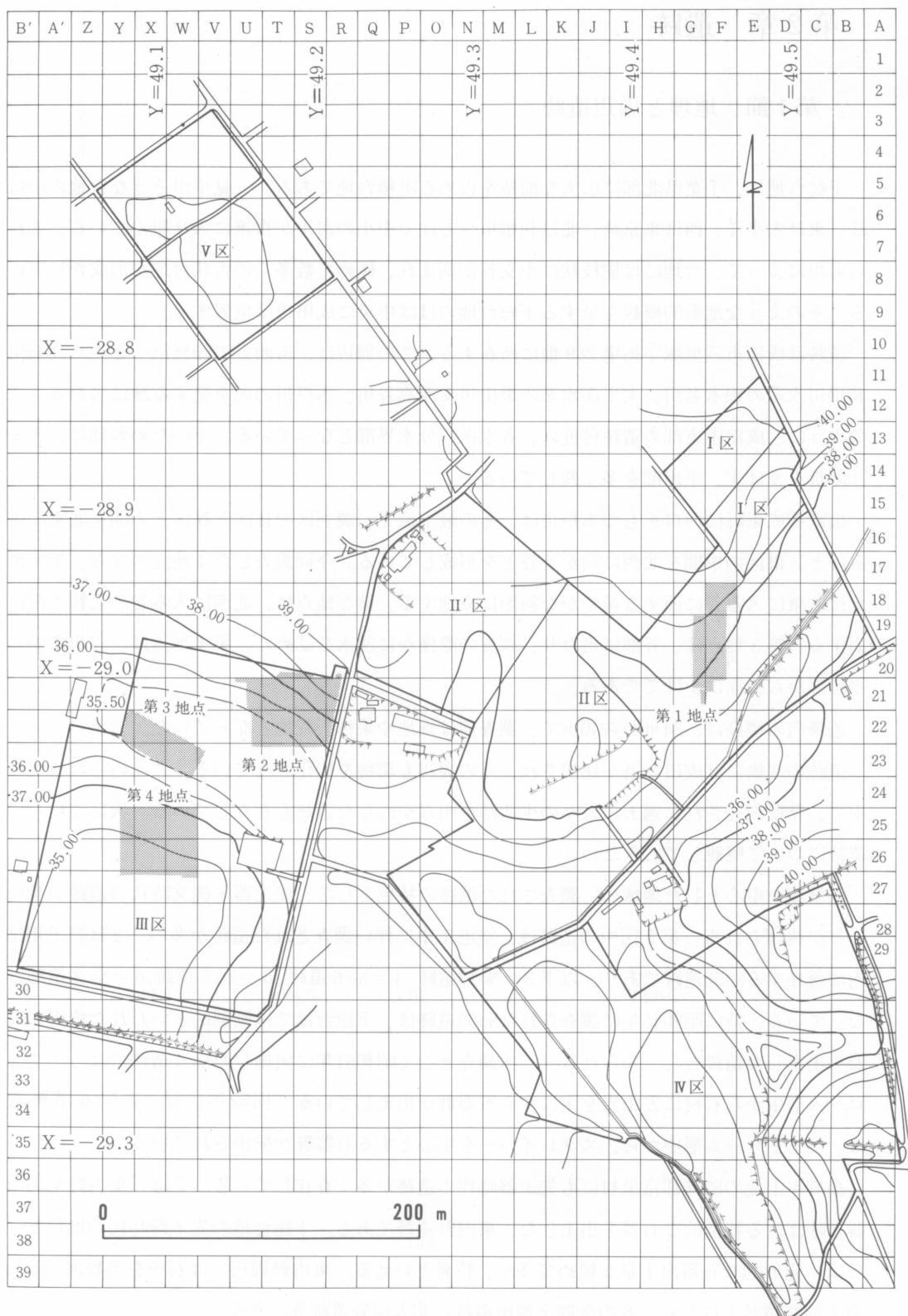
第二次調査は、昭和55年度の確認調査の結果から、3地点約6,000m²の本調査を実施することとなり、56年4月1日から作業に入った。

4月8日からは第3地点の調査を開始し、堀状遺構を発掘し5月27日に本地点を終了した。続いて5月28日から第2地点、第4地点に、幅2m南北に長さ16mのトレンチを大グリッド内に各2本ずつ設定し、第II層上面まで掘り下げた。その後2地点の表土を重機により除去した。この間第4地点で第II層上面で石器の出土があり、その出土範囲のみ先行して調査を実施した。

これ以降遺構の調査は、土層観察用のベルトを残すか、遺構の半分を掘り下げ、土層観察後全掘した。また、先土器時代の調査は次のように行った。第2地点では、2m×4mのトレンチを6mごとに、第4地点は、第III層まで全堀の後大グリッド内に4m×4mグリッド4個を設定し、下層の確認を行った。そして、石器の出土が認められた地点について拡張する方法をとった。

6月17日からは第2地点の調査に移行し、001～004号跡の遺構と、石器集中地点3箇所の精査を行った。7月27日に第4地点に移り、006号跡と、先に調査した石器集中地点1箇所の他

に、第Ⅲ層で2地点、第Ⅳ層下位から第VII層最上面で2地点、第VII層で2地点の石器集中地点を検出した。各地点とも出土遺物量は少量であった。9月29日に第4地点の調査を終え、9月30日に現場撤収を完了し、遺跡における作業を終了した。



第1図 遺跡全体図(1/4000)

第2章 遺跡

第1節 地理と周辺遺跡

下総台地は、千葉県北部に広大な面積を占める洪積台地である。一見平坦そうな台地の中には、東は太平洋、西は東京湾、北は利根川へと注ぐ中小の河川が複雑に入り組んでいる。これら河川によって、台地には樹枝状に小支谷が刻まれ、極めて数多くの舌状台地が形成されている。そのような地形的概観を呈する下総台地のほぼ中央に成田市は位置する。

遺跡は成田市三里塚字馬場²⁸⁹他に所在する。この周辺は、市西方の印旛沼へと注ぐ高崎川、利根川水系の根本名川、太平洋水系の栗山川支流高谷川、木戸川の源を発する地に当たる。このように、成田市東部の遺跡付近は、各水系の分水界部となっている。そのため台地は、あまり開析をうけず、平坦部を多く残している。

山武郡成東町に河口をもつ木戸川は、その最上流で、調査区のII区とIV区との間を北東に入る谷と、III区の中間を北西に向かう谷とを形成している。今回調査した4地点のうち、第1地点は北東に入る谷に面する緩やかな斜面に立地する。第2地点は、北西に入る谷の北側で南に面する。第3地点は、谷部に当たり、調査の際僅かに湧水を認めた。第4地点は、谷の南側の平坦部から斜面にかけてである。

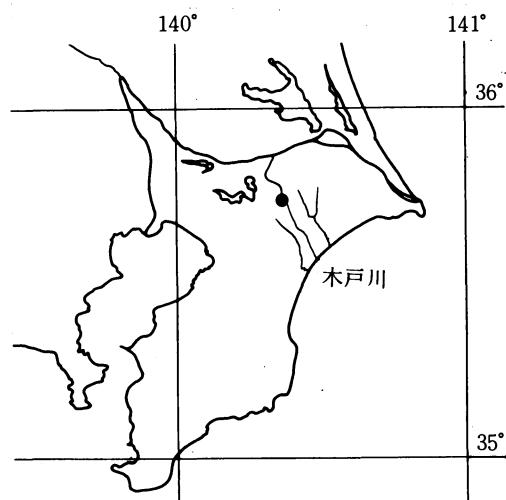
遺跡内の標高は、34mから40mで、調査前は畠地や栗林、荒地となっていた。

遺跡の北側には成田空港が建設され、その周辺も環境を変化させている。こういった状況の中で、発掘調査され、過去の人々の生活跡を明らかにした遺跡も存在している。次にこれらの遺跡について概観しておきたい。

三里塚を中心とした地域の、調査された遺跡の特色として、先土器・縄文時代の遺跡が多いことが揚げられる。第2図中の遺跡は、空港工事に伴い調査された遺跡が多い。^(註1)2は空港用地内に所在するNo.55遺跡であり、以下^(註2)3=No.13遺跡、^(註3)4=No.6遺跡、^(註4)5=No.5遺跡、^(註5)6=No.3遺跡となっている。特に昭和45年に調査されたNo.55遺跡は、下総台地では画期的といわれた橢円形石器を出土した遺跡として知られる。二次調査として昭和51年に実施したNo.5遺跡では、ソフトローム層中から石材に安山岩を主にする石器群が出土している。同52年に行ったNo.6遺跡では、ハードローム層中から、スクレイパーを中心とする石器群が検出されている。

高崎川上流の印旛郡富里村にも先土器時代の遺跡が多く存在している。^(註6)7は、東内野型尖頭器と呼ばれる特徴的な石器を出土した、東内野遺跡である。下総台地の先土器時代の遺跡としては、定形的な石器出土量が極めて多く、特異といえる。東内野周辺には石槍を多数出土した南大溜袋遺跡をはじめ、^(註7)8の久能下池田遺跡、^(註8)北大溜袋遺跡等がある。

上述した先土器・縄文時代を中心とする遺跡を囲むように、古墳時代の遺跡が所在している。



- 1. 三里塚馬場遺跡
- 2. 成田空港用地内No.55遺跡
- 3. 同 No.13遺跡
- 4. 同 No.6 遺跡
- 5. 同 No.5 遺跡
- 6. 同 No.3 遺跡
- 7. 東内野遺跡
- 8. 久野下池田遺跡
- 9. 日吉倉遺跡
- 10. 東和田遺跡
- 11. 川栗台古墳群

第2図 遺跡周辺地形図

古墳・集落を構成していた、9=日吉倉遺跡、10=東和田遺跡、11=川栗台古墳群等近接した遺跡が立地している。また、北西には成田ニュータウン内遺跡群が、北には、浅間台古墳、野毛平高台遺跡が存在する。
(註10)
(註11)
(註12)
(註13)
(註14)

木戸川流域、特に山武郡芝山町周辺では、縄文～古墳時代の複合遺跡が密に分布する。しかし、今日のところ先土器時代の遺跡については、その実態が明らかでない。いずれこの流域の先土器時代についても、研究される機会がもたられるであろう。その発端として、木戸川最奥部の本遺跡を調査したことは、一つの意義があったと思われる。

参考文献

- (註1) 古内茂他 「No.55遺跡」 『三里塚』 財団法人千葉県北総公社 (昭和46年)
- (註2) 中山吉秀 「No.13遺跡」 前掲『三里塚』所収
- (註3) 野口行雄他 「No.6 遺跡」 『木の根』所収 財団法人千葉県文化財センター (昭和56年)
- (註4) 古内茂他 「No.5 遺跡」 前掲『木の根』所収
- (註5) 渡辺智信他 「No.3 遺跡」 前掲『三里塚』所収
- (註6) 戸田哲也・篠原正他 『東内野遺跡発掘調査概報』第一次・第二次・第三次 東内野遺跡発掘調査団 (昭和52・53・54年)
- (註7) 戸田哲也 「千葉県南大溜袋遺跡の調査」 『考古学ジャーナル』No.78 (昭和48年)
- (註8) 篠原正他 『久能下池田遺跡』 日本国文化財研究所 (昭和52年)
- (註9) 篠原正 『北大溜袋遺跡発掘調査報告』 北大溜袋遺跡発掘調査会 (昭和55年)
- (註10) 栗本佳弘 「日吉倉遺跡」 『東関東自動車道(千葉-成田線)関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 千葉県文化財保護協会 (昭和46年)
- (註11) 栗本佳弘 「東和田遺跡」 前掲『東関東自動車道(千葉-成田線)関係埋蔵文化財発掘調査報告書』所収
- (註12) 小川和博・工藤英行 「川栗台古墳群発掘調査報告書」(1)『成田市の文化財』第10輯所収 成田市教育委員会 (昭和54年)
- (註13) 白石竹雄・天野努 『公津原II』 千葉県教育委員会 (昭和56年)
- (註14) 谷旬・奥田正彦 『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 財団法人千葉県文化財センター (昭和55年)

第2節 遺跡の概要

本遺跡は、調査前の表面採集で、石鏃や縄文式土器の小破片を採集することができた。このことから、縄文時代の遺構・遺物の検出を予測した。しかし、二次の調査の結果、時期不明の遺構と、先土器時代の遺物を出土する遺跡であることが明らかになった。

4地点で検出された遺構・遺物の概要は、次のとおりである。なお、石器集中地点のA～Mについては、整理の段階で上層から任意に付した。

・第1地点（第3図）

第VII層で3個所の石器集中地点を検出。

H=剥片類・石核。

I=ナイフ形石器・剥片類。

J=スクレイバー・チョッピングツール・チョッパー・剥片類。

・第2地点（第4図）

001～004号跡の遺構と、第IV～VI層でF・G、第VII層でKの石器集中地点を検出。

001号跡=陥穴状土壙。

002・003号跡=豎穴状遺構。

004号跡=溝状遺構。

F=スクレイバー・剥片類。

G=剥片類。

K=スクレイバー・剥片類。

・第3地点=005号跡（第36図）

中央にピットを配する壠状遺構を検出。

・第4地点（第5図）

006号跡と、第III層にA・B・C、第IV～VI層でD・E、第VII層でL・Mの石器集中地点を検出。

006号跡=陥穴状土壙。

A=細石刃・細石刃核・ナイフ形石器・スクレイバー・剥片類・石核。

B=尖頭器・ナイフ形石器・剥片類。

C=ナイフ形石器・剥片類・石核。

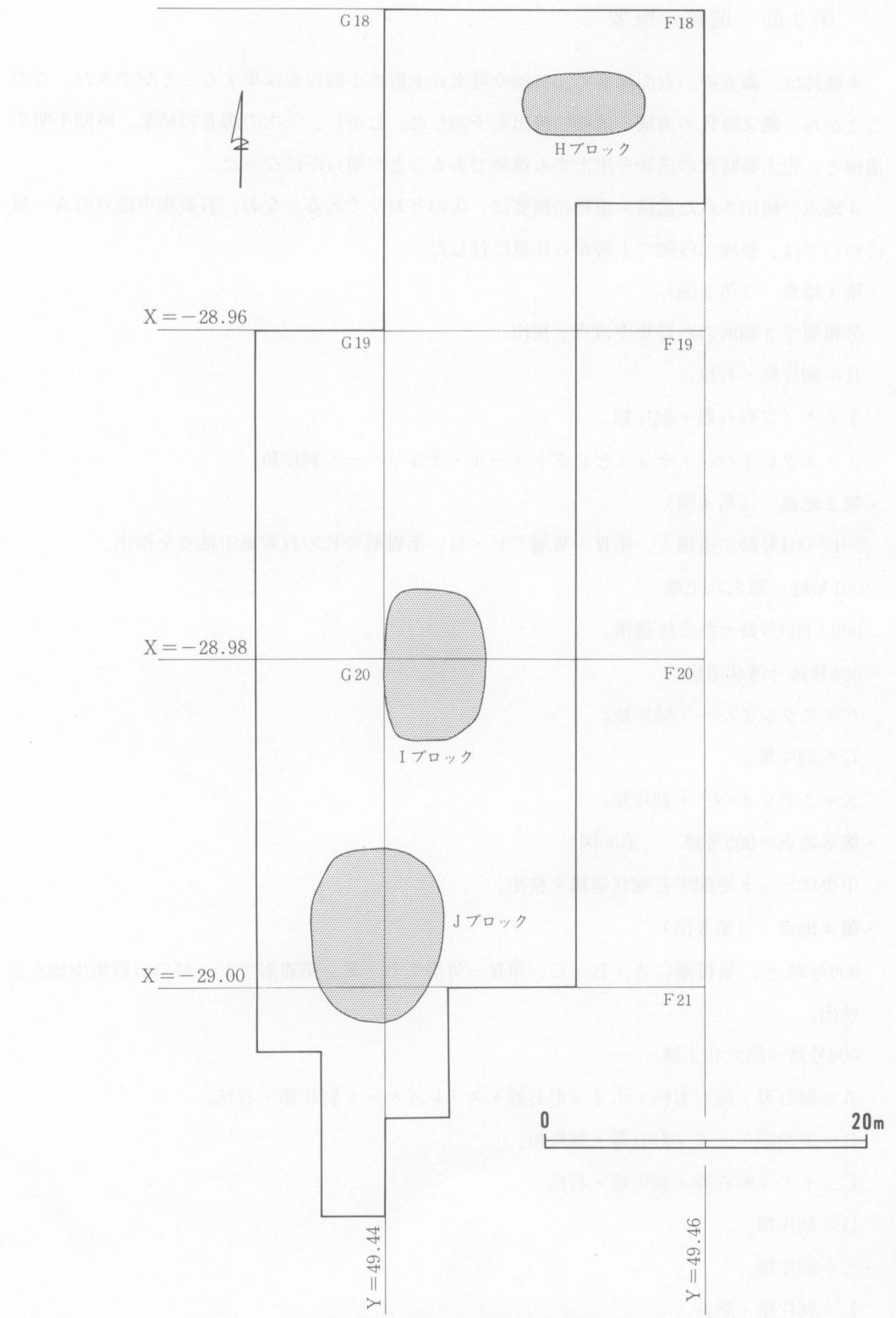
D=剥片類。

E=剥片類。

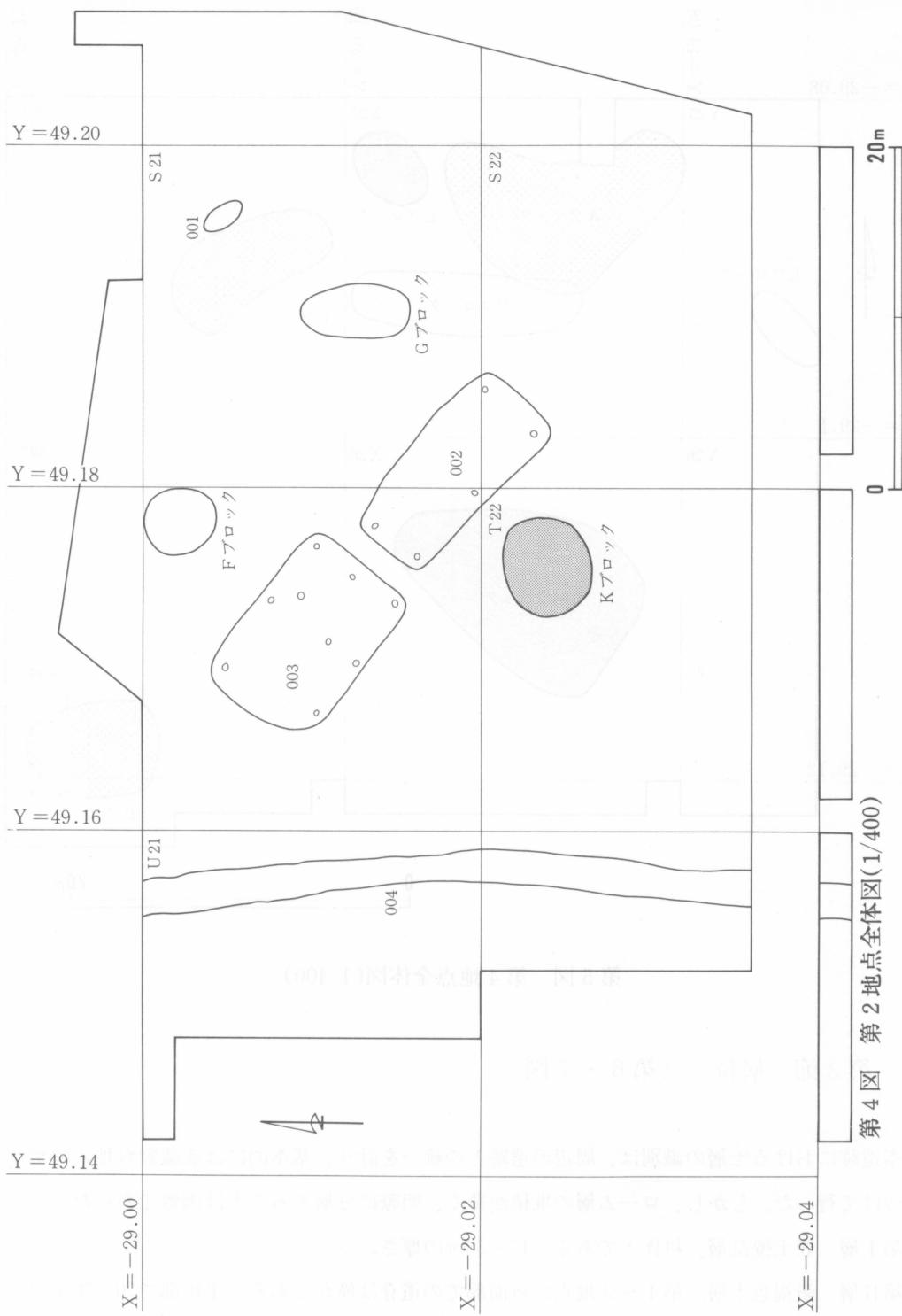
L=剥片類・敲石。

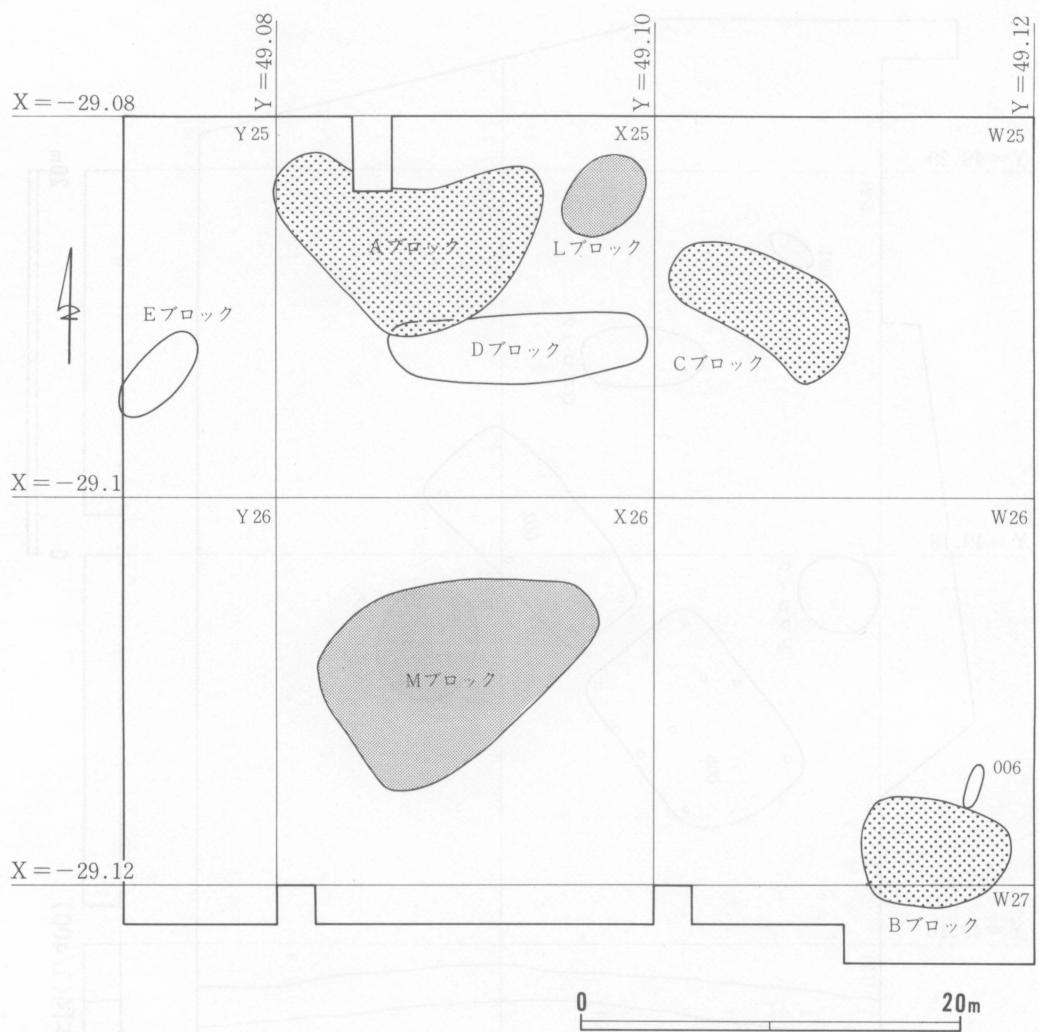
M=剥片類・石核。

以上が4地点で検出された、遺構・遺物の概要である。



第3図 第1地点全体図(1/400)





第5図 第4地点全体図(1/400)

第3節 層位 (第6・7図)

本遺跡における土層の識別は、周辺の遺跡との統一を計り、基本的には武藏野台地の呼称に近づけて行った。しかし、ローム層の堆積が薄く、明瞭に分層することは困難であった。

第I層 表土攪乱層。耕作土である。15~30cmの厚さ。

第II層 暗褐色土層。第1~3地点の斜面部での遺存は僅かである。平坦部で20~30cmの厚さがある。

第III層 黄褐色軟質ローム土層。いわゆるソフトローム層である。第1・2地点では薄くなつておらず、第4地点の平坦部で30cm前後の厚さがある。

第IV～V層 褐色硬質ローム土層。第IV層はいわゆるハードローム層である。武藏野台地における立川ローム層の第1黑色帯に相当する層は、千葉県では、西側の一部を除いては、土層の色調によって識別することは難しくなっている。本遺跡においても第IV層と第V層との分層は不可能であるが、一応第V層の存在も考えられるため、第IV～V層とすることにした。

第VI層 明黄褐色ローム土層。硬質で上・下の層より明るい。始良丹沢パミスを含む層と思われる。斜面では、本層の下位までソフト化される。厚さは平坦部で20cmほどである。

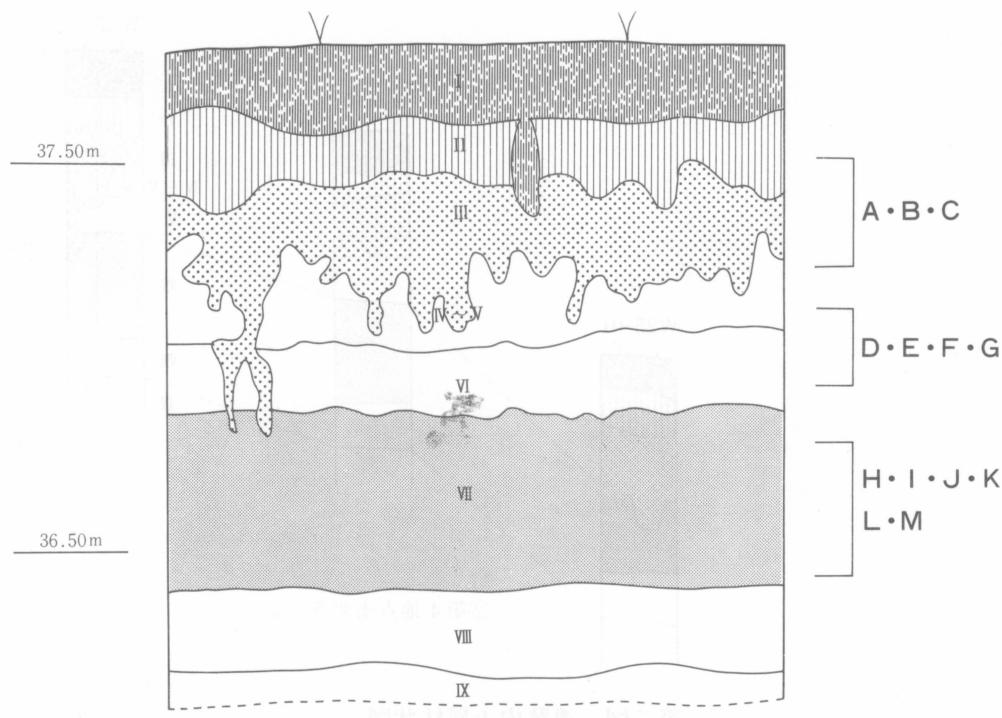
第VII層 暗褐色ローム土層。立川ローム層の第2黑色帯に相当する。赤褐色・黒褐色のスコリアを含み、粘性をもつ。

第VIII層 褐色ローム土層。立川ローム層の最下層。第VII層との境は明確でない。第VII層下位で粘性が弱くなり、スコリアも減少してくる。そこを分層の目安とした。

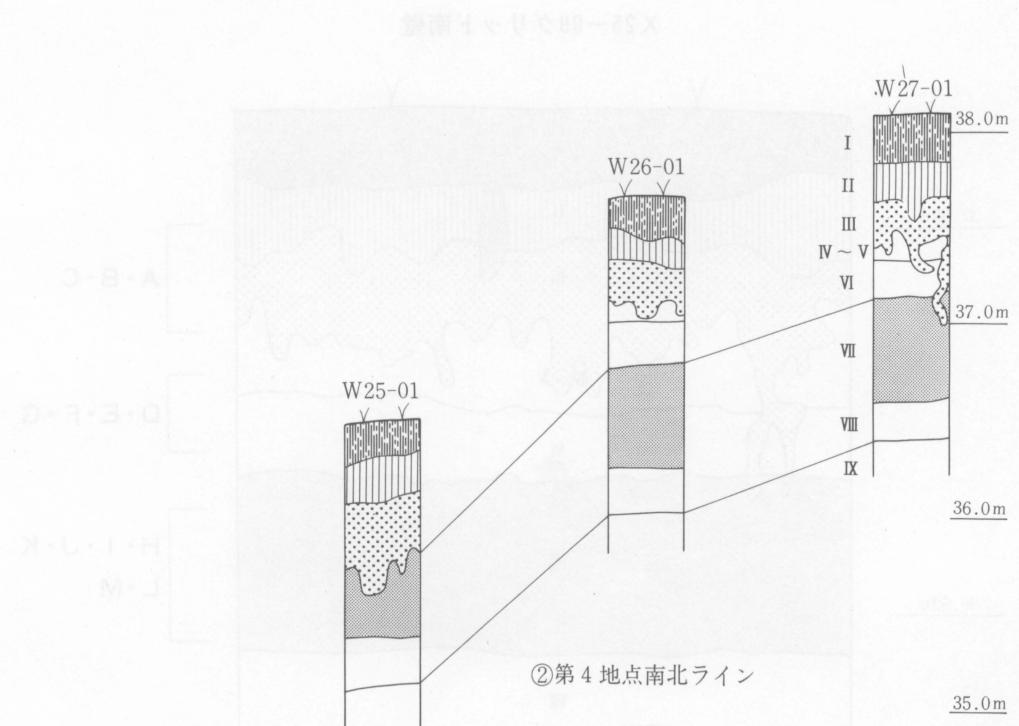
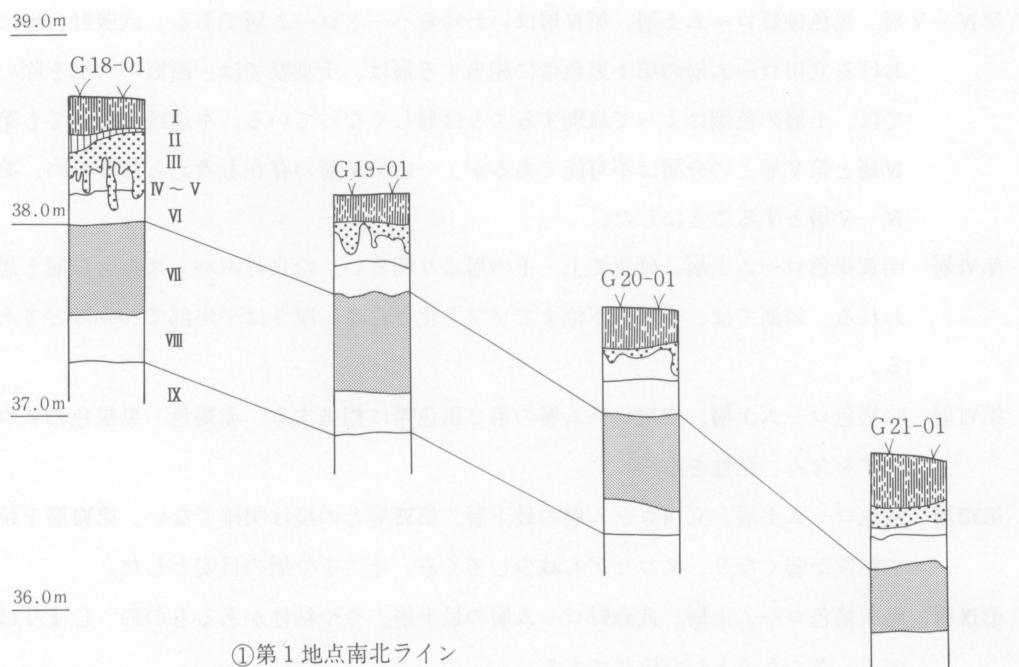
第IX層 暗灰褐色ローム土層。武藏野ローム層の最上層。やや粘性があるものの、しまりは弱く、さくさくとした感じである。

以上が遺跡内の標準的な層序である。

X 25-09 グリッド南壁



第6図 標準土層(1/20)



第7図 遺跡内土層柱状図

第3章 検出した遺構と遺物

第1節 先土器時代

先土器時代の遺物は、単独で出土する例もあるが、一定の範囲の中に集中して出土する場合が多い。本遺跡でも出土点数は少ないが、こういった出土状況を捉えることができた。このような石器集中地点は、ブロック、ユニット等と称されるが、ここでは、ブロックという用語を使用した。

二次の調査の結果、3地点で13のブロックを検出した。第III層で3個所、第IV～VI層で4個所、第VII層で6個所である。

検出された各ブロックの出土状況と、出土遺物は以下のとおりである。

・ A ブロック (第8・9・10・11図)

本ブロックは、III区を北東に入る谷の南側で、平坦部の縁辺に当たるX25内に位置する。X25-17グリッドを主に東西約14m、南北約10mほどの範囲に出土した。出土状況は、あまり密集した様子ではなかった。遺物は、第II層中位から第III層下位にかけて出土したが、その多くは、第III層上位から中位の間での出土であった。第11図の土層断面図は、谷寄りの東西ラインであるため、平坦部の遺物出土層位は正確に投影されていない。

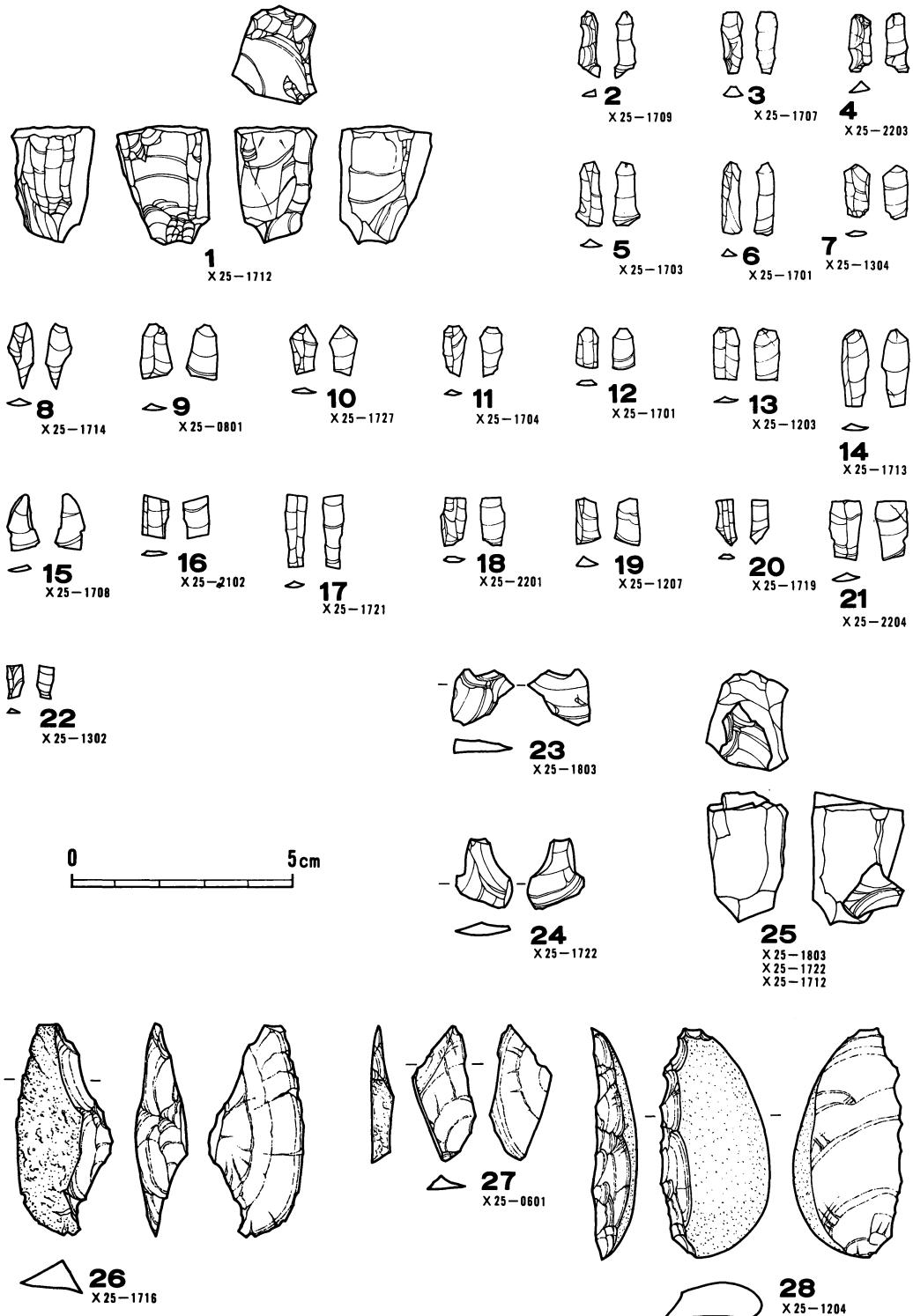
出土遺物総数は56点である。これは第III層で検出したブロックの中で最多である。遺物は、細石刃核1点、細石刃21点、ナイフ形石器2点、スクレイバー1点、剥片類26点、残核4点、礫片1点で、石材別では、チャート43点、安山岩12点、凝灰岩1点となる。

細石刃核（1） 円柱形を呈する細石刃核で、二方向からの剥離で打面が調整される。細石刃は、打面調整を丁寧に施した面のある側から主に剥離される。チャート製である。

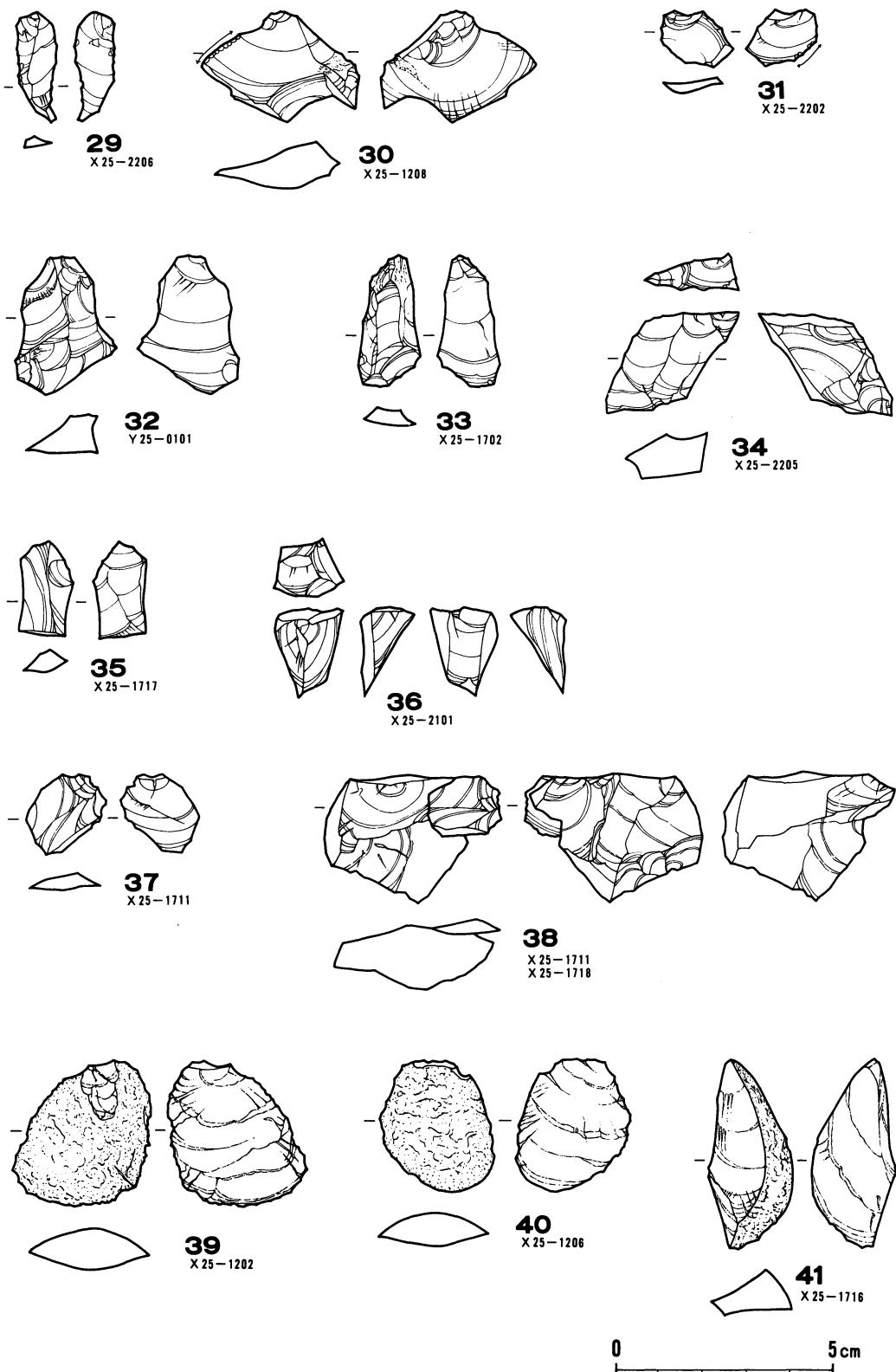
細石刃（2～22） すべてチャート製である。石材の質感・色調からみて、1以外の細石刃核より剥離されたと思われる細石刃も数点存在する。完存するのは2～8の7点で少数である。2～4には横からの剥離痕が認められ、剥離開始初期での所産と考えられる。9～15はいわゆる尾部を欠損している。16は頭部と尾部の中間であり、17～22は頭部を欠いている。

ナイフ形石器（26・27） 2点とも安山岩の横長剥片を素材にしている。26は、自然面を残す横長剥片の打面側に調整を加えている。先端部を欠損し、残存器長4.7cm、器幅2.2cm。27は、先端部の片縁に僅かに調整を施し、ナイフ形石器としている。小形で器長3.0cm、器幅1.4cmである。

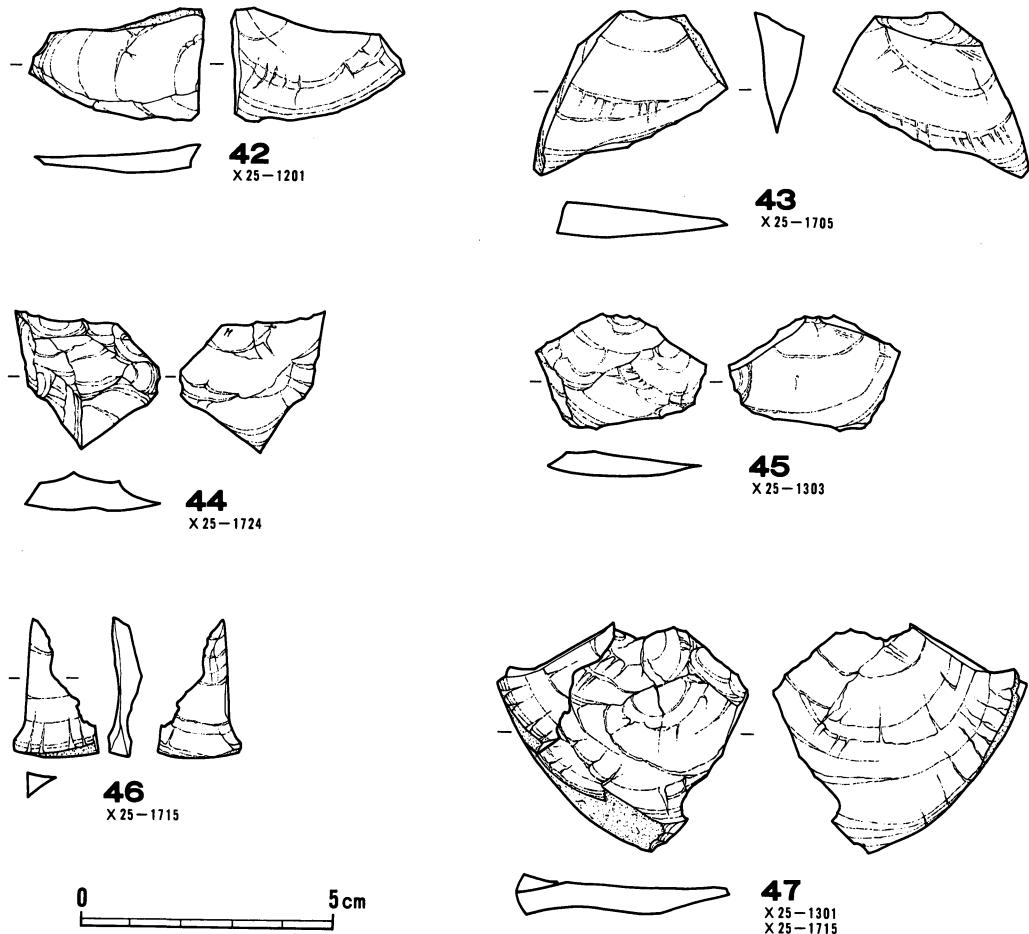
スクレイバー（28） 自然面を残す剥片の片縁に刃部を作り出す。サイドスクレイバーの一種であり、尖頭削器と称される器種に近いと考えられる。安山岩製であるが、本ブロックで検出した他の安山岩と、質を異にしている。器長5.1cm、器幅2.5cm。



第8図 Aブロック出土遺物①



第9図 Aブロック出土遺物②

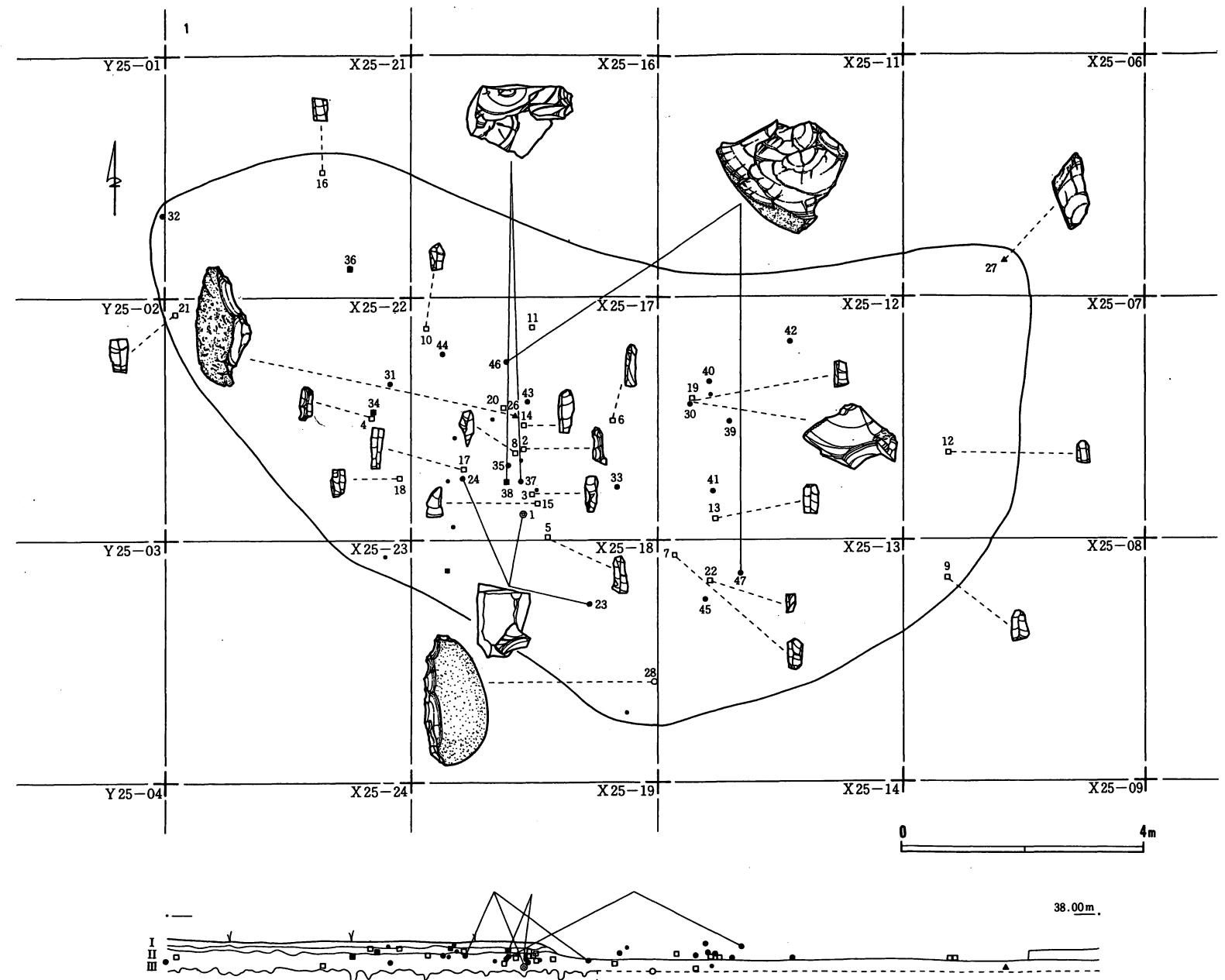


第10図 Aブロック出土遺物③

剥片類（29～33・35・39～47） 石核から連続して剥離されたような、定形的な剥片はない。母岩も数個存在していたと考えられる。29～33・35はチャート製である。29～31には使用痕が認められる。39～47は安山岩製である。自然面を残すものが多く、質・色調が近似している。

石核（34・36・38） いずれもチャートの残核である。打面は剥離した面を使用し、移動しながら剥離を繰り返したと思われる。

接合資料（25・38・47） 25は1つの細石刃核に23・24の剥片が接合したものである。23は、打面調整で生まれた剥片である。24は、細石刃核自体を調整するため、その工程の初期に剥離された剥片である。24の剥片が剥離された後、その面を使用して細石刃は剥離されていない。検出した21個の細石刃の中で、細石核と接合した例は存在しなかった。38は、37の剥片と石核が接合した資料である。37を含む石核から1枚の剥片が剥離され、それから37の小片が剥がされている。47は、2点の剥片が接合したものである。この2点の剥片の打点は近接している。



第11図 Aブロック遺物出土状況(1/80)

第1表

細石刃一覧表

No	器長	幅	厚さ	備考	No	器長	幅	厚さ	備考
2	15.0	4.3	1.9	完存	13	11.4	6.2	1.2	尾部欠損
3	14.0	4.3	2.0	〃	14	17.0	6.4	1.3	〃
4	13.4	5.2	2.4	〃	15	12.5	6.5	1.3	〃
5	14.4	6.4	1.5	〃	16	9.9	6.2	0.9	中間部
6	16.4	3.9	1.6	〃	17	15.8	4.9	1.1	頭部欠損
7	12.5	5.1	1.0	〃	18	11.0	6.0	1.2	〃
8	14.9	5.2	1.5	〃	19	10.0	5.0	2.3	〃
9	11.8	6.9	1.2	尾部欠損	20	12.0	3.8	1.4	〃
10	10.8	5.9	1.0	〃	21	13.7	7.3	1.6	〃
11	11.0	4.8	1.3	〃	22	8.0	3.5	1.0	〃
12	9.2	4.9	1.0	〃					

(単位 mm)

・Bブロック (第12・13図)

本ブロックは、第4地点の台地先端部から南へ30mの平坦部に位置する。X26-05グリッドを主に東西約6m、南北約4mの範囲の中で散発的に出土した。出土層位は、第II層から第III層中位である。第III層の遺存度は比較的良好である。

出土遺物総数は13点と少量である。Aブロックと層位的には近いが、細石刃を含まない。石器は、尖頭器1点、ナイフ形石器1点、剥片類11点である。石材別に分類すると、メノウが11点で最も多く、安山岩1点、その他1点となる。

尖頭器(1) 縦長剥片の素材の表面のみを調整した片面加工の尖頭器。断面は三角形を呈する。片面の加工は中央にまでは達せず、一部に自然面を残す。安山岩製。器長4.1cm、器幅1.8cm。

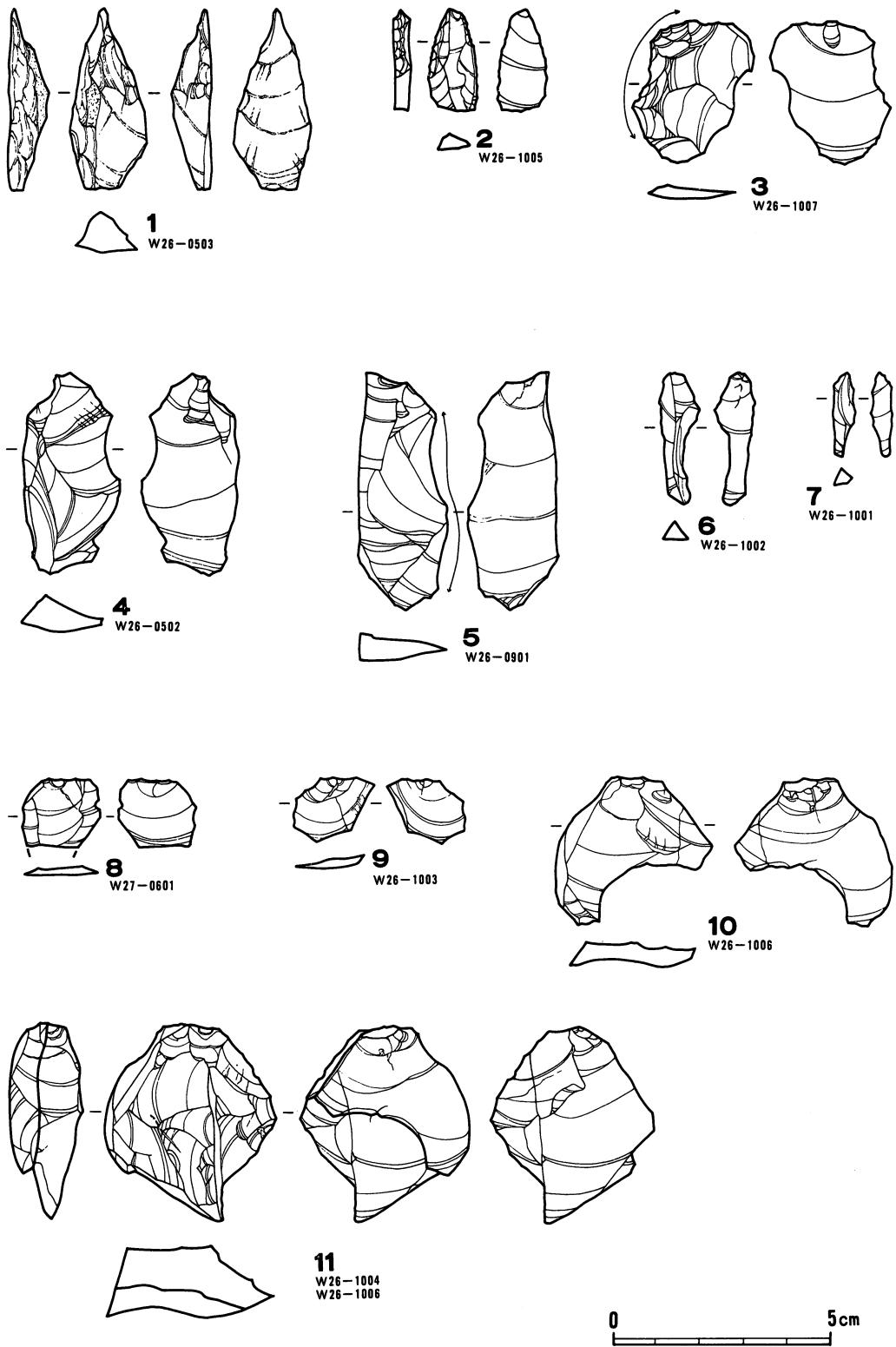
ナイフ形石器(2) 両縁に小さな加工痕をもつ。表の左側縁にプランティングが施されている。メノウ製の縦長剥片を使用する。器長2.3cm、器幅1.1cmと小形なナイフ形石器である。

剥片類(2~11) 母岩を同一とすると思われるメノウ製の剥片である。3には加工痕が認められる。5は鋭利な片縁に使用痕がある。この他には小剥片が出土している。

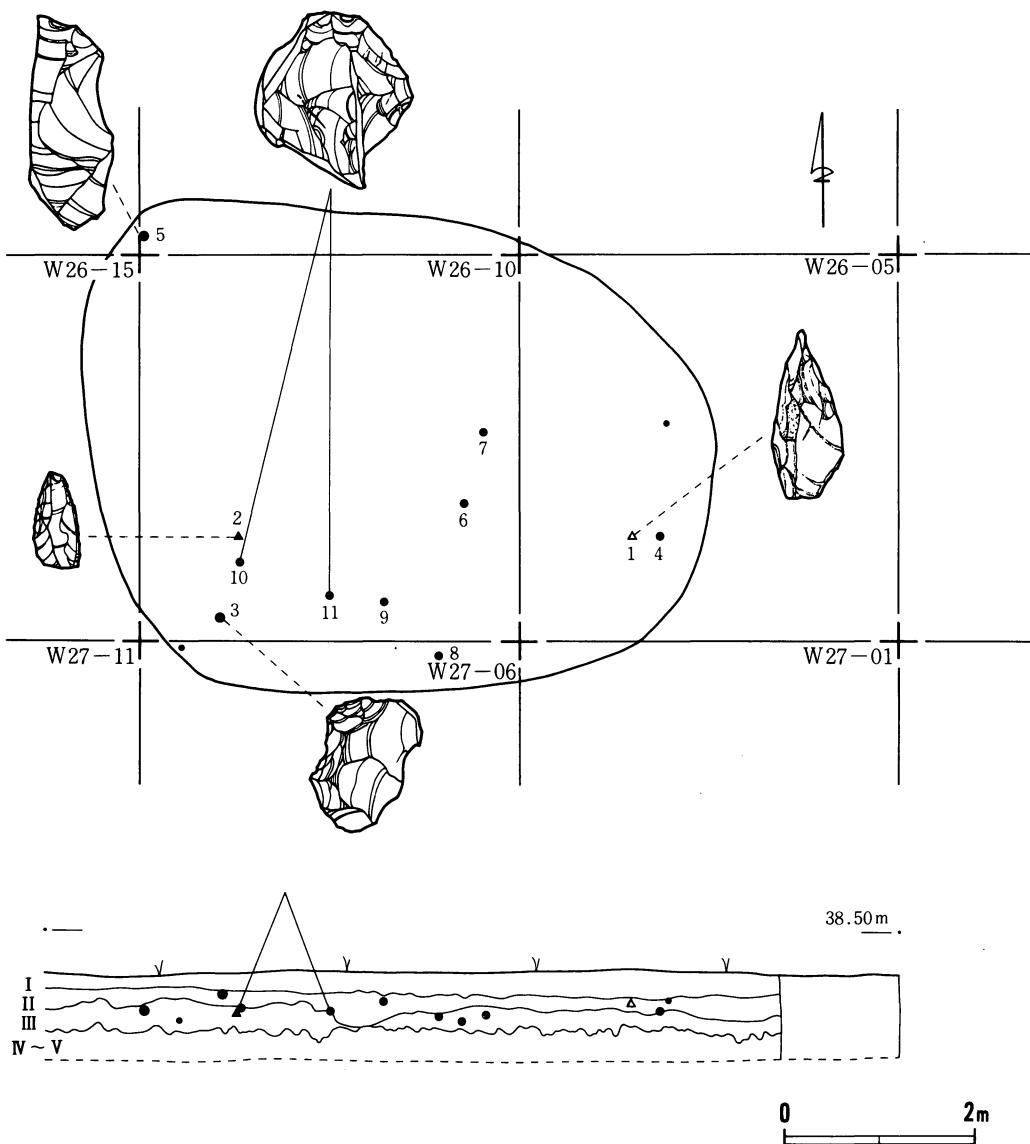
接合資料(11) 2点の剥片が接合した。この2点の剥片は、同一の打面から剥離されている。打面は一定していたとは考えられず、11の表面には、別方向から数枚の剥離面が観察される。

・Cブロック (第14図)

本ブロックは、第4地点、谷の南側平坦部先端に当たる、W25グリッド内で検出された。東西約6m、南北約8mの範囲の中に散発的に出土した。出土層位は第III層上位であるが、まとまりが弱く、石器集中地点とするには問題がある。接合資料も含まれるため、一応一つのブロックとして考えた。



第12図 Bブロック出土遺物



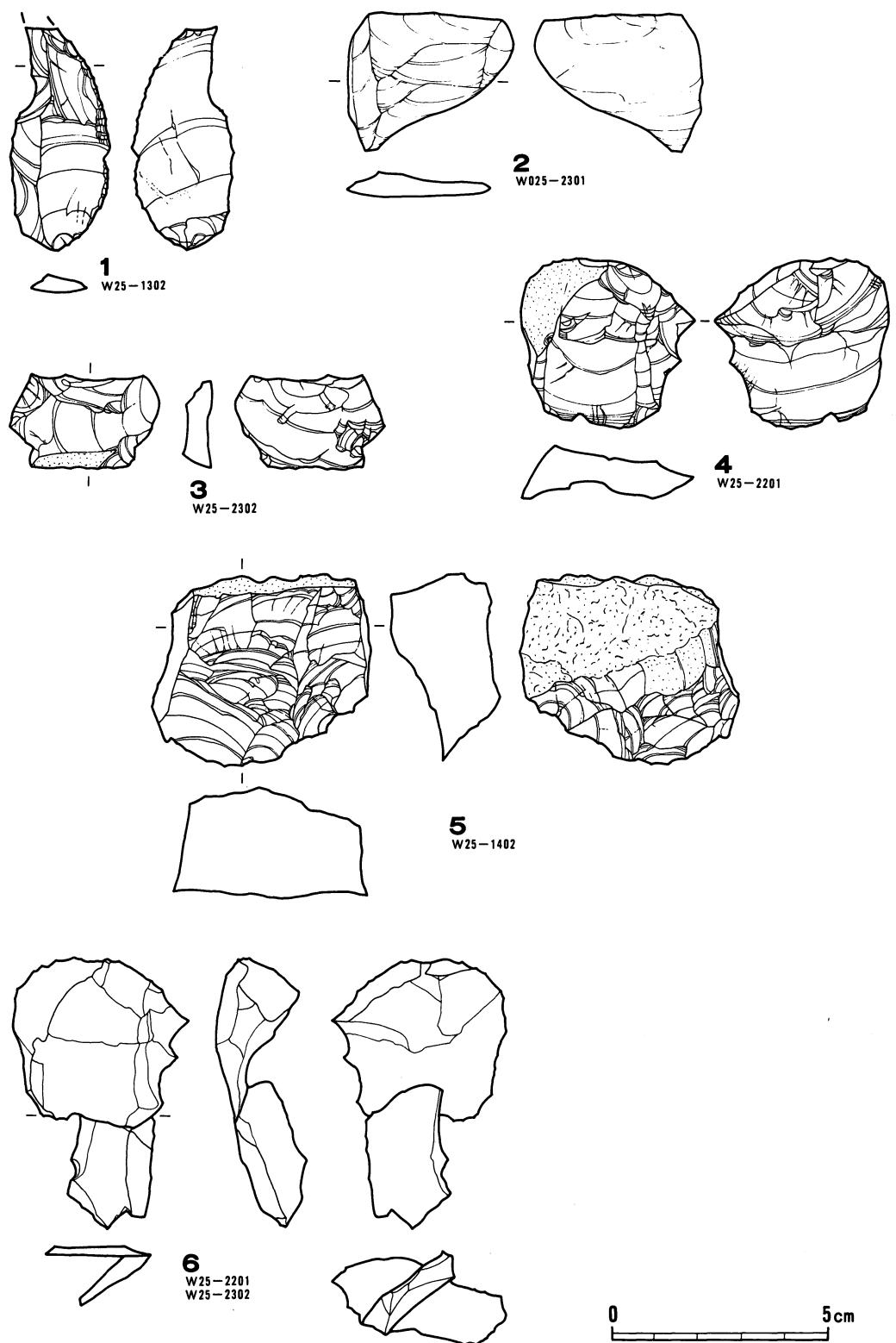
第13図 Bブロック遺物出土状況(1/80)

出土遺物総数は6点である。石器は、ナイフ形石器1点、剥片類4点、石核1点である。石材別では、チャート3点、メノウ1点、砂岩1点、石英1点となる。

ナイフ形石器（1） 縦長剥片の片縁を刃部とし、もう一方の縁すべてに小さな調整を施している。調整角度が小さいため、サイドスクレイパーとみることも可能であろう。チャート製。先端部を欠損する。残存器長5.1cm、器幅2.4cm。

剥片類（2～4） 2は砂岩で表面が磨滅する。3・4はチャート製である。

石核（5） 石材は石英で自然面を多く残す。剥片が剥離されているのは2面であるが、打面が残らないため、打面が存在した側は、一見刃部を作り出しているかのように、端部が鋭くなっている。



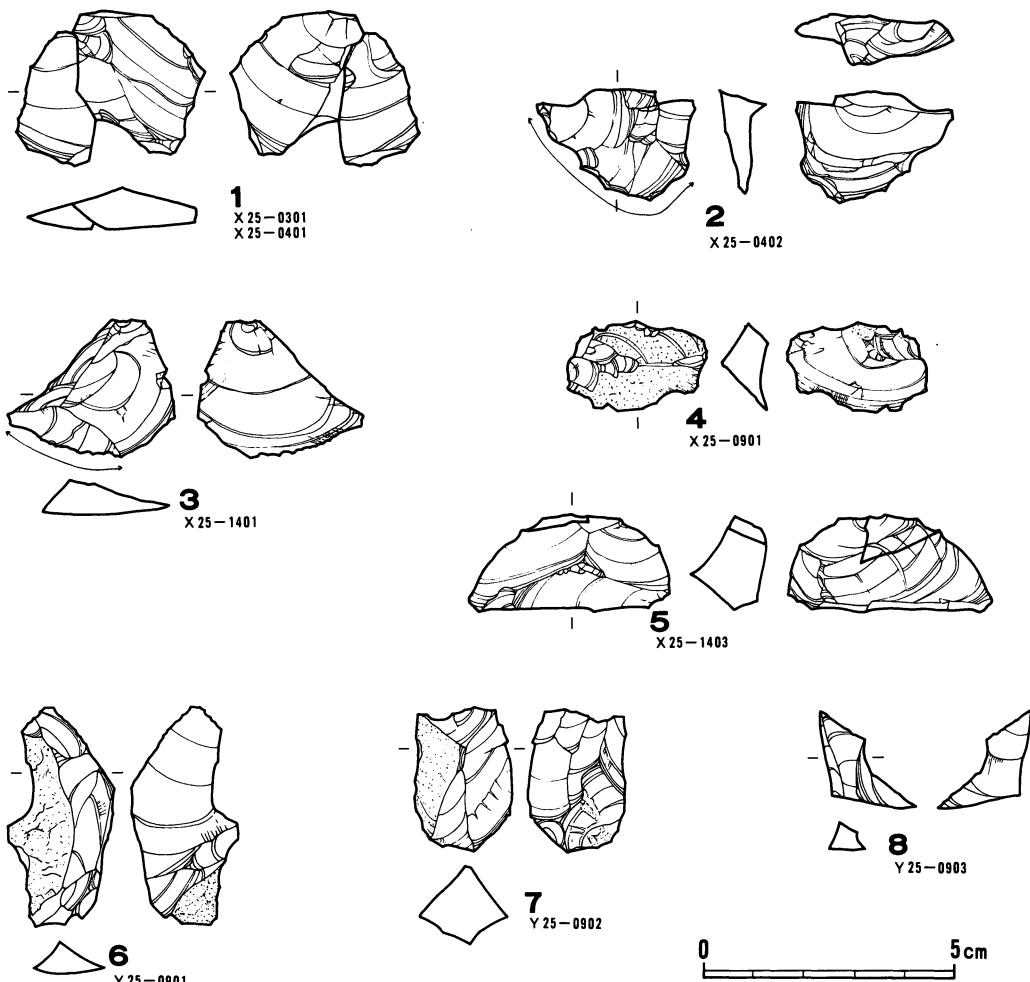
第14図 Cブロック出土遺物

接合資料（6） 3・4点の剥片が接合した。この2点の石材と、Aブロック出土の細石刃核、第33図2の尖頭器の石材とは酷似する。接合したのは本ブロックの2点のみであるが、これらは同一母岩から作出された可能性が強い。

以上3ブロックが、第III層で検出されたものである。いずれも第4地点での検出であった。

・Dブロック（第15図1～5）

本ブロックは、第4地点の平坦部X25グリッド内に位置する。厳密には、X25-04グリッド近辺のグループと、X25-14グリッドを中心とするものに分離することができる。一応一つのまとまりとすると、東西に約14m、南北約4m範囲をもつ。出土は散発的である。出土層位は、ハードローム層下位から第VII層上位である。立川ローム層の第1黒色帶に帰属すると考えられる。



第15図 D・Eブロック出土遺物(1～5=D・6～8=E)

出土遺物総数は8点である。剥片類7点、石核1点である。石材別ではメノウ5点、貞岩2点、黒曜石1点となる。

剥片類（1～4） 1は折断された剥片が、約50cmの間隔を置いて出土し、接合したものである。2は部分的に加工痕が認められる。1～3の石材はメノウである。4は本遺跡では出土数が少ない黒曜石の剥片で、自然面を残している。

石核（5） 破損したと考えられる小破片が1点接合する。図上方の打面からは2枚の剥片が剥離されている。貞岩製の残核である。

・Eブロック （第15図6～8）

本ブロックは、第4地点の平坦部、Y25-09グリッドに位置する。

出土遺物総数は4点と少量である。調査区域外の西方に広がる可能性がある。出土層位はDブロックとほぼ同様である。剥片類が3点で、石核が1点である。6はメノウ製剥片、7はメノウの石核、8ともう1点は貞岩の剥片である。

・Fブロック （第16図1～5・第17図）

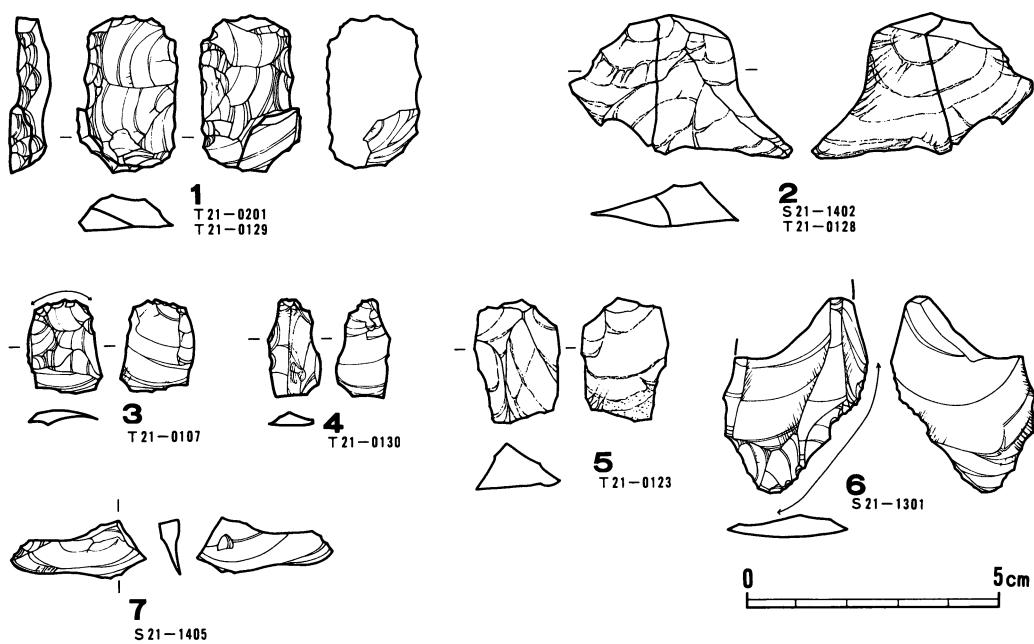
本ブロックは、第2地点の南向緩斜面T21-01グリッドに位置する。同グリッドを主に、直径4mほどの範囲に出土した。本地点の大部分は、表土層下に第II層が僅かしか遺存せず、第III層もハードローム層がソフト化されたような状態で、薄く堆積する。第17図中の土層断面では、第VI層に出土層位が投影される。発掘時の平面的な観察では、ハードローム層下位に帰属すると思われた。

出土遺物総数は35点である。これは、ほぼ同様な層で検出された4ブロック中最も数が多い。石器は、スクレーバー1点、剥片類34点である。出土総数に比して定形的な石器が1点と貧弱である。石材別では、玄武岩24点、黒曜石5点、チャート4点、貞岩1点、砂岩1点となる。

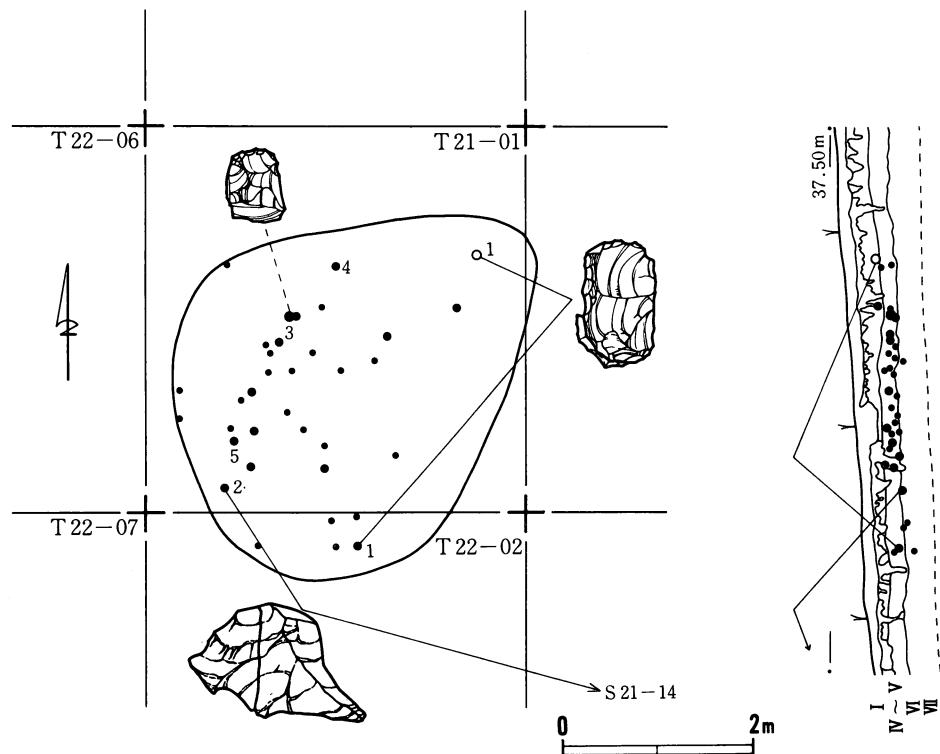
スクレーバー（1） 1点剥片が接合したため、製作過程の一端を知り得る資料となった。器種としては、エンドスクレーバーとしてよいであろう。接合した剥片の剥離後、両縁に調整が施される。これは、エンドスクレーバーに再調整を施し、略楕円形を呈する、ラウンドスクレーバーに再製しているとも考えられる。器長3.0cm、器幅1.9cmである。

剥片類（2～5） 剥片類の多くは、小剥片か屑片である。3は上縁に調整痕が認められ、1の調整剥片と考えられる。石材はチャート。5の石材は玄武岩である。本ブロック出土の剥片類は大部分が玄武岩製である。

接合資料（1・2） 1については前述したとおりである。2は1点の剥片が折断され、二つに分かれていたものが単に接合した資料である。ところがその一方は、本ブロックから出土したものではなく、16mほど離れたGブロックから出土している。両ブロックの同時期存在を証明する資料であろう。



第16図 F・Gブロック出土遺物(1~5=F・6~7=G)



第17図 Fブロック遺物出土状況(1/80)

・ G ブロック (第16図 6・7)

本ブロックは、Fブロックの南東16mのS 21-14グリッド付近に位置する。東西に約4m、南北約6mの範囲に散発的に出土した。出土層位はFブロックと同様である。

出土遺物総数は11点である。すべて剥片類の小規模なブロックである。石材は砂岩5点、黒曜石4点、頁岩2点となっている。

剥片類(6・7) 6には小さな調整痕が認められ、スクレイバー的な使用が考えられる。

6・7とも石材は頁岩である。他は小剥片がほとんどである。

以上4ブロックが、立川ローム層の第1黒色帯に相当するであろう層位から、第2黒色帯に当たる第VII層最上面で検出されたものである。

・ H ブロック (第18・19図)

本ブロックは、II区第1地点で検出された。第1地点は、北東に入る谷に面するため、南東に緩やかに傾斜する。さらにその地形を詳細にみると、西にも小さな谷が入り込むことが分かる。本地点はこの両方の谷にはさまれ舌状を呈している。3個所の石器集中地点がこの小舌状部で検出された。本ブロックは、この3個所の中で最も北側で、緩斜面の上方に位置している。

出土範囲は、F 18-12グリッドを中心に、東西約5m、南北約3mである。散発的な出土状況である。本ブロック周辺は、表土層が薄く、第II～III層の遺存が非常に悪くなっている。第IV層～VI層上位にかけても、ソフト化が進んでいるといった状況である。石器出土層位は、立川ローム層第2黒色帯に当たる第VII層である。主に中位から下位の間に出土した。

出土遺物総数は12点である。剥片類11点、石核1点で定形的な石器は含まれない。石材別では、砂岩6点、安山岩4点、泥岩2点となる。

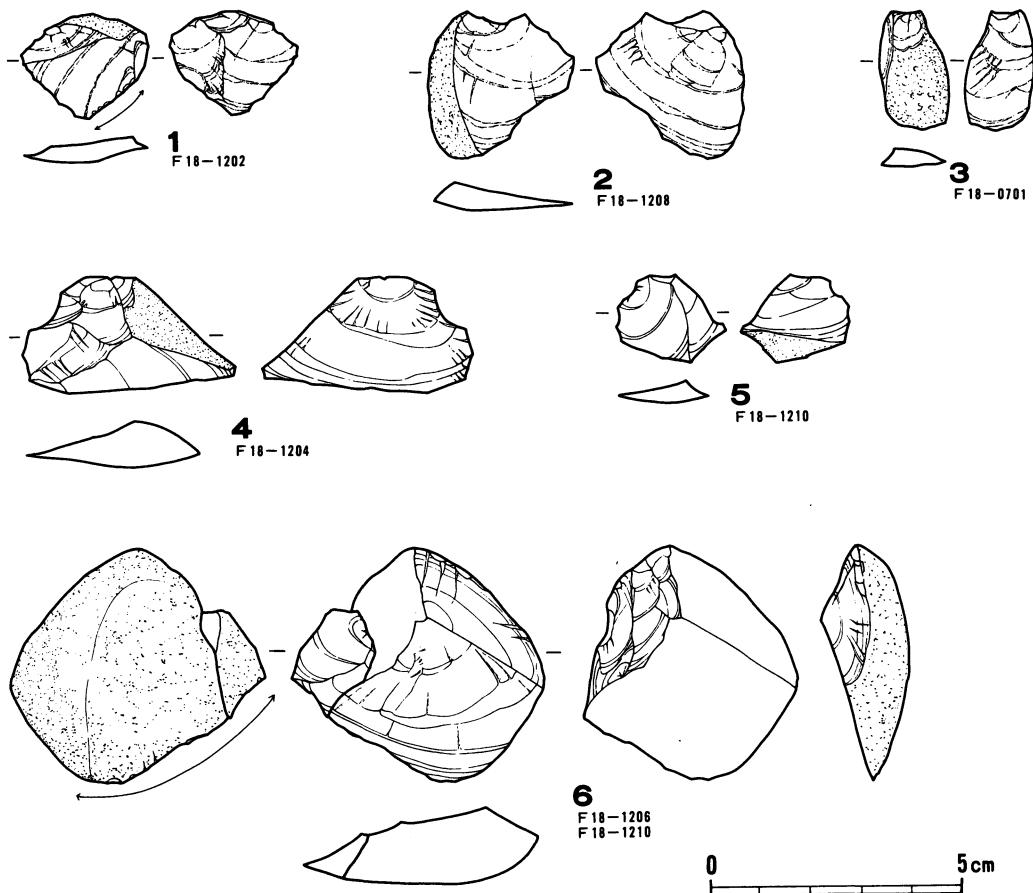
剥片類(1～5) 規則性をもつ定形的な剥片は存在しない。1～3はいずれも小形で、それぞれ自然面を残す、1には一部分に調整痕が認められる。石材は安山岩である。4・5は砂岩で自然面を残す。他には泥岩の小剥片等があるが、表面が磨滅している。

石核(6) 5の剥片が接合した。この接合した面には各方向からの剥離が観察され、他に2枚の剥離面が残る。表面は自然面である。周辺のうち最も縁の角度が鋭くなっている部分には使用痕が認められる。

・ I ブロック (第20・21図)

本ブロックは、Hブロック南約30mに位置し、本地点の3個所の石器集中地点の中間に当たる。F 20-21グリッドポイントを中心にして東西約4m、南北約8mの範囲の中に散発的に出土した。

遺物出土層位は、表土上面から僅か40cmで達する第VII層の第2黒色帯である。Hブロックと層位的に近いと考えられる。第VIII層との境が不明瞭であるため、断定はできないが、一部の出



第18図 Hブロック出土遺物

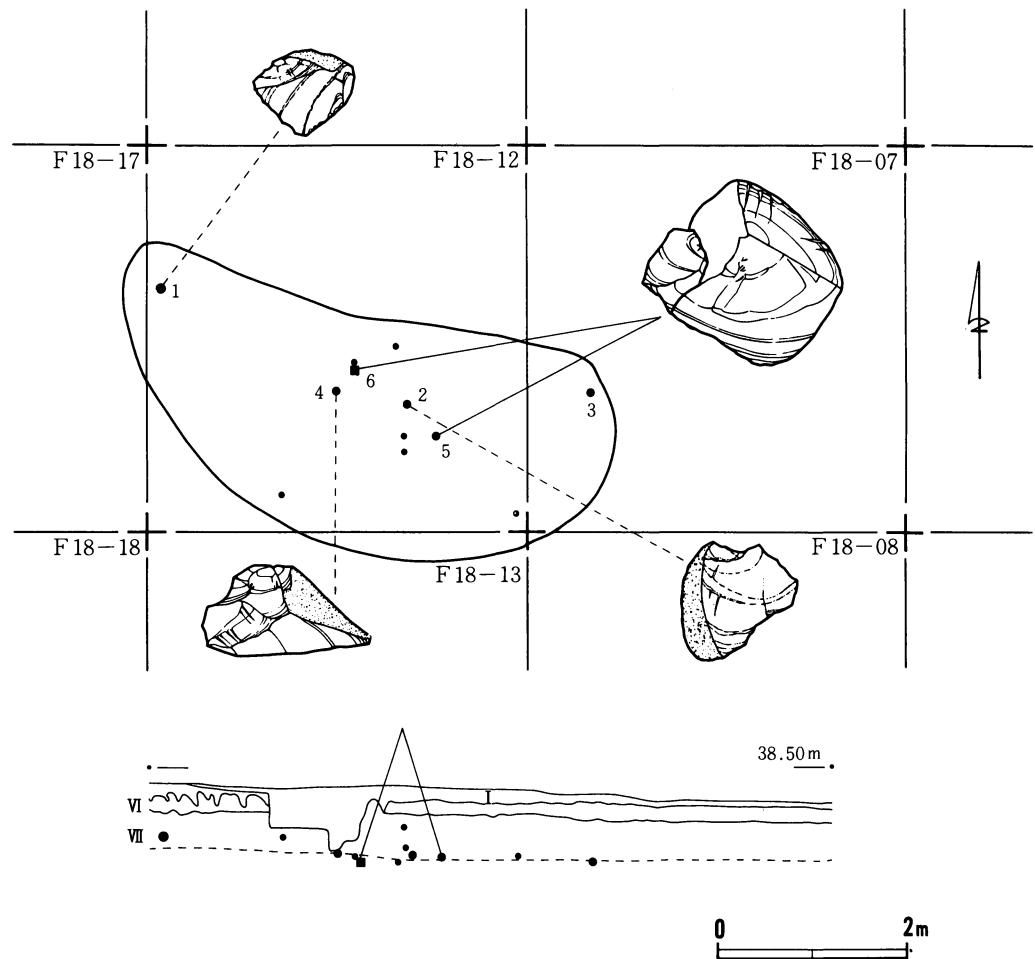
土は第VII層上面に当っていたかと思われる。

出土遺物総数は17点である。石器は、ナイフ形石器1点、剥片類16点となっている。石材別では、安山岩10点、チャート4点、泥岩3点となる。第VII層で検出された6個所のブロックの中で、石材にチャートを用いる石器を含むのは、本ブロックが唯一である。

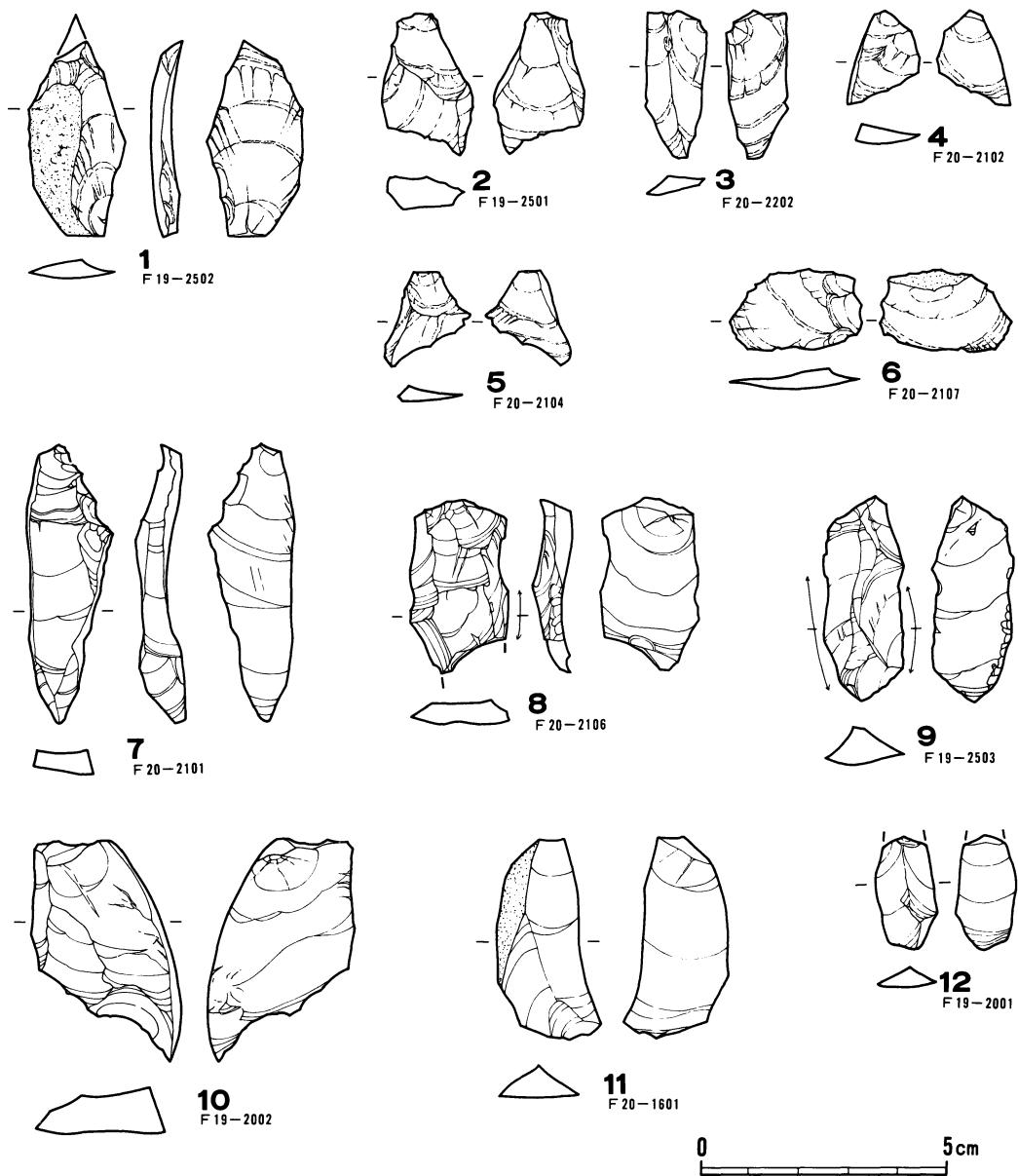
ナイフ形石器（1） 縦長の安山岩製剥片に調整を施し、ナイフ形石器としている。調整は、基部裏面の左側と、先端部の表に施されるが、両部位の調整とも剥離角は小さく、また、調整が大まかといえる。先端部を欠損するため、全体については不明である。残存器長は3.9cm、器幅は1.9cmである。

剥片類（2～11） 2～6の剥片は安山岩製である。規則性をもつ定形的なものは含まれず小形である。6は自然面を打面としたことが観察される。2～5の石材は、質感・色調等が近似している。7～10はチャート製の剥片である。7～9は、質が近似している。7の左側面には自然面を残す。8は先端部が折断され、欠損する。残存する右側縁の下位に、僅かな連続し

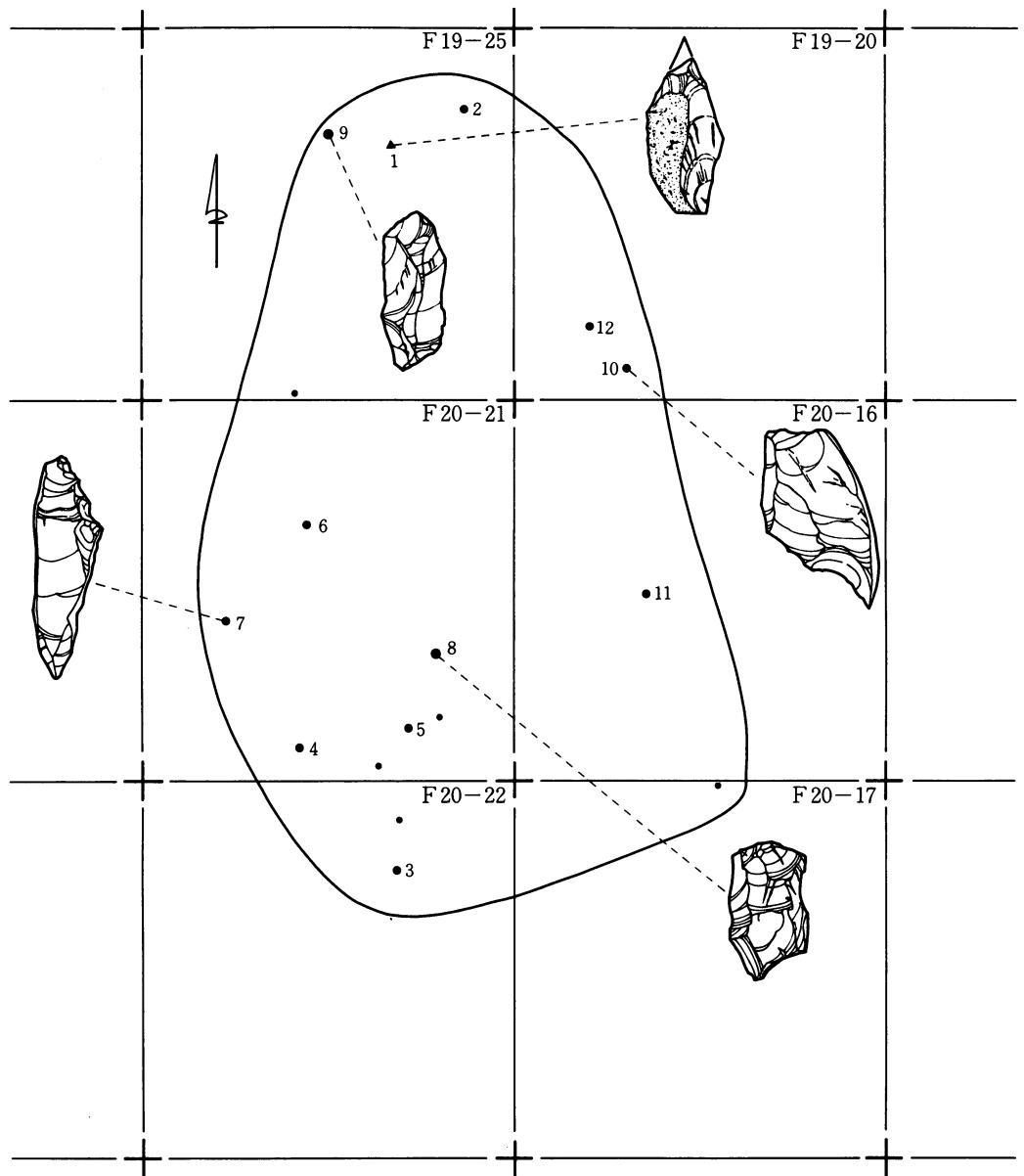
た調整痕が認められる。全体が残らないため、断定はできないが、ナイフ形石器であったとも考えられる。9は両側縁の中位から下位にかけて、小さく使用痕を残している。断面は三角形を呈し、石刃と呼べる剥片である。10は自然面を残し、他の3点のチャートとは質を異にする。11・12・の石材は泥岩である。軟質な石材であるため、表裏とも磨滅が著しい。11の一部には自然面が残る。



第19図 Hブロック遺物出土状況(1/80)



第20図 I ブロック出土遺物



36.00m.



0 2m

第21図 I ブロック遺物出土状況(1/80)

・ J ブロック (第22・23・24|刈)

本ブロックは、第1地点で検出されたブロック中、最も南に位置する。小舌状部の先端であり、谷に近い場所である。G 20-05グリッドポイント付近を中心に、南北に約6m、東西に約5mの範囲に出土した。出土状況は、比較的集中した様子を呈する。数点の遺物が、この範囲から離れて出土したが、これらも本ブロックに帰属すると考えた。また上記の範囲内でも、二つのまとまりを捉えることが可能である。一つは、剥片類を中心として、スクレイバーを含むまとまりである。もう一つは、礫器を中心とする小さなまとまりである。

遺物は、第VII層上位から出土し始めるが、主に出土したのは、中位から下位にかけてである。一部は第VIII層からの出土であったと思われる。本ブロックの南側では、第VII層上面までソフト化される場所がある。

出土遺物総数は78点である。これは今回の調査で検出したブロック中最多数となった。

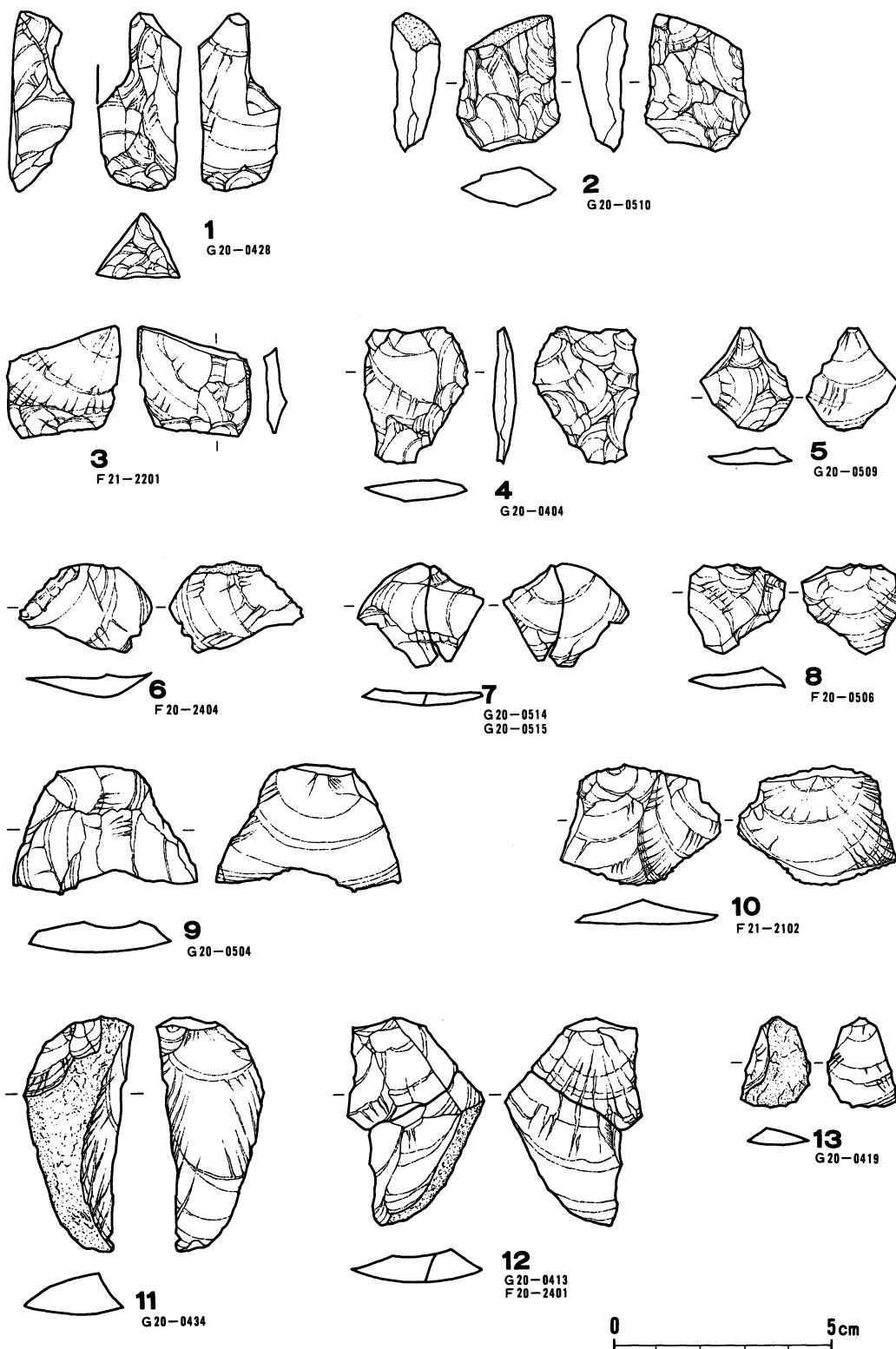
遺物は、スクレイバー状石器4点、チョッピングトゥール1点、チョッパー1点、台石状の礫1点、剥片類71点である。石材別分類では、安山岩56点、泥岩17点、礫器と礫が凝灰岩で3点、その他が2点で安山岩が最も多い。

スクレイバー（1～4） 1は断面が三角形を呈し、両縁が並行する縦長剥片を使用する。剥片の先端部に数回の打撃を加え、刃部を作り出している。エンドスクレイバーとして良いであろう。一部を破損する。器長4.1cm、器幅1.8cm。安山岩製である。2は上部に自然面を残すが、第一次剥離面は観察されない。両面・両側縁から数回剥離した後、縁部に細かく調整を施す。両側縁に刃部を設けた、サイドスクレイバーと考えられる。完存する。器長4.1cm、器幅2.4cm。安山岩製である。3は、剥片を使用したエンドスクレイバー状の石器である。剥片の下端部に、数回の剥離を施し刃部を設定する。刃部は、直線的である。完存し、器長2.6cmとなる。安山岩製である。4は剥片の片側に調整痕が認められる。両面から雑な剥離が施される。片刃のサイドスクレイバー状の石器であろう。器長3.0cm、器幅2.4cmである。安山岩製。

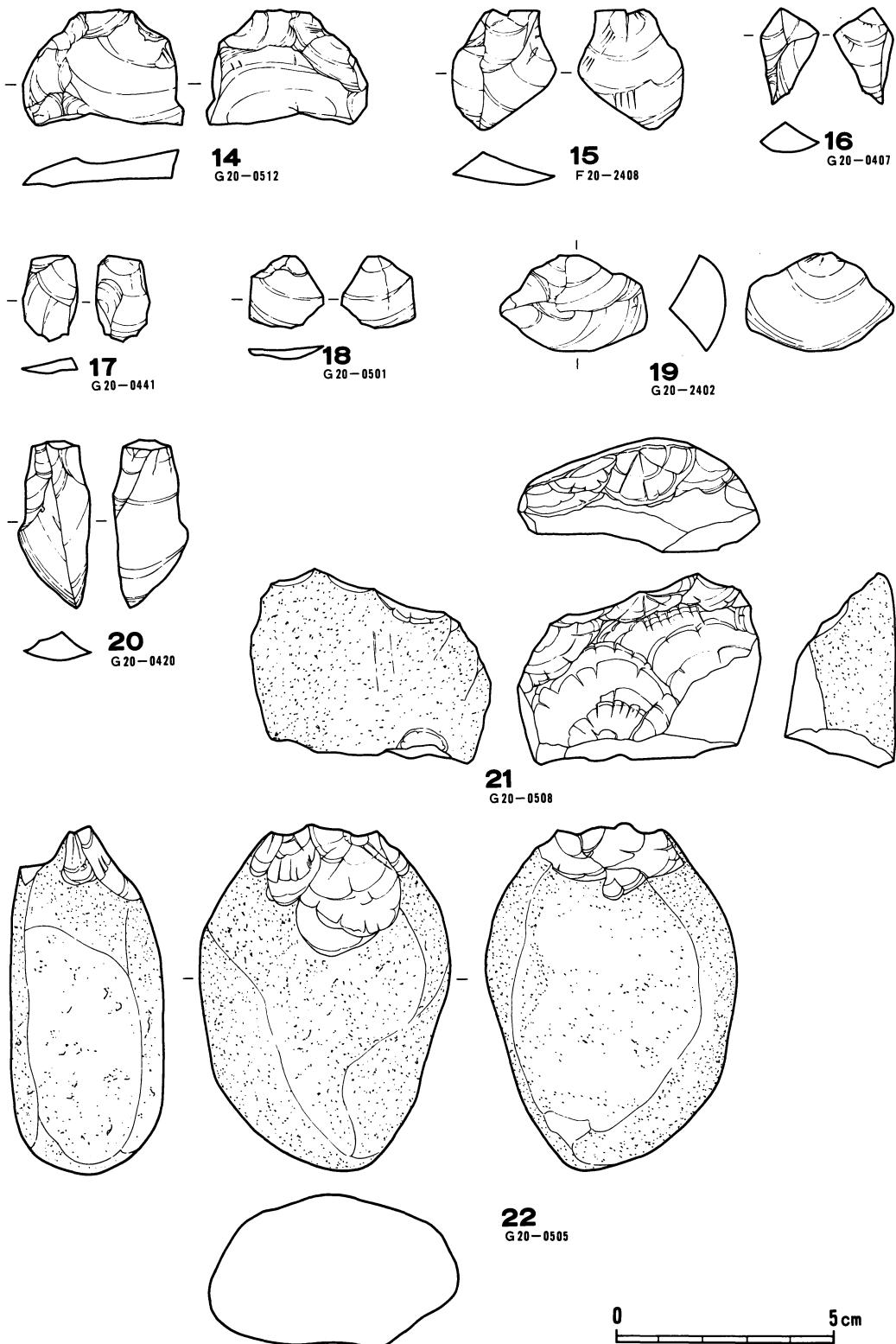
チョッパー（21） 数個に分割された礫の一つに調整を加えたと考えられる。片面には自然面を残し、もう一方の面に素材自体を調整した剥離面を留める。その礫の端部片面に連続した調整を施す。刃部は、使用によるためか、全体的に磨滅し、丸味を帯びる。器長4.3cm、器幅5.6cm。石材は凝灰岩である。

チョッピングトゥール（22） 自然礫を使用する。一端に両面から剥離が加えられ、刃部が作り出されている。表には4回の、裏には1回の打撃による剥離痕が認められる。刃部の幅2.8cmである。石材は凝灰岩。

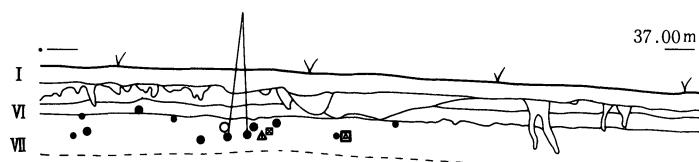
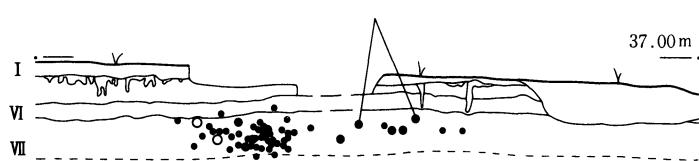
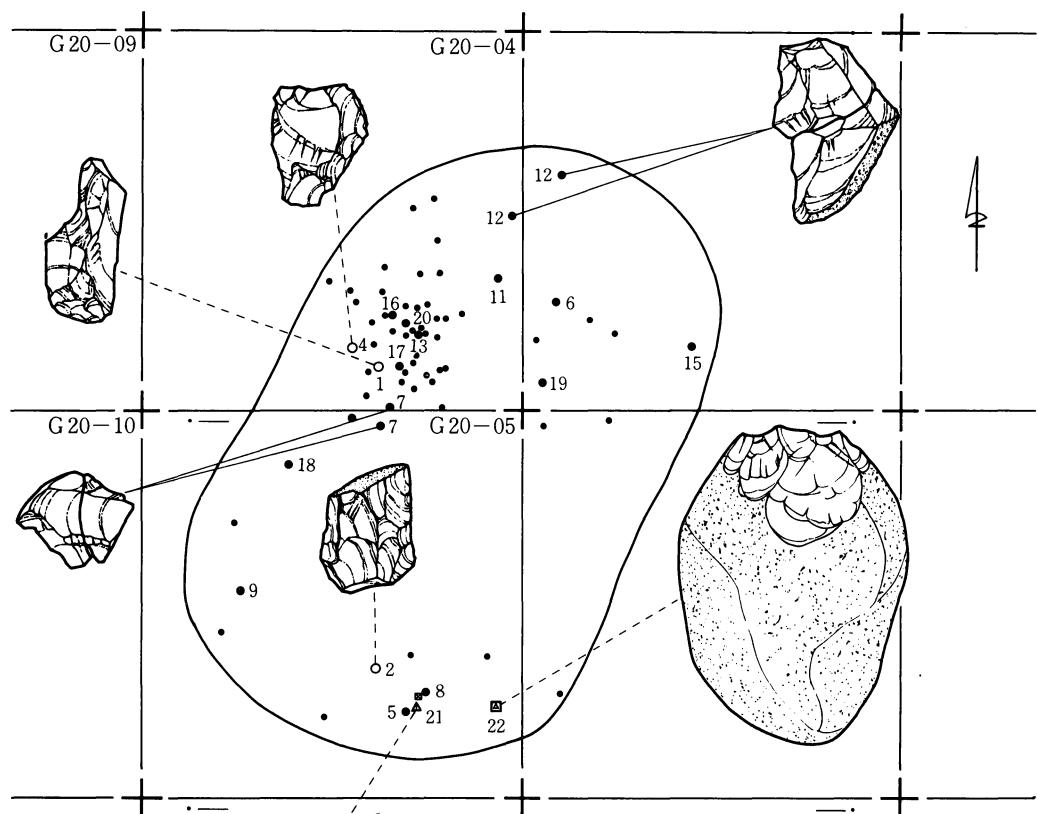
剥片類（5～20） 規則的に剥離された定形的な剥片はみられない。9～12の剥片が比較的大形である他は、小剥片が多い。11～13には自然面が残る。7・12は、折断され、分離して出土した剥片が接合したものである。5～13の石材は安山岩である。質感が近似するため、同一



第22図 J ブロック出土遺物①



第23図 J ブロック出土遺物②



0 2m

第24図 J ブロック遺物出土状況(1/80)

の母岩から作出された剥片と思われる。14~20の石材は泥岩である。軟質なため表面の磨滅は著しい。

この他には台石状の自然礫と、碎片類が出土した。

・ K ブロック (第25・26図)

本ブロックは、第2地点のT 22-06グリッドを主に検出された。直徑3 mほどの範囲をもつ。谷部に近いため、第II層以下については平坦部と異なる。各層の境が不鮮明となるが、第VI層までソフト化が進んでいる。遺物は、ソフト化が最も深くまで達する位置から出土し始めるが、それらは一部で、第VII層上位から中位にかけて集中した。

出土遺物総数は36点である。石器はスクレイバー1点、剥片類35点となる。石材別では、メノウ19点、頁岩6点、黒曜石6点、玄武岩3点、安山岩1点、砂岩1点である。

スクレイバー(1) 断面が三角形を呈し、やや厚い剥片を使用する。弧状の先端部に刃部を設ける。エンドスクレイバーとしてよいであろう。器長2.4cm、器幅2.7cm。メノウ製である。

剥片類(2~8・10~21) 規則性のある定形的な剥片ではなく、小形のものが多い。2は基部を欠損するが、遺存する一部に小さな加工痕が認められる。2~10の石材はメノウである。11~16の石材は頁岩である。11・14のように細く鋭い両縁をもつものもある。16・17は黒曜石、18・19は玄武岩で小形である。20は自然面を残す砂岩の剥片である。

接合資料(7・9) 7はメノウ製の小剥片が2点接合した例である。9は、1のエンドスクレイバーに、8ともう1点の剥片が接合している。石器の素材を調整する過程で、剥離された剥片であろうか。

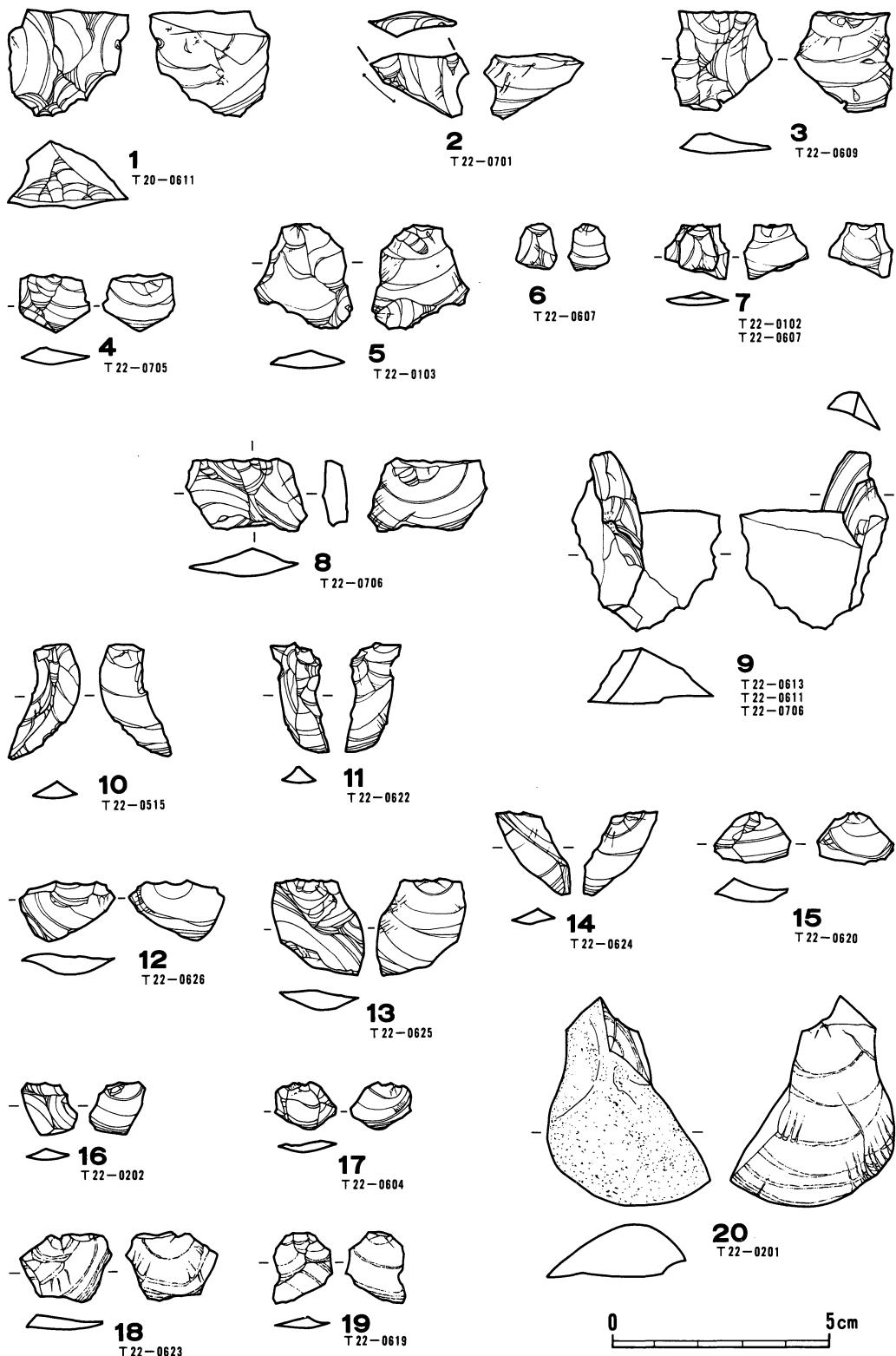
・ L ブロック (第27・28図)

本ブロックは、第4地点のX 25-01・02グリッド付近に位置する。出土範囲は、直徑約5 mほどの内で、散発的な出土状況を呈した。

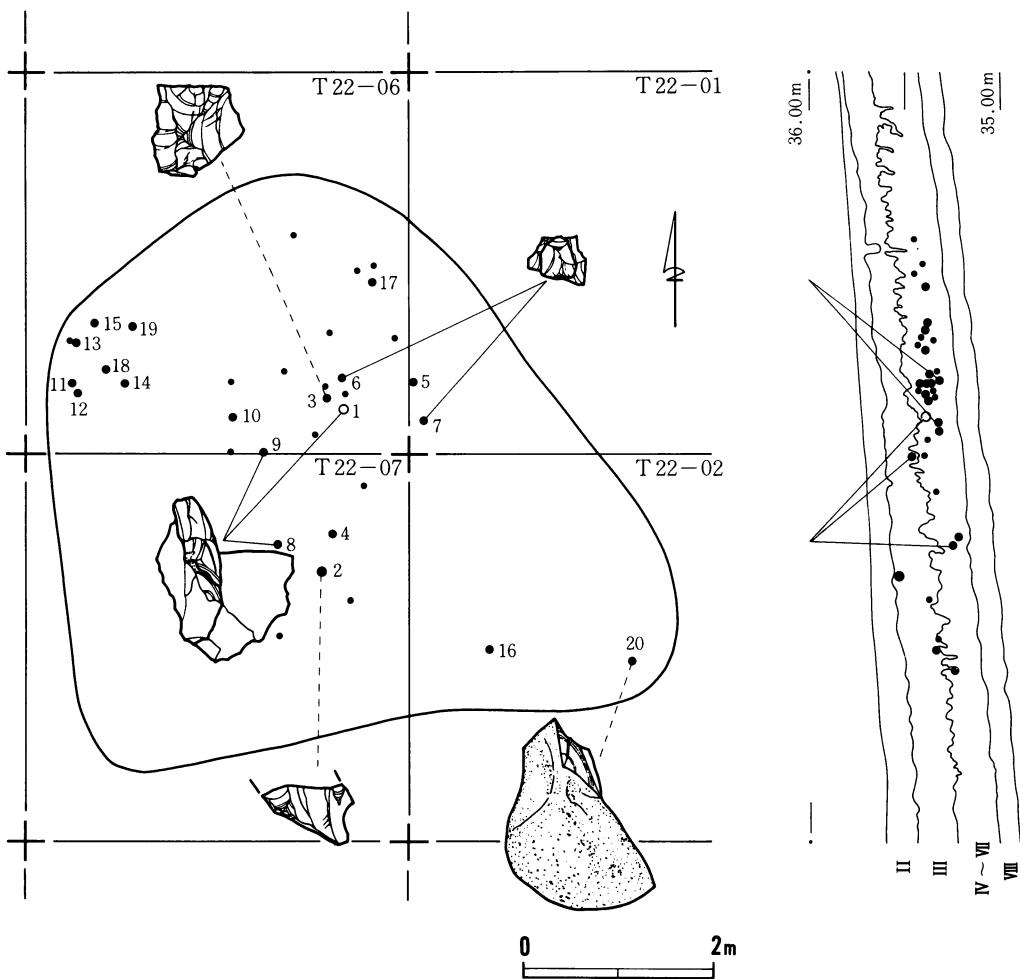
出土層位は、第VII層中位以下である。原因は不明であるが、2点のみが、第VI層で検出された。出土遺物総数は15点と少量である。石器は、メノウ製の剥片14点とホルンフェルスの敲石1点である。

剥片類(1~4) 規則性のあるものではない。3・4の一部には自然面を残す。3は2点の剥片が接合したものである。小剥片の方は、第VI層上位で検出され、50cmほどのレベル差がある。

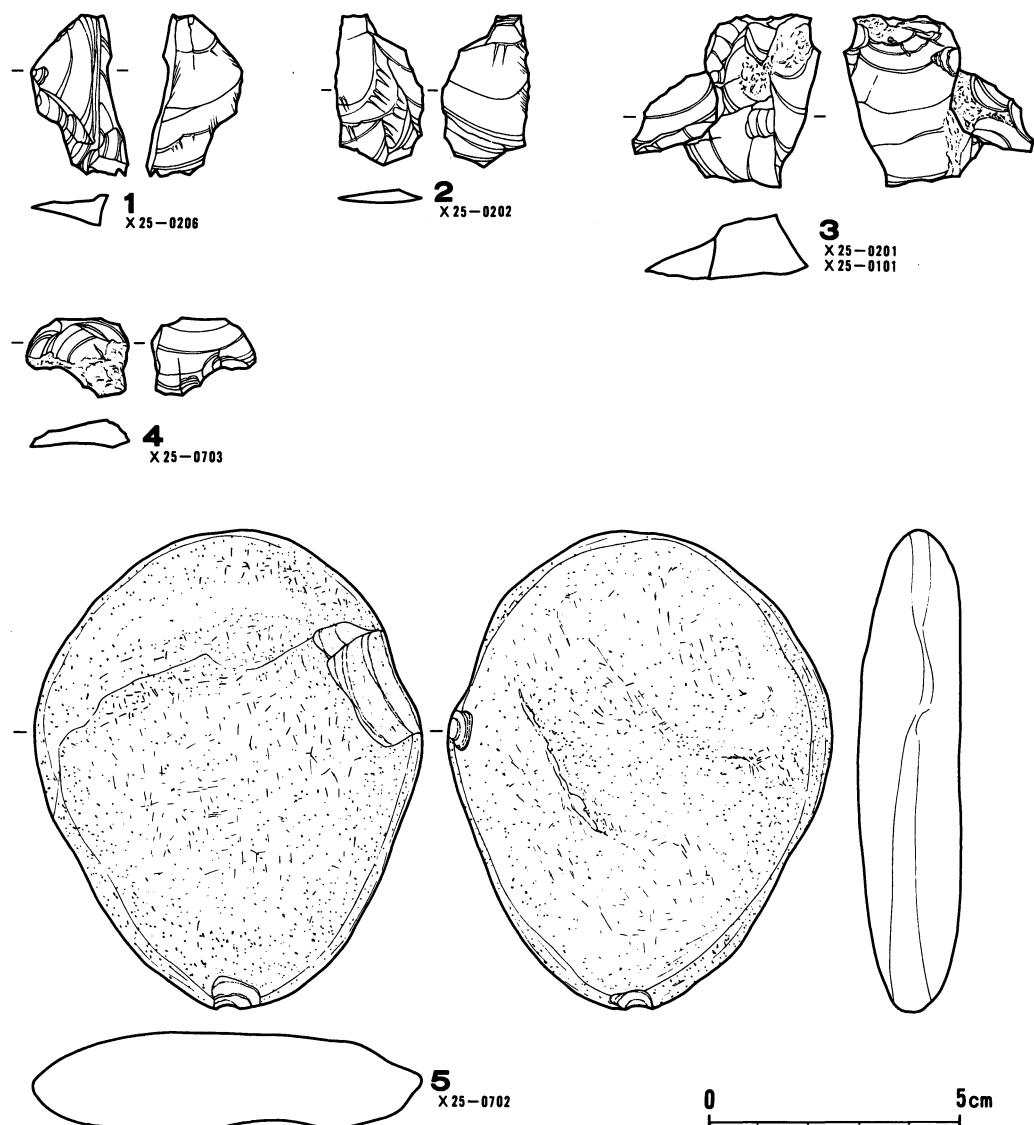
敲石(5) 扁平で橢円形に近い石材を使用する。周辺部に磨痕が認められる。端部に打撃によると思われる使用痕があるため敲石とした。器長9.2cm、器幅7.7cmである。



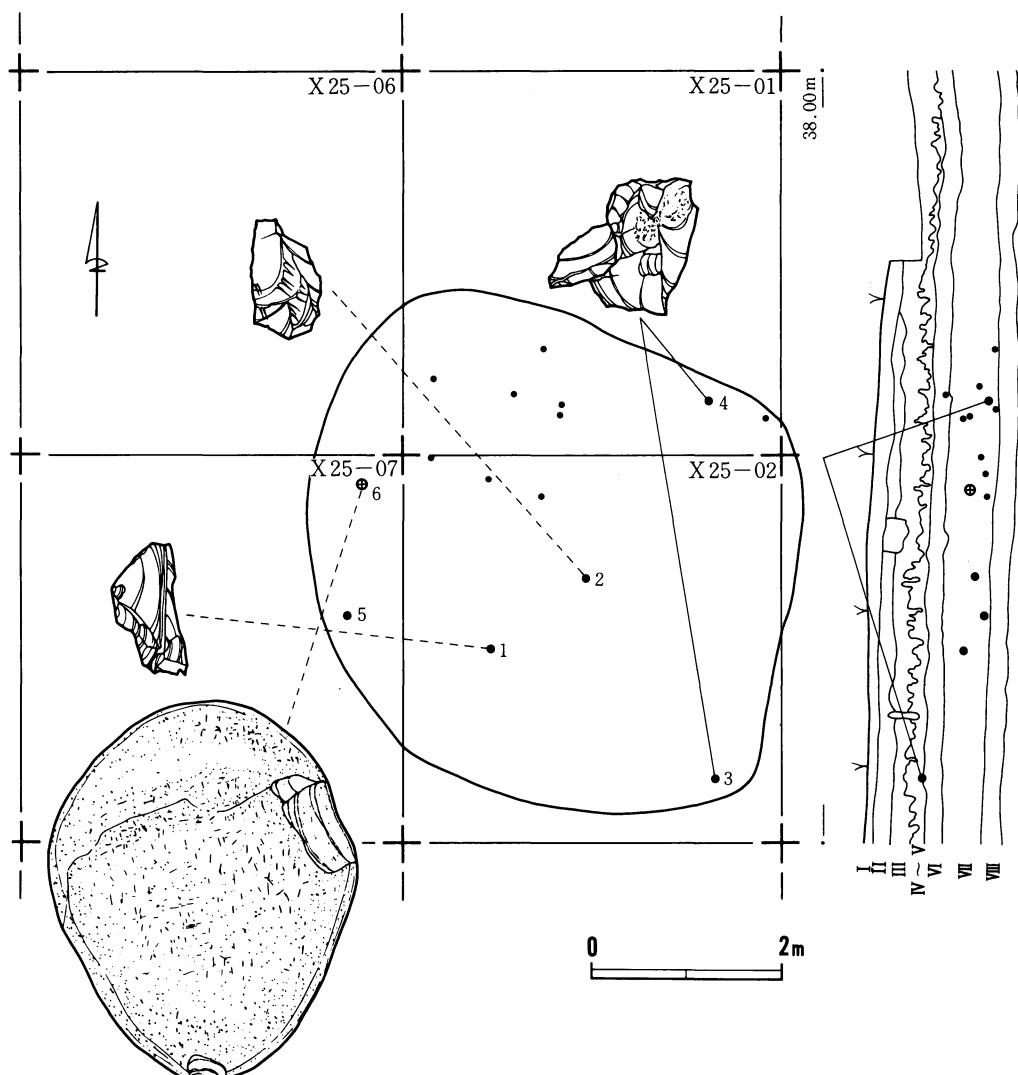
第25図 Kブロック出土遺物



第26図 Kブロック遺物出土状況(1/80)



第27図 Lブロック出土遺物



第28図 Lブロック遺物出土状況(1/80)

・Mブロック (第29・30・31図)

本ブロックは、第4地点の平坦部である。X26グリッド内で検出された。東西約15m、南北約10mの、比較的広い出土範囲である。石材別にまとまっている傾向があり、X26-13グリッド付近の頁岩の小ブロックと、X26-23グリッドの安山岩を中心とする小ブロックに分けられる。両小ブロックには、共通して出土する石材も含まれ、接合関係もあるため、二つを含めて1ブロックとした。

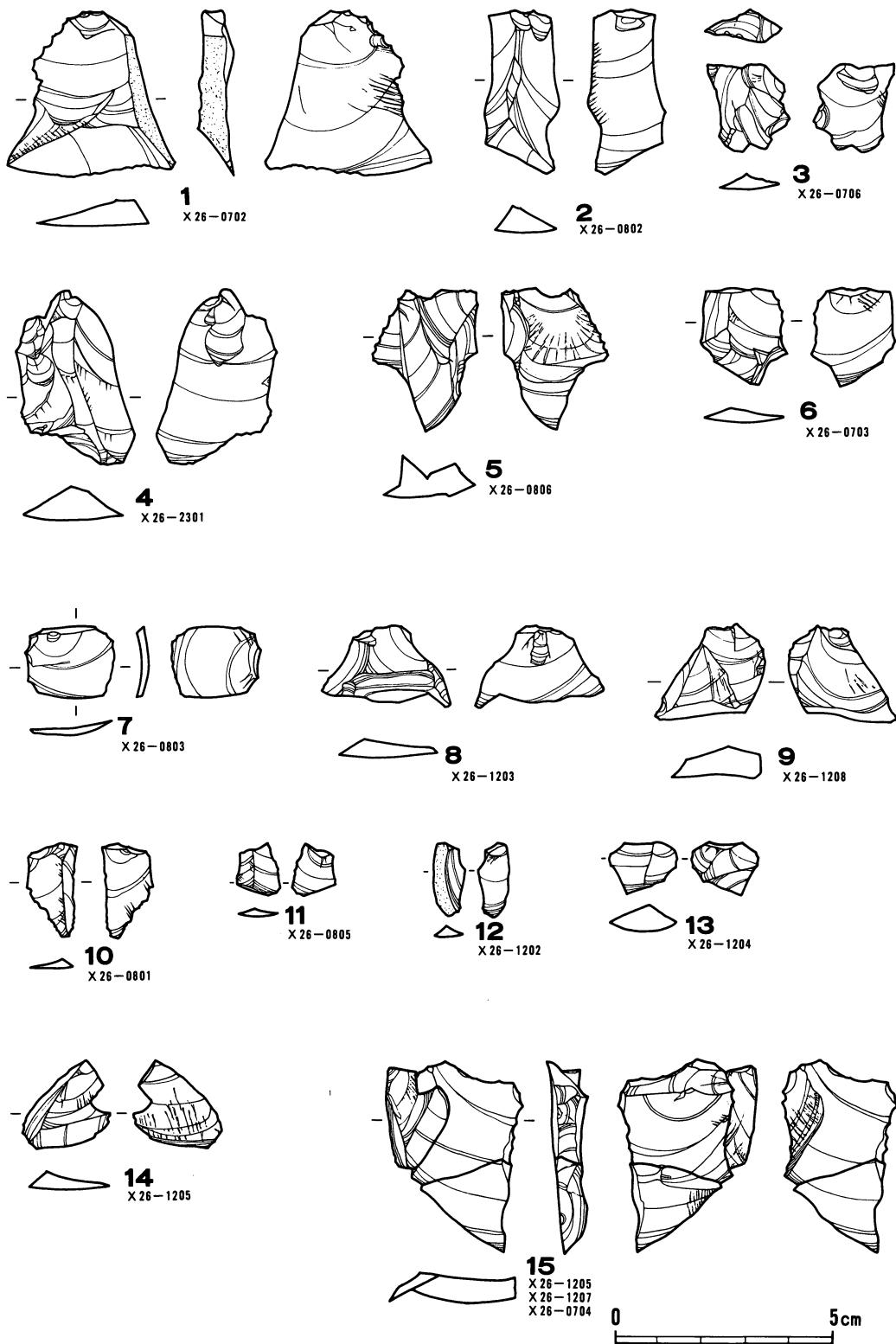
周辺のローム層は比較的攪乱を受けず、安定した状態である。遺物の出土層位は、第VII層中位から下位である。

出土遺物総数は30点である。これらは、剥片類29点、石核1点となっている。石材別では、頁岩が多く21点、安山岩5点、メノウ3点、黒曜石1点となる。

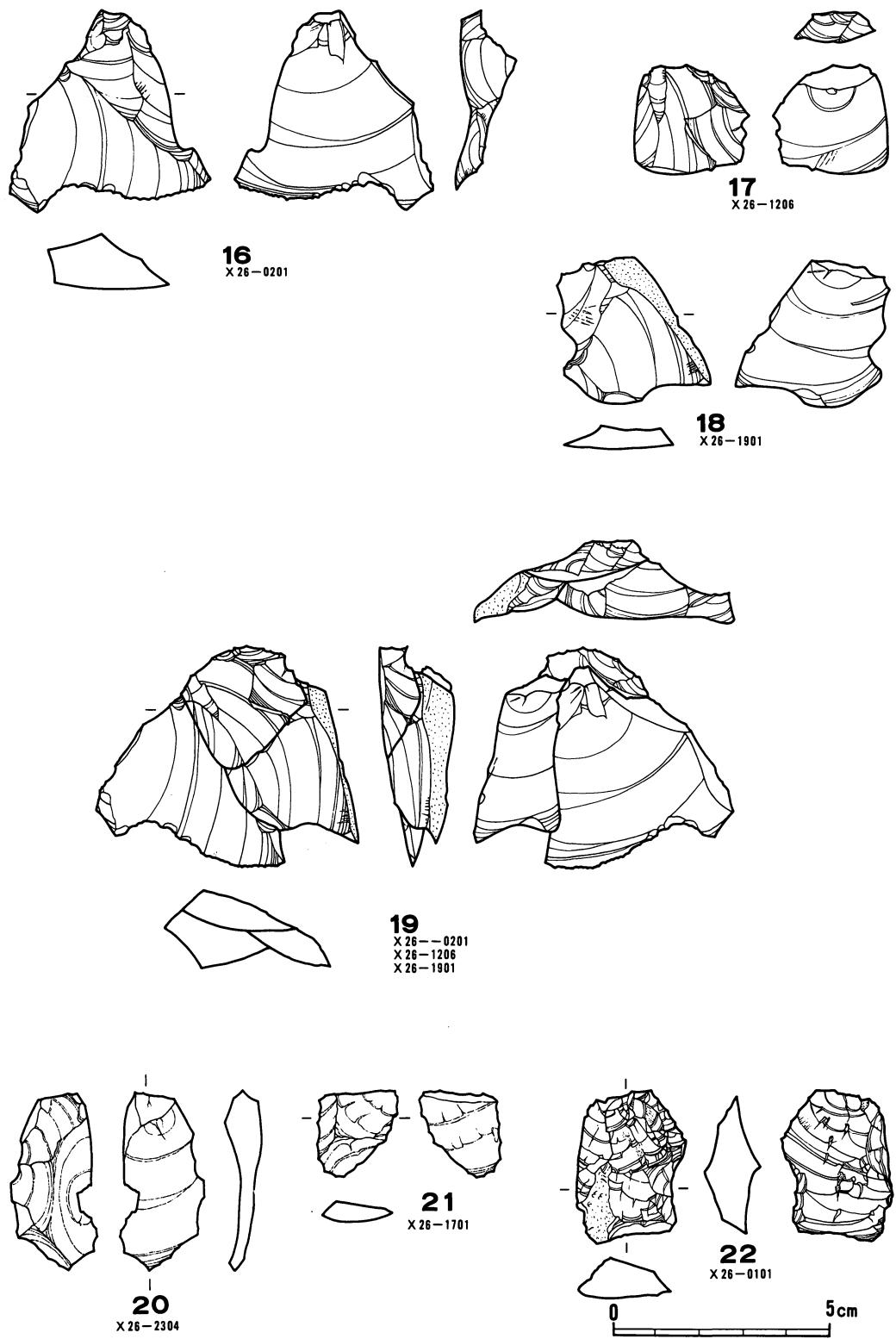
剥片類 (1~18・20~24) 1~18は頁岩製の剥片で不定形が多い。その内で2・4は石刃状の剥片に近い形を呈している。同一母岩の資料と考えられる。一部に自然面を残すものが多い。20・21は安山岩製である。21は折断される。22はブロックからやや離れて出土した、黒曜石製の剥片である。23・24の石材はメノウで、24は一部に加工痕が認められる。

石核 (25) メノウの石核である。打面は自然面を剥いて設けられる。下部は表裏に剥離面が認められ、打面は残存しない。

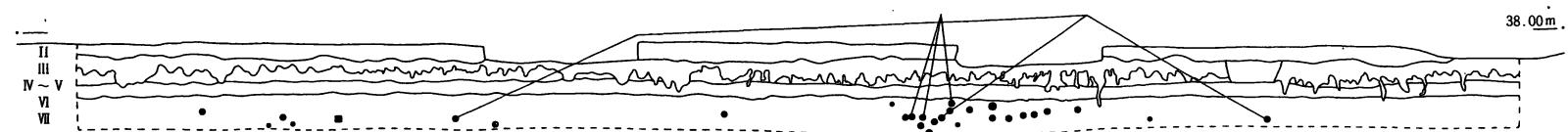
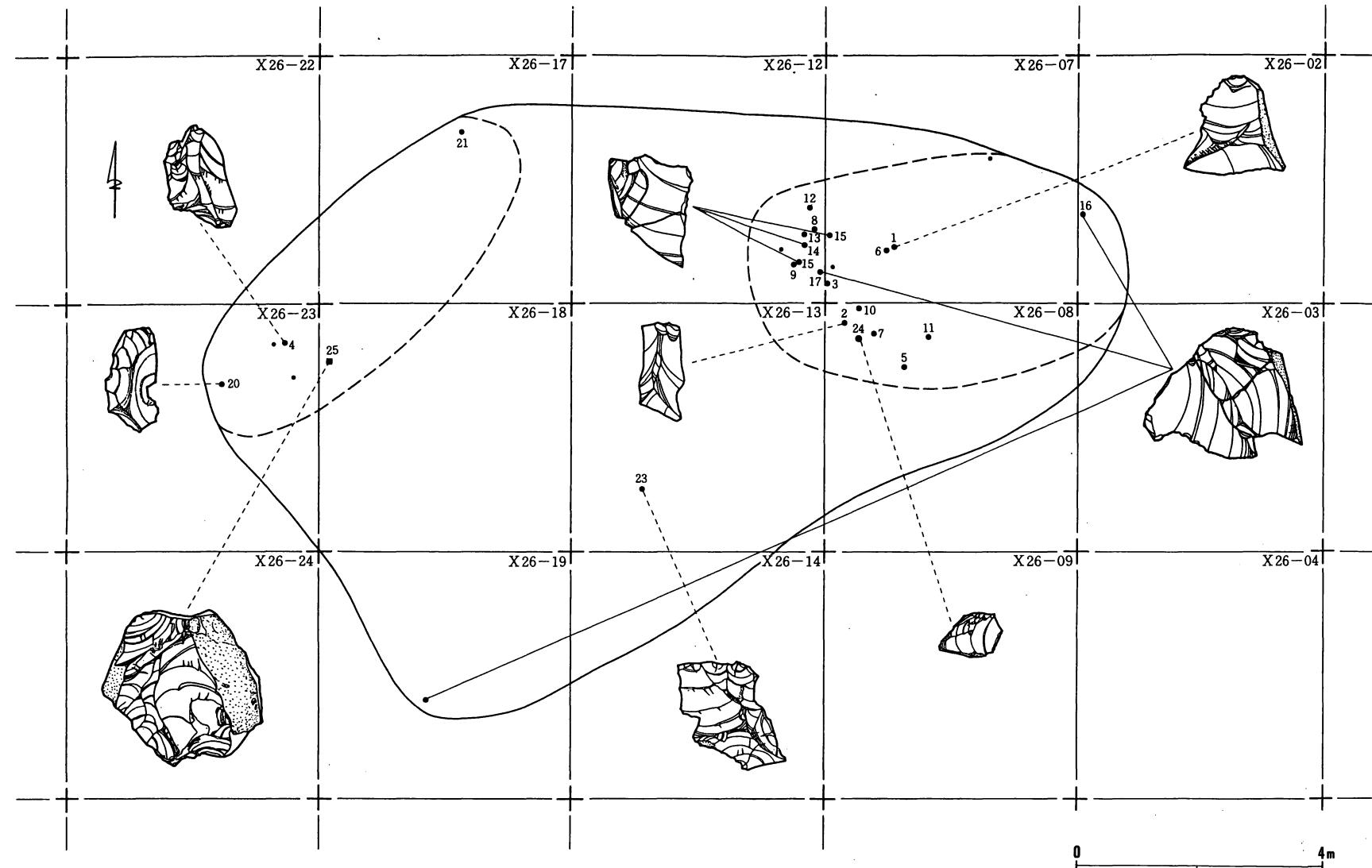
接合資料 (15・19) 15は折断された剥片に、もう1点剥片が接合したものである。3点の出土地点は、それぞれ近接した位置である。19は3点の剥片が接合したものである。3点はブロック内で間隔を置いて出土している。剥離は、雑に作り出された打面を使用し、少しづつ移動しながら剥がされたものである。



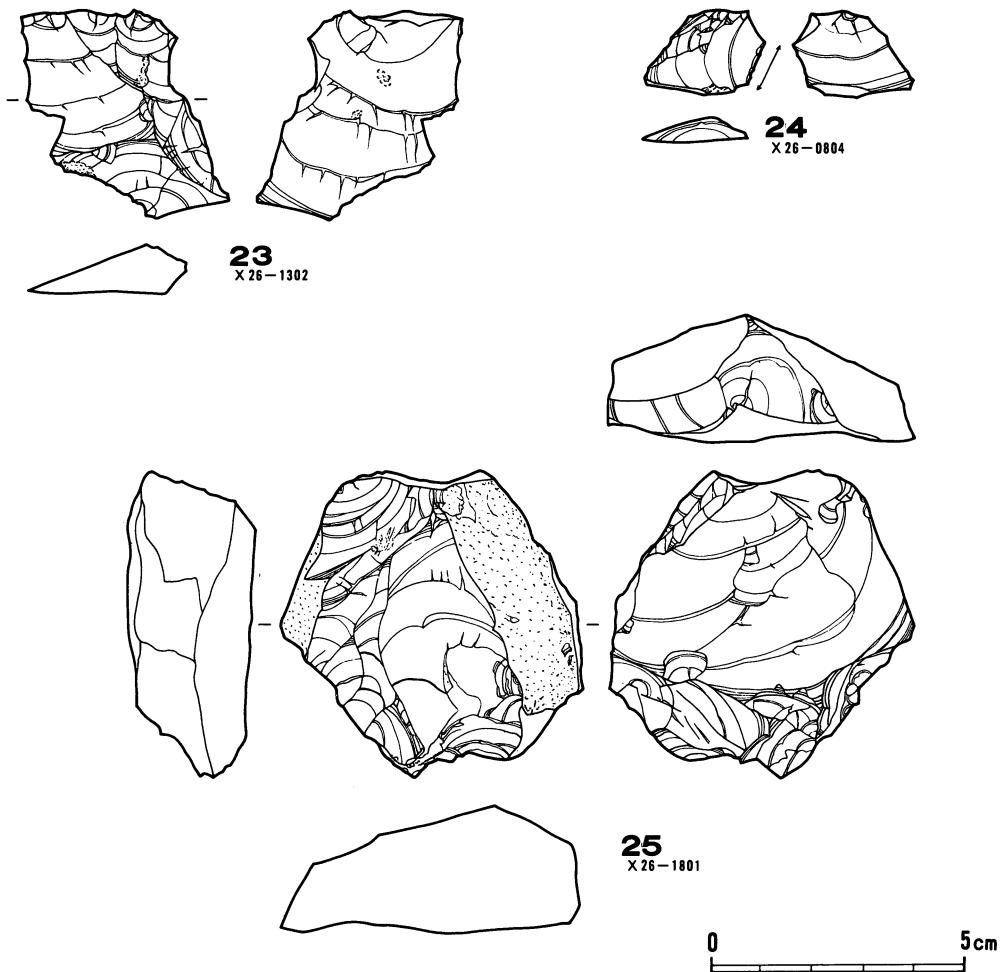
第29図 Mブロック出土遺物①



第30図 Mブロック出土遺物②



第31図 Mブロック遺物出土状況(1/80)



第32図 Mブロック出土遺物③

・ブロック外出土遺物（第33図）

遺物集中地点には伴わず、離れて単独で出土した遺物もある。出土層位は攪乱層と、第III層からのものである。ブロック外出土として取扱った遺物数は少なく、合計で9点となっている。定形的な石器が多く、尖頭器5点ナイフ形石器2点、使用痕の認められる剝片2点である。

尖頭器（1～4） 1は両面加工の柳葉形尖頭器である。第II層下位の出土であるが、原位置を変えていると考えられる。使用によるものか先端部を欠損する。残存器長6.3cm、器幅1.8cm。石材は頁岩である。2は両面加工の小形尖頭器である。縁部のみに連続的な調整が施され、素材の中央部まで調整は達せず、第一次剥離面を両面に残す。1は第一次剥離面を残さず調整され、全体的に細身であるのに対し、2は周辺の調整に限られ、基部近くで幅が広くなる。2は完存し器長3.7cm、器幅1.5cm。チャート製である。攪乱層の出土であるが、Cブロック出土の資料と石材が酷似する。3はメノウ製の両面加工尖頭器の基部である。残存する部分が僅かで、全体については不明である。第III層出土。4は両面加工の有舌尖頭器である。先端部と基部を欠く。残存器長5.1cm、器幅1.9cm。攪乱層から出土し、石材は泥岩である。この他1点尖頭器の先端部の出土がある。

ナイフ形石器（5） 頁岩製の縦長剝片を調整したナイフ形石器である。刃部の背面3分の2にプランティングが施される。器長2.8cm、器幅1.2cm。第III層出土である。この他に1点安山岩製の剝片に簡単に調整を加えたナイフ形石器が検出されている。

使用痕の認められる剝片（6・7） 6は基部に近い一側辺に使用痕が認められる。攪乱層出土。7は鋭い両縁に使用痕が認める石刃である。器長7.0cm、器幅2.8cm。第III層出土である。両方メノウ製である。

第2節 その他の遺構と遺物

先土器時代の石器集中地点の他、竪穴状遺構2基、堀・溝状遺構2基、陥穴状土壙2基を検出した。いずれも直接遺構に伴うと考えられる遺物の出土が無く、明確な時期については不明である。遺物としては、縄文時代の土器片・石器類、土師器の破片等が検出されている。

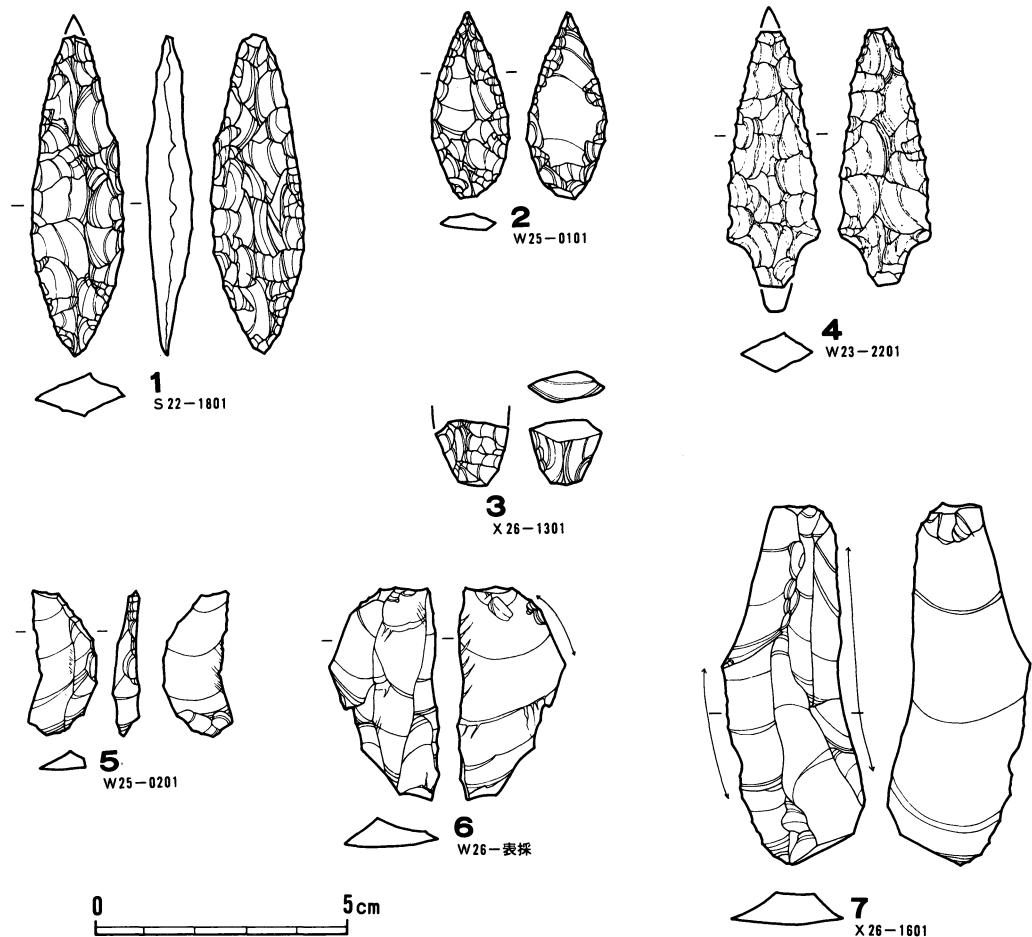
002号跡（第34図）

本跡は第2地点の調査区域のはば中央、S 21-25・T 21-05グリッド付近に位置している。

平面形は長軸11.70m、短軸5.30mの略隅丸長方形を呈する。主軸方向は、N-47°-Wである。南西の辺は内側に張りをもち、北東辺は外側に張るため、ややゆがんだような形になっている。

表土を剥ぐとすぐに検出された。覆土の土層は以下のとおりである。

1. 暗褐色土。3cmほどの小ロームブロックと荒いローム粒を含む。
2. 黒褐色土。荒いローム粒を含む。



第33図 ブロック外出土遺物

3. 褐色土。炭化粒・小ロームブロックを含む。
4. 褐色土。炭化粒・小ロームブロックを含み3層より暗くなる。
5. 暗褐色土。ローム粒・小ロームブロックを僅かに含む。
6. 褐色土。黒色土中に荒いローム粒を含む。
7. 暗褐色土。小ロームブロックを多く含む。
8. 黄褐色土。ローム粒が主でその中にロームブロックを多く含む。
9. 黄褐色土。荒いローム粒と小ロームブロックでしまりは弱い。

以上のようにあった。

壁の遺存は、本跡が斜面に位置するため、北東壁が高く、南西壁が浅くなる。北西壁上端の一部に崩落部分があるが、全体として遺存は良好である。壁下に溝は認められず、やや傾斜して立ち上がる。

床面は第VI層から第VII層に設定される。やや南に傾斜するがほぼ平坦である。面は特に硬くした様子はみられず、やや軟弱な部分も認められる。入口に相当するであろう位置は不明である。

ピットは5個検出された。各コーナー付近に4個、P 3とP 5の中間に1個であり、各ピットとも壁から50cmほど離れた位置に直角に穿たれる。直径は30cm前後で、深さはP 3が最も深く78cmである。P 1とP 2の間にP 4と対応するであろうピットは存在しない。

遺物は覆土から縄文時代の石鏃1点が出土しただけで、他の遺物はどこからも検出されなかった。

本跡は形態的には堅穴住居跡に近いが、炉が存在せず、日常の生活の場として使用されていたとは決められない。

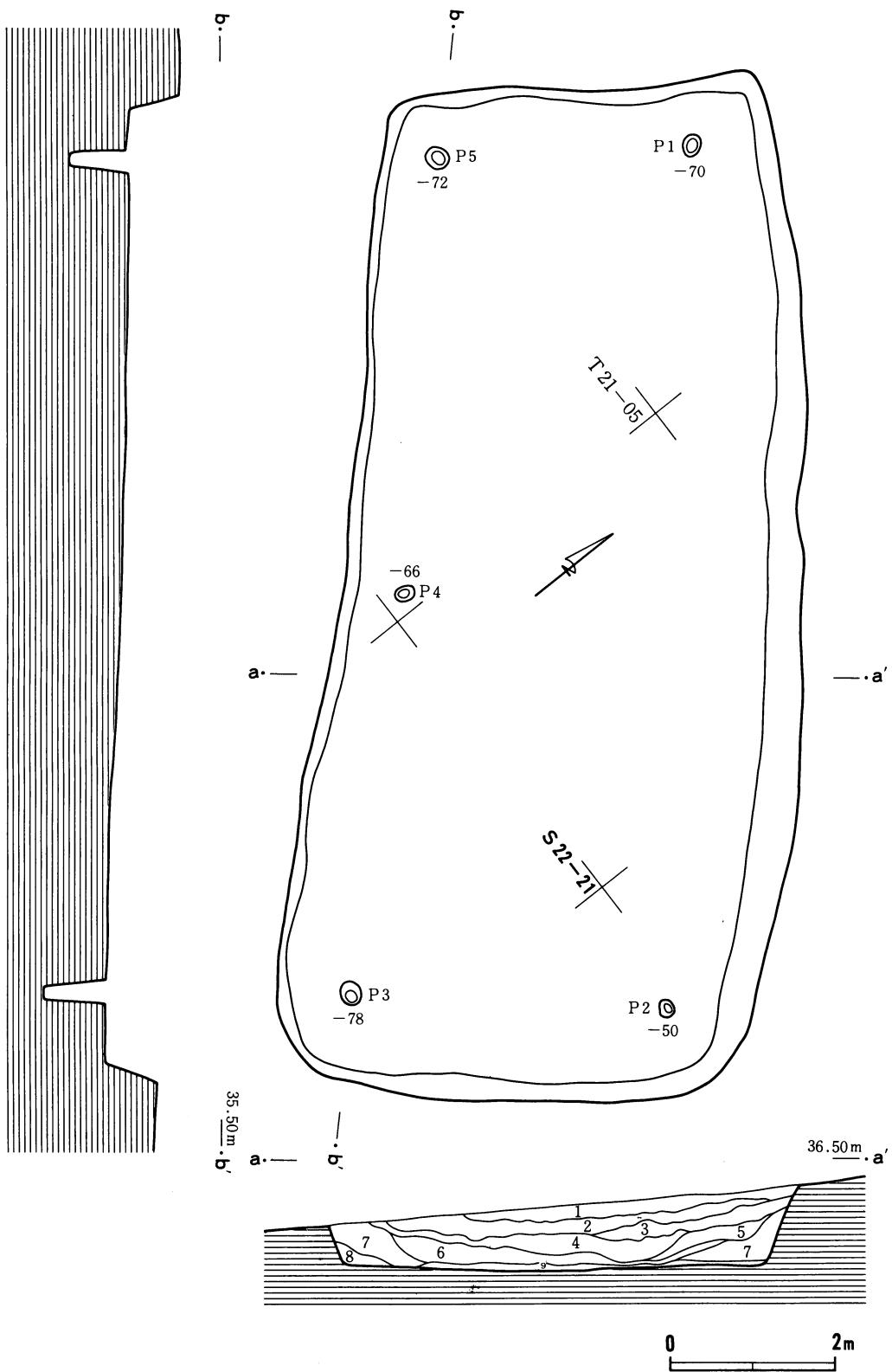
・003号跡（第35図）

本跡は、002号跡の北西に縦に並ぶように検出された。主なグリッドはT 21-08・09・12・13・14・17・18である。

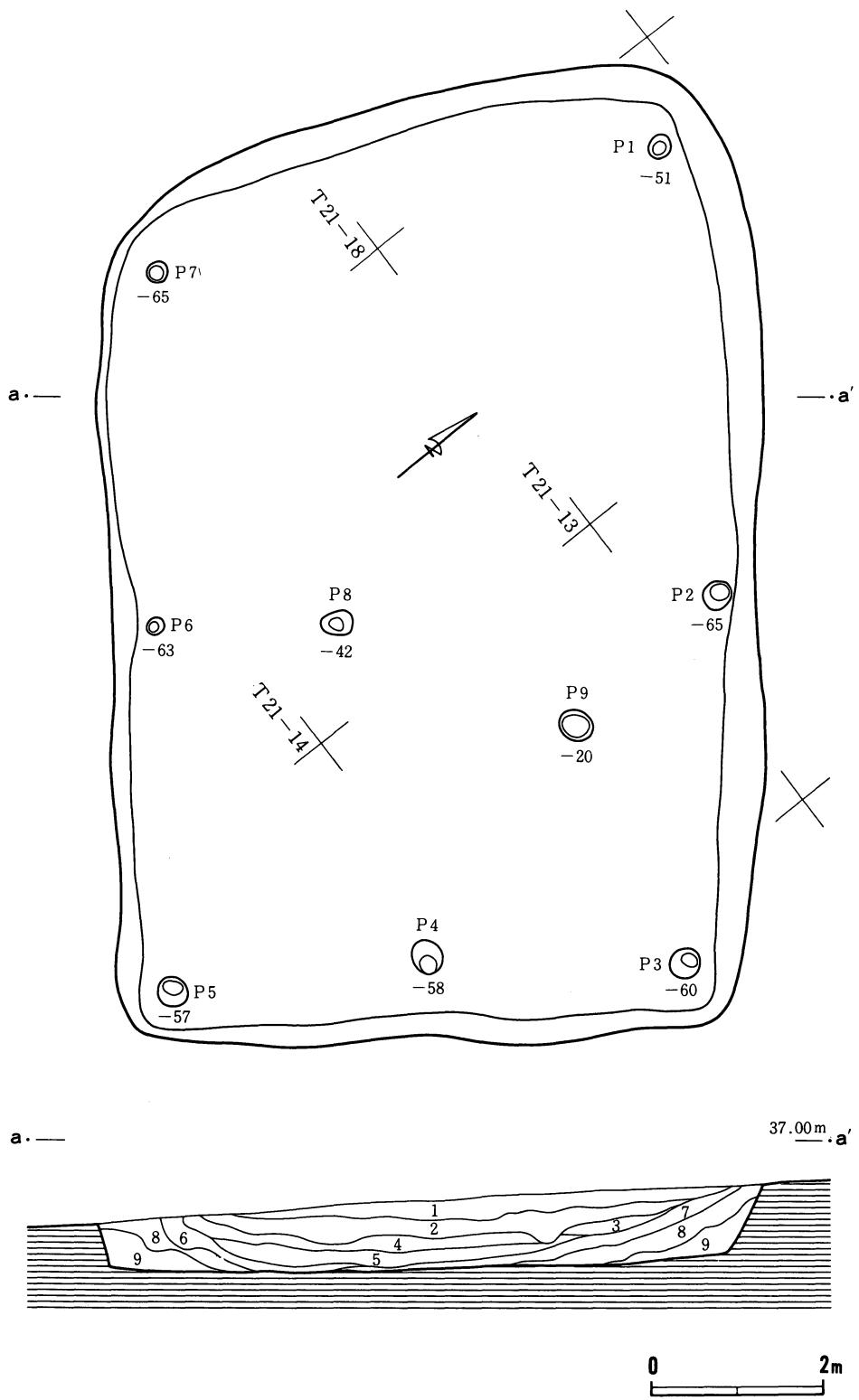
平面形は、各辺の長さが少しづつ違っているので不整な隅丸長方形となっている。4つの隅の内で北側の2角が南の2角より丸味をもつ。規模は長軸10.55m、短軸7.05mの大形である。主軸の方向は、N-55°-Wである。

覆土の状態は次のようである。

1. 暗褐色土。荒いローム粒と小ロームブロックを含む。
2. 黒褐色土。荒いローム粒を含む。
3. 黄褐色土。炭化粒や小ロームブロックを含む。
4. 褐色土。ローム粒を含む。
5. 暗褐色土。小ロームブロックを含む。



第34図 002号跡(1/80)



第35図 003号跡(1/80)

6. 暗褐色土。5層と近いがローム粒が多い。
7. 暗褐色土。ロームブロックをやや多く含みぼそぼそする。
8. 黄褐色土。ロームブロックや荒いローム粒を多く含み、密な状態ではなくぼそぼそとする。
9. 黄褐色土。ローム粒・ロームブロックと黒色土が僅かに入る。

以上である。

壁は北西側の一部に攪乱を受けているが、比較的良好に遺存する。壁溝は認められず、僅かに傾斜して立ち上がる。壁高は最大で85cmほどになっている。

床面は第VII層に設定される。南に僅かに傾斜するが凹凸が少なく平坦といえる。一部分に硬質となる所が残るが全体的にやや軟弱な床となっている。

ピットは9個検出された。柱穴と考えられるピットはP1～P7の7個である。P4以外の6個は、それぞれ壁際に掘られている。

炉は存在せず、遺物は覆土中から縄文時代の遺物が数点検出されただけで、床面付近からは何も出土しなかった。覆土中の遺物は、流れ込んだものと考えられる。

本跡も002号跡同様、性格等については明らかではない。

・004号跡 (図版9参照)

本跡は第2地点のU21・22の大グリッド内をほぼ南北にとおる溝状遺構である。調査区域内に限り全掘したが、さらに南・北へ伸びると思われる。幅1.8m～2.4mである。検出面からの深さは平均50cmほどである。

覆土は黒色土を主にローム粒等が混入し6層に分けられる。1～4層までと、5・6層とはその境界が硬くなっているため明瞭である。これは二度溝が同一場所で堀り変えられた結果であろう。断面は、中段までは緩やかに下り、さらに一段落ちる形となっている。

底面は硬質ではなく、小さな凹凸がみられる。遺物は1点も出土しなかった。

・005号跡 (第36・37図)

本跡は谷部に当たる第3地点で検出された。大グリッドのW23・X22・23に広がる大形の溝状遺構である。北西に伸びると考えるが、調査区域内のみ発掘した。そのため全体の形状については知ることができない。

規模は、発掘を行なった部分の南東の立ち上がり下端から長さ約40mを測る。幅は下端で、5.5～6.5m、上端で8.5～9.5mである。上端部は本来の掘り込み部分が崩落したため、外側へと広がっていったと考えられる。遺存する中段の幅は6.5～7.5mである。

覆土は場所により多少異なるが、基本的には第37図のようになる。

第Ⅰ層、表土攪乱層。

1. 暗褐色土。ぼそぼとした黒色土とロームでしまりがない。
 2. 暗褐色土。ぼそぼとした黒色土と小ロームブロックでしまりがない。
 3. 黒色土。細粒の黒色土にローム粒・焼土粒・炭化物を含む。
 4. 黒褐色土。黒色土にローム粒と焼土粒が混ざる。
 5. 暗褐色土。鉄分を多く含むと考えられる黒色粒（以下黒色粒）に黒色土・ローム粒・炭化物片が混入する。
 6. 黒色土。黒色粒にローム粒が含まれる。
 7. 暗黄褐色土。ローム粒と黒色粒でやや砂質となる。
 8. 黑褐色土。黒色土に黒色粒が含まれ硬質となる。
 9. 黑褐色土。黒色土に黒色粒・ローム粒を含み硬質である。
 10. 黑褐色土。黒色粒と僅かにローム粒を含み、粘性がありしまりが強い。
- 以上である。

底面は壁際で凹凸がみられる。全体的には南東端に向かって僅かに傾斜する。荒掘りした後に床を整えたと考えられ、面は平坦である。特に硬くした様子はうかがわれない。壁の掘り込みについては先に述べたが、断面は略箱掘の形となっている。

ピットが中央に一列に並ぶように検出された。直径70cm前後、深さ70cm以上と、直径30cm、深さ50cm程度の2種類のピットが認められる。ピット間の間隔に一定のものが認められず、2種類のピットの関係は不明である。ただ、大きなピットが2個接しては掘られなかつたようである。

出土遺物（第38図）

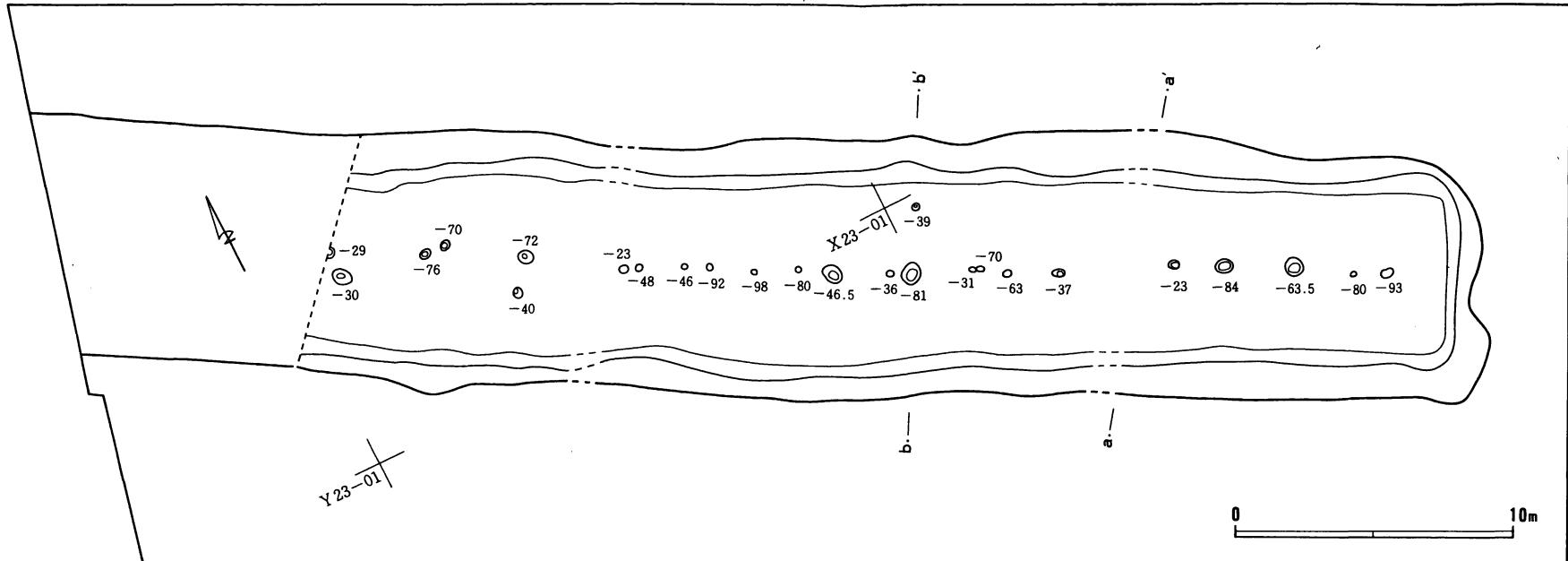
覆土下層に破片で流れ込んだような状態で出土した土師器である。高坏で脚部を欠損する。坏部の約2分の1が復元され、口径14.8cm、坏部の器高6.0cmを測る。胎土は長石粒を含み、焼成は良好である。調整は内面に放斜状に、外面は横方向にヘラ磨きが施されるが、僅かにハケ目痕を残している。色調は明褐色を呈する。

この他にも覆土中から土師器の甕の破片数点が出土した。また、縄文時代の石鏃1点が出土している。

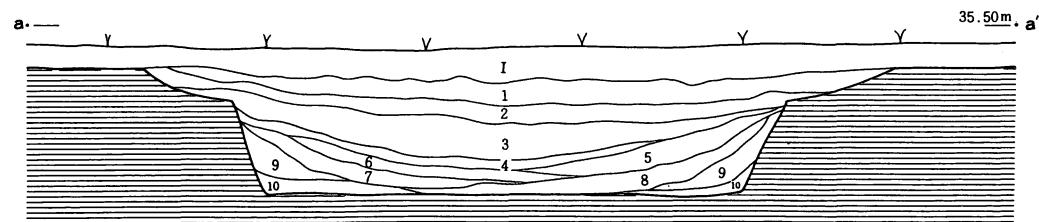
・001号跡（第39図上）

本跡は第2地点のS21-07グリッドを主に位置する陥穴状土壙である。

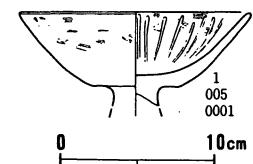
長径2.4m、短径1.4mの楕円形を呈し、長軸の方向はN-41°-Wである。底面の長径1.35m、短径0.62mで南東の底面やや上位がオーバーハングされる。掘り込みは中段で急斜となり底面に達し、底面はほぼ平坦である。



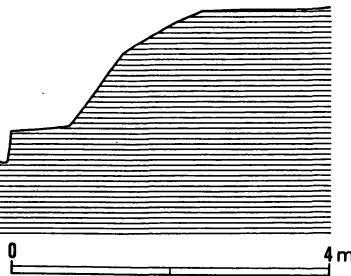
第36図 005号跡(第3地点)全体図(1/200)



第37図 005号跡断面図(1/80)



第38図 005号跡出土遺物



第39図 005号跡断面図(1/80)

検出面からの深さは約2mで、覆土の状態は次のとおりである。

1. 暗褐色土。ローム細粒・炭化粒を含み密な状態である。
2. 黒色土。ローム粒を含み粒子が細かく密である。
3. 黒褐色土。ローム粒を含み緻密。
4. 黒色土。ローム粒を僅かに含む。
5. 黒褐色土。粒の細かいローム粒を均一的に含み緻密。
6. 褐色ローム土。ソフトローム粒に僅かに黒色土を含む。
7. 褐色ロームブロック土。中・小のロームブロックを多く含みごろごろとする。
8. 暗褐色土。ローム土に小ロームブロック・黒色土が含まれ、しまりが弱い。
9. 褐色ロームブロック土。中・小ロームブロックでごろごろする。
10. 黒色有機質土。真黒な有機質土ではぱさつく。
11. 褐色ローム土。ソフトローム土でやや粘性がある。

以上である。全体的に覆土はしまっており、その中から遺物は1点も検出されなかった。

・006号跡（第39図下）

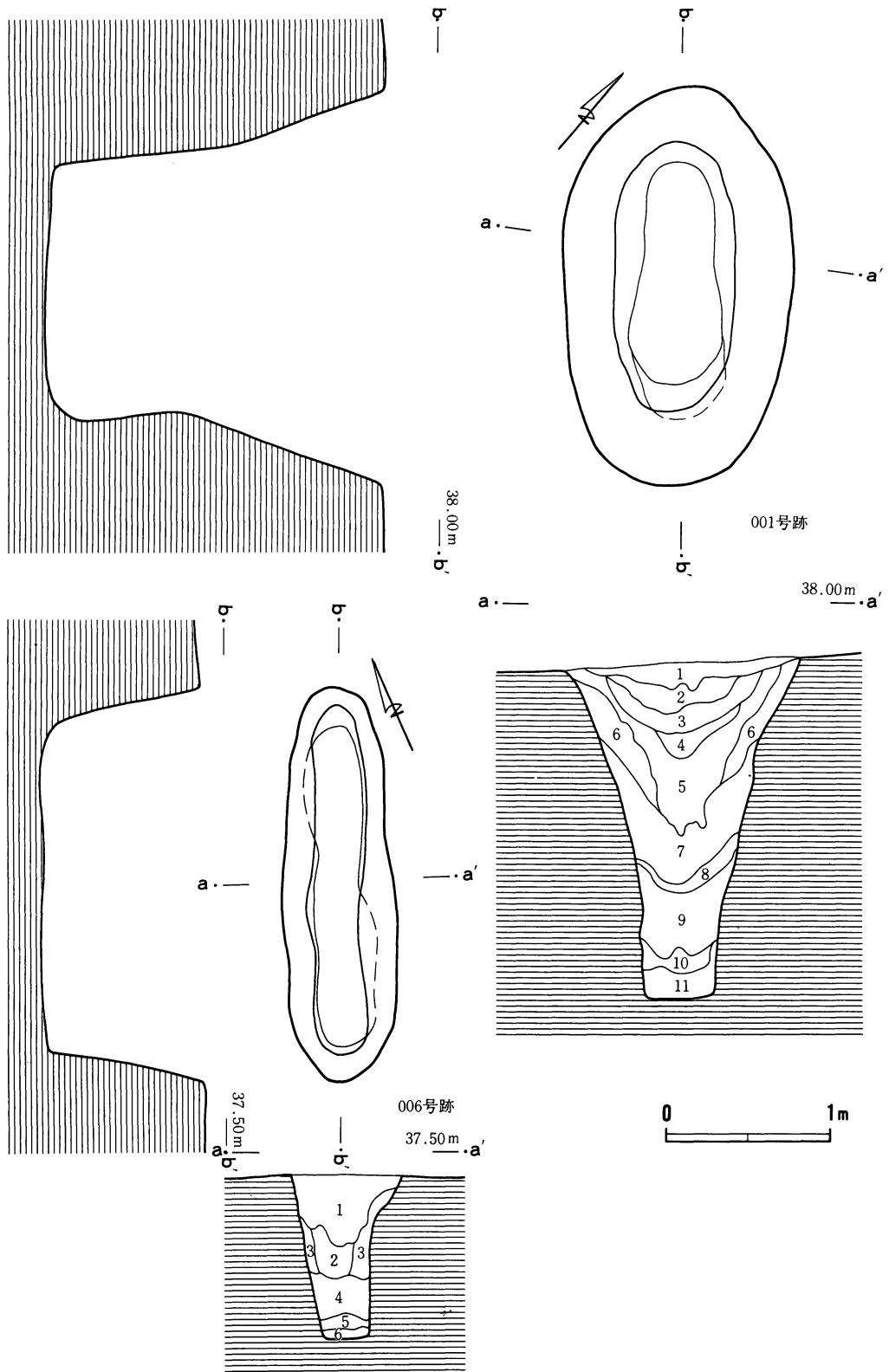
本跡は第4地点W26-04グリッドに位置する陥穴状土壌である。

検出面での規模は、長径2.34m、短径0.6mの長楕円形を呈する。長軸の方向は、N-25°-Eである。底面は長径1.9mで、短径は北東側では西に、南西側では東にそれぞれオーバーハングされ、0.35mほどを測る。面は平坦でピットは検出されなかった。

検出面からの深さは1mで比較的浅い。覆土は次のとおりである。

1. 暗褐色土。僅かに炭化粒と焼土粒が含まれる。
2. 褐色ロームブロック土。小ロームブロックを多く含む。
3. 褐色ローム土。ソフトローム土に小ロームブロックが含まれる。
4. 褐色ロームブロック土。大形のロームブロックで硬質。
5. 暗褐色土。有機質の黒色土が含まれ若干粘性をもつ。
6. 黑褐色土。有機質の黒色土に僅かにローム粒が含まれやや粘性がある。

以上である。本跡も001号跡と同様に遺物は1点も検出されなかった。



第39図 001号跡・006号跡(1/40)

・他の遺物

遺構には伴っていないが少數の土器片・石器が検出された。

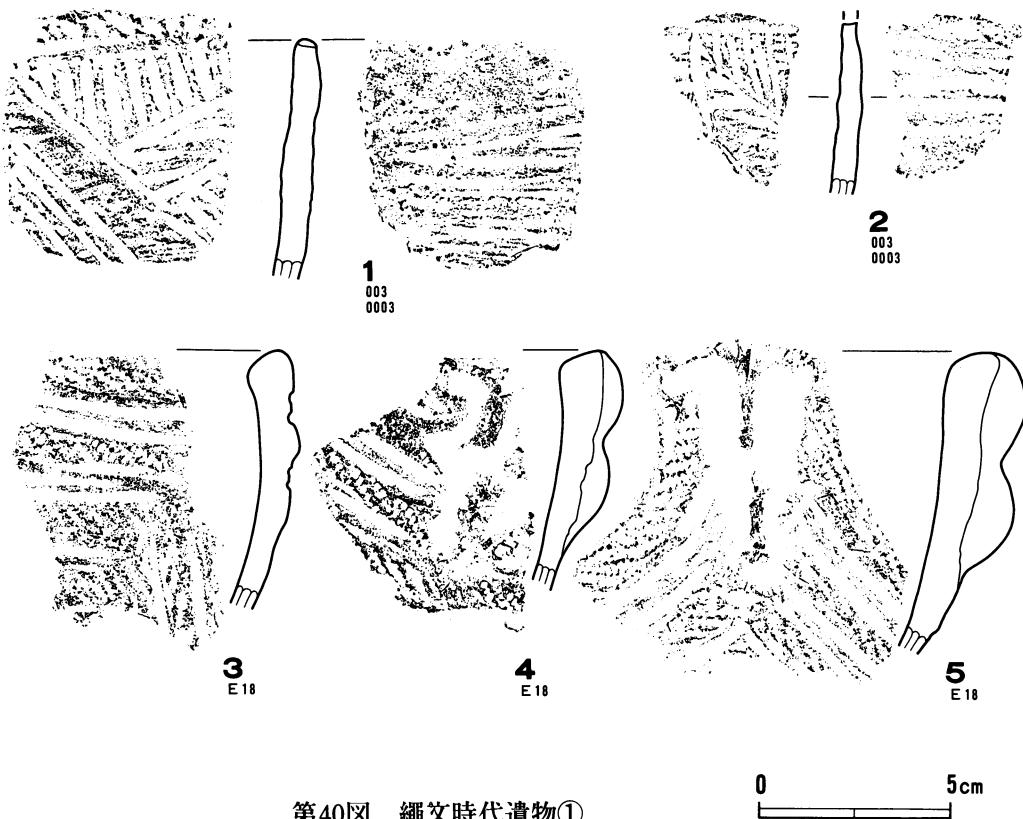
土器 (第40図)

1・2は表裏に条痕文が施される。さらに表面には沈線文が引かれる。また、1は口唇部に連続した押捺が認められる。焼成は良好で褐色を呈する。3・4・5は帶縄文を有する土器である。波状口縁をもつ鉢形土器の同一個体と考えられる。4・5は2個の貼り付け文が付され、波頂部に当たる。帶縄文は沈線文によって区画される。焼成は良好。

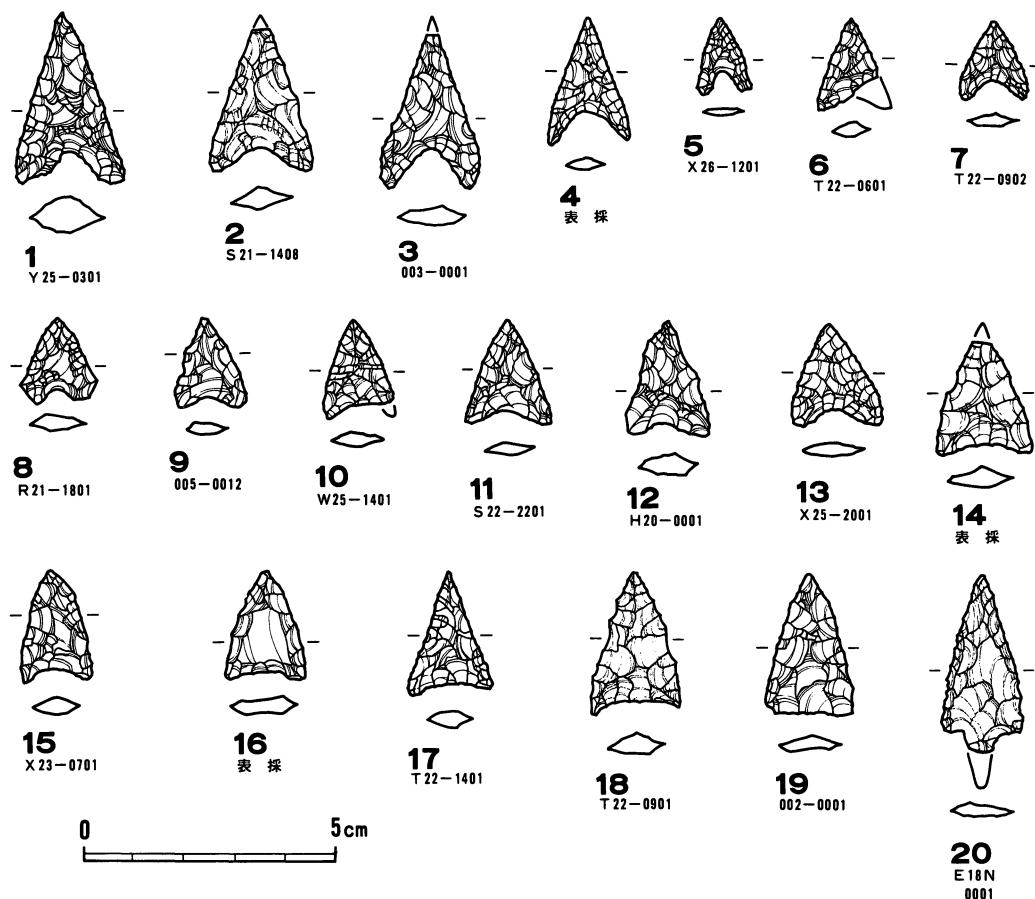
石器 (第41図)

縄文時代の石器として石鏃20点が検出された。石材は様々で、黒曜石・チャート・砂岩・メノウ等が使用されている。

1～19は無茎の石鏃である。1～7くらいまでは、基部の抉が深く及んでいる。18・19の基部は直線的である。20は有茎の石鏃で、基部は直線的に作られている。



第40図 縄文時代遺物①



第41図 繩文時代遺物②

第 2 表

石 鏃 一 覧 表

No	遺物番号	長さ	幅	厚さ	石材	No	遺物番号	長さ	幅	厚さ	石材
1	Y 25-0301	3.4	2.1	0.75	黒曜石	11	S 22-2201	(2.1)	1.7	0.3	チャート
2	S 21-1408	(2.8)	2.1	0.5	砂岩	12	H 20-0001	2.3	1.7	0.5	黒曜石
3	003-0001	(3.1)	1.95	0.4	メノウ	13	X 25-2001	2.0	1.85	0.3	チャート
4	表 採	2.5	1.65	0.3	チャート	14	表 採	(2.2)	1.9	0.4	チャート
5	X 26-1201	1.6	1.05	0.2	メノウ	15	X 23-0701	2.15	1.45	0.4	チャート
6	T 22-0601	1.85	(1.1)	0.4	黒曜石	16	表 採	2.1	1.6	0.4	チャート
7	T 22-0902	1.5	1.35	0.3	黒曜石	17	T 22-1401	1.75	1.75	0.4	チャート
8	R 21-1801	1.6	1.55	0.35	黒曜石	18	T 22-0901	1.8	1.8	0.5	凝灰岩
9	005-0012	1.7	1.45	0.3	チャート	19	002-0001	1.7	1.7	0.35	黒曜石
10	W 25-1401	1.95	(1.4)	0.3	チャート	20	E 18N -0001	1.65	1.65	0.4	泥岩

(単位 cm)

第4章 小結

本遺跡は、調査の結果先土器時代を中心とする遺跡であることが判明した。検出された遺構は、先土器時代の石器集中地点13、縄文時代以降の遺構6である。以下これらの成果についてまとめておきたい。

・先土器時代

調査によって検出したブロックは13であるが、その石器の出土総数はブロック数と対比すると少數であった。しかし、地点は分かれるものの、立川ローム層中に数枚の文化層を確認し得たことは、一つの成果といえよう。

千葉県内の先土器時代の遺跡も、千葉ニュータウン内の各遺跡をはじめとし、その数を日一日と増している。その中には複数の文化層を認める遺跡も少なくはない。そうした状況から比較的遅れていた、研究の面においても、編年的・構造的な研究が進められるに至っている。^{〔註1〕} 年的な作業において、房総における石器群の時期区分は、武藏野台地におけるそれに近づけて行われている。次に本遺跡の時期的傾向についてふれてみたい。これは当地方の立川ローム層の薄いこのもあり、帰属する文化層の断定は、危険性をもつといわざるをえない。

現在武藏野台地の石器群は、赤澤威・小田静夫・山中一郎氏等により、20の文化層の石器組成が、第Ⅰ文化期から第Ⅳ文化期の統合された文化層に捉えられ、さらに各文化期の細分が行われている。^{〔註2〕} 本遺跡で検出した石器を武藏野台地の成果に対応して考えた場合、少なくとも3枚の文化層が存在したといえる。そこでブロック外で出土した資料も含め、検出した石器の時間的変遷を、三里塚馬場第Ⅰ期から第Ⅳ期と仮称し、武藏野台地の編年と対比させつつまとめてみたい。

三里塚馬場第Ⅳ期

武藏野台地における先土器時代第Ⅳ文化期に相当する時期を当期とした。

今回の調査では、ブロックとしては検出されなかった。ブロック外で出土した第33図1の柳葉様の両面加工の尖頭器の位置付けを考えて、三里塚馬場第Ⅳ期を設定しておく。

三里塚馬場第Ⅲb期

第II層中位から第III層下位で検出した、A・Cブロックを第Ⅲb期とした。この出土層位については、ソフトローム層の堆積が非常に薄いため、その上で上・中・下位と分けることは無意味なことかもしれない。

Aブロックは、打面調整された円筒状の細石核と、それより主に剥離されたであろう細石刃を中心とする。他の石器としてナイフ形石器・スクレイパーが含まれる。ナイフ形石器は2点出土している。両方とも横長剝片の一部に僅かに調整を施しナイフ形石器としているものである。スクレイパーは、自然面を残す縦長剝片の一縁にエッジを設けるもので、サイドスクレイ

バーの一種である。この器種は、時期的にこれより下って出土頻度を高めるのではなかろうか。

Cブロックは、Aブロックと石材が近似する資料を含むため、第III b期とした。細石器は検出されず、Tool としては縦長剝片の一縁に弱いプランティングを施したナイフ形石器が1点である。

両ブロックの剝片類は、大形のものは少なく不定形である。

ブロック外で出土した小形の尖頭器（第33図2）等は、細石器に伴うと考えられる。

以上のようなことから当期は、武蔵野台地では、第III層中位に分布し、細石器が主体となる先土器時代第III文化期に対比できると思われる。

三里塚馬場第III a期

武蔵野台地の先土器時代II b期に対応されると考える時期である。石器の特徴から第III b期とは分離し、Bブロックを当該期とした。層位的には、第III層の出土であるが、第IV層の大部分がソフト化されるため、第III層との明確な区分は不可能に近く、本来の第IV層がどの程度遺存していたのかは不明である。Tool として断面三角形を呈する片面加工の尖頭器1点と、ナイフ形石器1点がある。ナイフ形石器は縦長剝片の周囲に調整を施したもので小形である。ブロック外で出土したナイフ形石器（第33図5）も本期に含めておきたい。剝片類は縦長のものが多く、鋭い縁に使用痕を残すものもある。

三里塚馬場第II期

第IV層～第V層下位から第VII層上位で検出したD・E・F・Gの各ブロックが該当する。これは武蔵野台地における先土器時代I C亜文化期に相当するものと考えられる。Tool はFブロックから出土したスクリイバーが1点と資料的に乏しい。この時期に盛行していると考えられるナイフ形石器を1点も出土していない。また、剝片も不定形で、石刃状の剝片が認められない。

F・Gブロックは接合関係から同時期存在が確認された。

三里塚馬場第I期

第2黒色帯で検出したH・I・J・K・L・Mの6ブロックが該当する。最もまとまった資料を提示した文化層である。武蔵野台地の第VII層下位から第X層上位に分布する、先土器時代第I b亜文化期に比定することができよう。この文化期の特徴的石器として、石核石器と、斧形石器があげられている。

石核石器は、Hブロックの使用痕を残す石核と、Jブロックの礫器がある。Hブロック出土の石器（第18図6）は、連続した調整は施されていないが、刃こぼれ状の使用痕が認められる。Jブロックで出土した石器は、礫に数回の打撃を加え刃部を作り出した。チョッパーとチョッピングトゥールである。この2点の調整は簡単であるが、加工の際に生じたと思われる剝片・碎片類は、1点も検出されなかった。他の石器では、Jブロック出土のスクリイバー状石

器（第22図1～4）が目に付く。特に、2は第一次剥離面を残さず調整が施されている。他の3点についても加えられた調整は、比較的細かい。Iブロックからナイフ形石器が1点出土している。これは、縦長剥片の素材に僅かに調整を施した簡単なものである。ナイフ形石器の初期の特徴の一端を示しているといえよう。第I期からは比較的多くの石器類が出土したが、斧形石器は検出されなかった。

以上武藏野台地の成果と対比しつつ、本遺跡の第I期から第IV期について概観してみた。本遺跡では、武藏野台地における先土器時代第IIa亜文化期と、最古に位置付けられる第Ia亜文化期については、該当するブロックは検出されなかったと思われる。

このように調査成果の一つとして、編年の位置付けを試みたが、Toolの数が少なく完全なものとはいえないことを付記しておく。また、各ブロックの性格、さらに下総台地の他の遺跡との関連においての時間的位置付けについては、今後の課題となろう。

・その他の遺構について

縄文時代以降に位置付けられる遺構は6基である。直接遺構に伴う遺物が検出されず、時期の決定を難しくしている。

竪穴状遺構

002・003号跡が該当する。2基は、ほぼ主軸方向を等しくする。また斜面に検出されたことに共通性をもつ。

構造の面の特徴として、床面を平坦にし、柱穴が掘られる竪穴住居跡状を呈することがあげられる。床面は荒掘りの最終段階で整えられたもので、貼床面ではない。僅かに傾斜はあるが、面は凹凸が少ない。柱穴は、両跡とも壁際に掘られる。掘り込みの直径は大きくなないが、真直に比較的深く掘られる。生活の場であるならば、炉が設けられるであろうが両跡には認められない。遺物も床面からは出土しなかった。壁は、上端の一部が崩落し、遺構が廃棄されてから埋土が充満するまでに時間があったと思われる。住居というより一種の室的使用を目的として構築されたと推測されるが、用途についての詳細は不明である。

両跡とも時間的には近いと考えられるが、構築時期・性格は明らかではない。

溝状遺構

004・005号跡が該当する。004号跡からは遺物は検出されなかったが、覆土の状態等から比較的新しい時代の所産と考えられる。かつてこの地域が牧や、競馬場として使用されていたことから、これに伴っていた遺構と判断される。確認のトレーナー内でも、数条の同種の溝が検出されている。

005号跡は谷部に位置する大溝遺構である。南東の端については、調査区域内に検出するこ

とができたが、調査区外の北西に伸びるため全体について確認し得なかった。本跡は発掘した部分の規模からみて、溝というよりも堀状の遺構といった方が適切かもしれない。発掘部分での平面形は直線的に掘られ、その方向は谷の向かう方向と同一となっている。

本跡の使用目的・構築年代となると不明な点が多い。004号跡のように発掘調査によって明らかになる溝以外に、本遺跡の周辺には現在も野馬堀や、野馬土手が存在している。仮に牧に関連した野馬堀状の遺構とした場合、馬が本跡に落ちたと想定すると、馬の受ける損傷は致命的なものとなってしまい、堀の目的は無意味となってしまう。また、囲むようにして目的が達せられるものであるなら、本跡のような切れ方は不自然といえる。したがって野馬堀と同類の遺構とするには無理があるだろう。大胆な仮定として、水を蓄える施設として、牧内で使用したとか、対人間用の防塞施設であった等とも考えたが、遺構および周辺の状況等からいずれも説明がつかず、用途については推測の域を出ない。底面中央に配されるピット列は、杭状のものが掘り込まれていたであろうが、その目的も、本跡の用途が判明しなければ、推測するのみが可能である。

次に構築の年代であるが、比較的新しい時代の遺構であるならば、記録として残されているだろうが、そういう記録も存在しない。周辺の老人の記憶でも本跡の所在が分かるような形跡はなかったとのことであるし、明治時代前半に作製されたこの地域の地形図にも本跡を示す記載はない。^(註3) 遺構の上端部が崩落しているのは、使用期間内であったのか、廃棄されてから覆土が充満する間にそうなったのかは不明である。しかし、覆土の下層は非常に硬くなつており、幾重もの層に分けられる土層は、この遺構を掘った際に生じた土を埋戻したのではなく、長期間にわたって自然に堆積したことが観察される。老人の記憶や地形図の中に本跡の形跡が見当たらぬということは、少なくとも明治時代前半には完全に埋まっていたと考えることが可能となろう。覆土の中位以下から和泉式の土師器が出土しているが、流れ込んだような出土状況であったし、1点のみということもあり、時期決定の遺物とするには根拠が弱いと思われる。しかし、この遺物は、この周辺が古墳時代生活の場として利用されていたことをうかがわせている。

以上のように本跡の構築目的・年代については、決定する資料に欠けている。類例の検出をまって検討してみたい。

陥穴状土壙

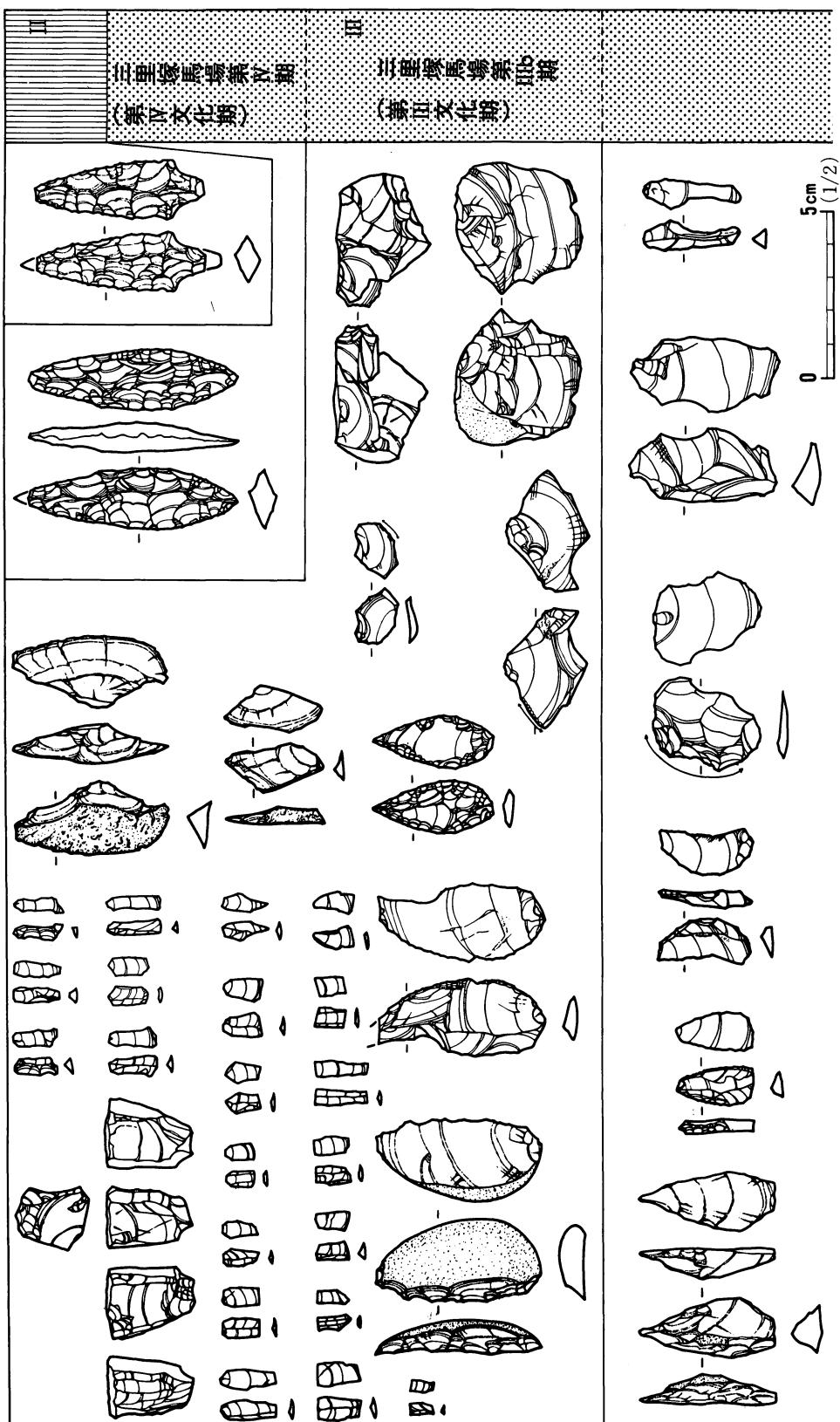
001・006号跡が該当する。遺物の検出はなかったが、縄文時代に属する遺構となろう。この他に石鏸等が検出され、この地が縄文時代も狩猟の場として使われたことを物語っている。

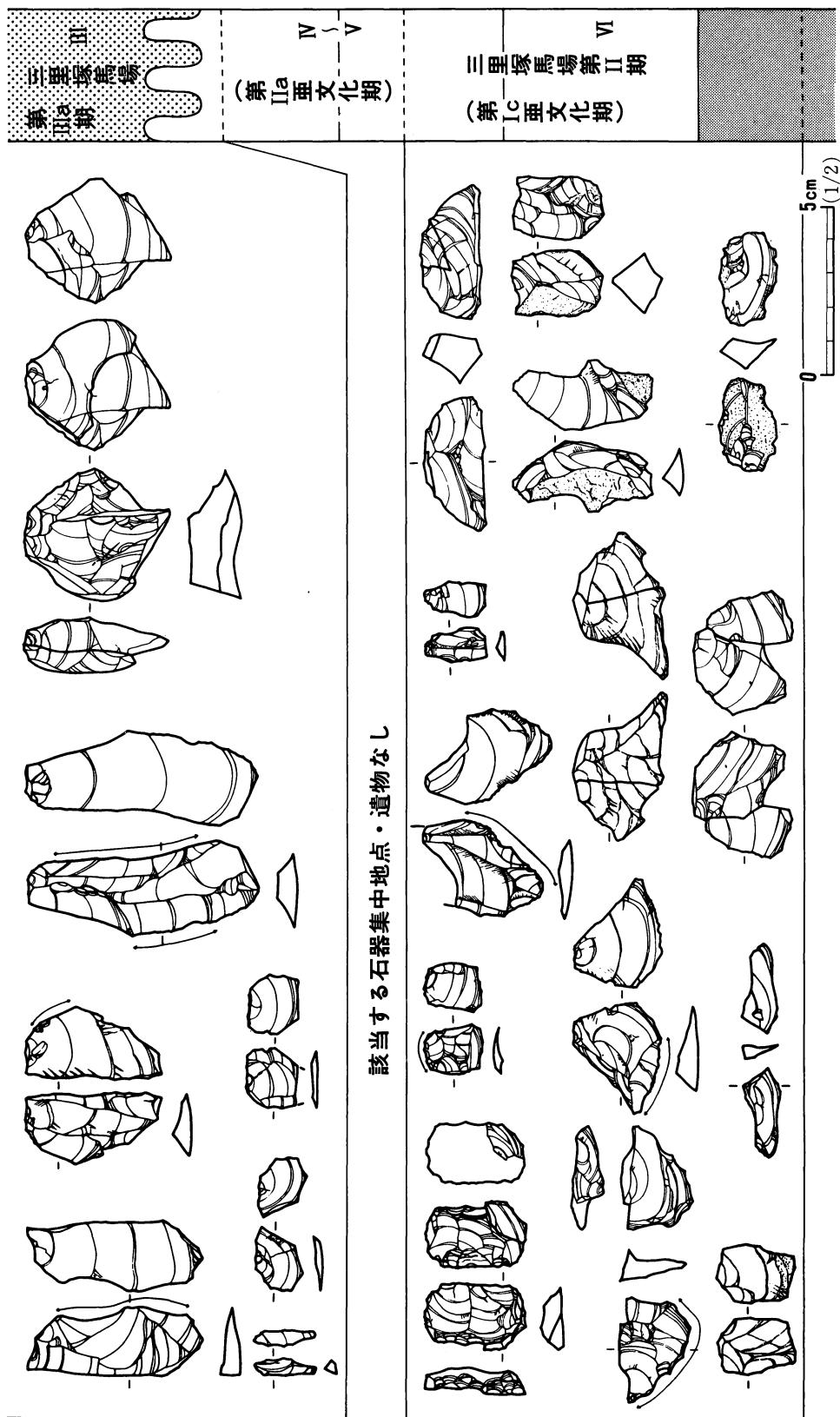
以上が検出された遺構と遺物についての簡単なまとめである。一応の調査成果をおさめることができたが、今後木戸川流域の調査が進められる過程で、本遺跡のもつ性格を再び考えてみたい。

参考文献

- (註1) 鈴木道之助・古内茂 『研究紀要1』 財団法人千葉県文化財センター (昭和51年)
- (註2) 赤澤威・小田静夫・山中一郎 『日本の旧石器』 立風書房 (昭和55年)
- (註3) 2万分の1地形図(第一軍管地方迅速測図 佐倉近傍第2図——大里村) 参謀本部陸軍部測量局著作 大日本測量(株) 資料調査部発行 明治15年

第42図 文化層別石器集成図①

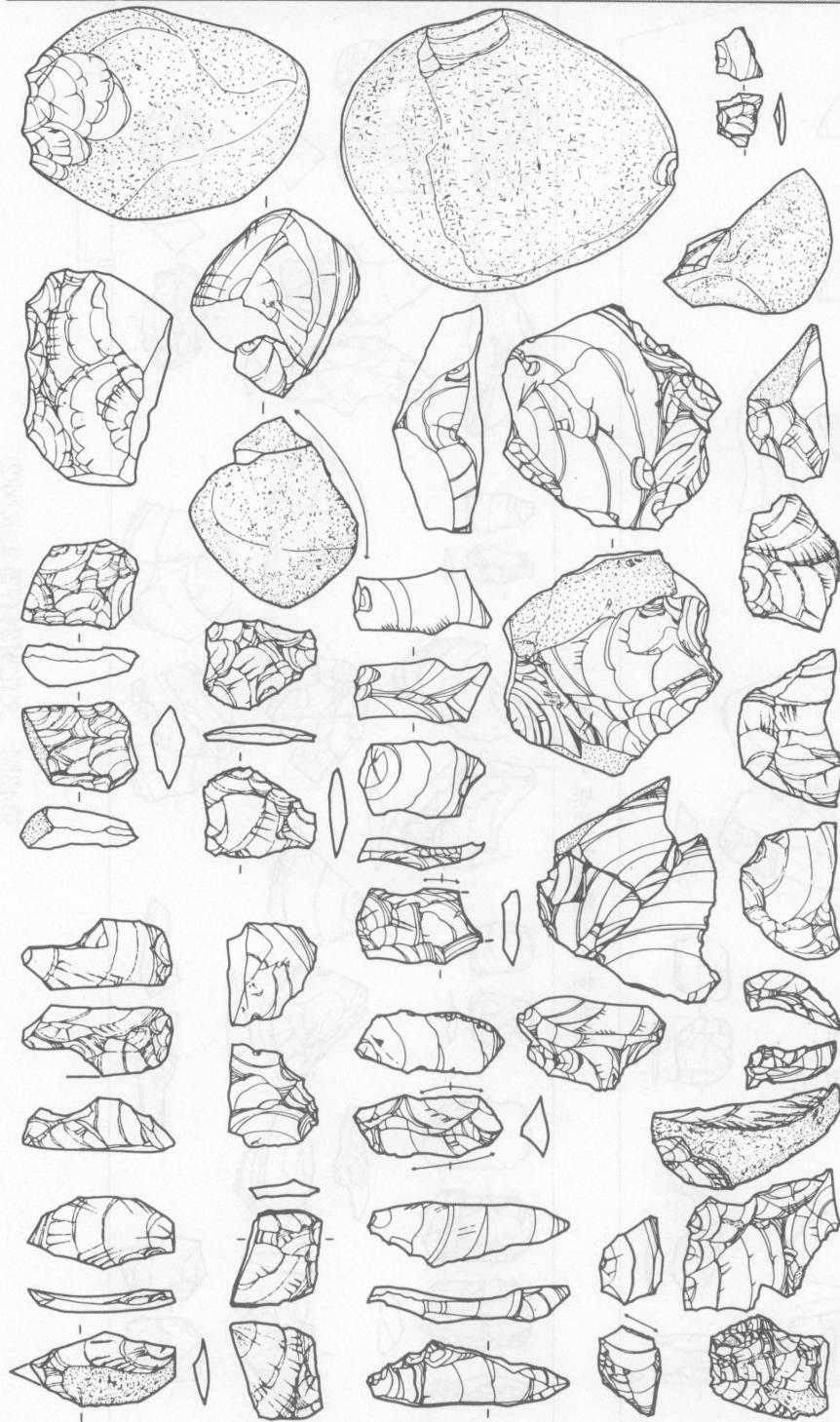




第43図 文化層別石器集成図②

VII

三里塚馬場第一期
(第Ib亜文化期)



該当する石器集中地点・遺物なし

(第Ia亜) VIII
(第I文化期)

第44図 文化層別石器集成図③

第3表

ブロック別石器一覧表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	外	合計
細石刃	21														21
細石刃核	1														1
尖頭器		1												5	6
ナイフ形石器	2	1	1						1					2	7
スクレイパー	1					1				4	1				7
剥片類	26	11	4	7	3	34	11	11	16	71	35	14	29	2	274
チヨツパー										1					1
チヨツピングトール										1					1
敲石												1	1		1
石核	4		1	1	1			1							9
礫	1									1					2
合計	56	13	6	8	4	35	11	12	17	78	36	15	30	9	330

第4表

ブロック別石材一覧表

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	外	合計
黒曜石				1		5	4				6			1	17
チャート	43		3			4			4					1	55
安山岩	12	1						4	10	56	1		5	2	91
頁岩				2	2	1	2				6		21	2	37
メノウ		11	1	5	2						19	14	3	3	58
玄武岩						24					3				27
砂岩			1			1	5	6			1				14
石英			1												1
泥岩								2	3	17				1	22
ホルンフェルス												1			1
凝灰岩	1										3				4
その他の		1									2				3
合計	56	13	6	8	4	35	11	12	17	78	36	15	30	9	330

Summary

This report concerns archaeological investigation carried out at the Sanrizuka Baba site by the Cultural Properties Center of Chiba Prefecture. This excavation was rescue operation brought about by the construction of the Sanrizuka Danchi (housing development). The investigation of this site was undertaken from April 1 to September 30 in 1980 and the same term in 1981.

The site is located at Sanrizuka, Narita city, in the northern part of Chiba prefecture. Narita city is situated on the center of the Shimousa Plateau, and the site is located the upper course of the Kido river, that flows into the Pacific Ocean.

An area of over 7,000m² was excavated so we disclosed 13 blocks of Preceramic artifacts and 6 features of uncertain age etc.

〈Preceramic artifacts〉

Although only a small number of artifacts were excavated, we discovered at least 3 Cultural Layers. Artifacts yielded from the 3 Cultural Layers were as follows.

- (1) Layer III — 21 microblades, a microblade core, knifeshaped tools, flakes (Block A·B·C)
- (2) Layer IV Lower through Layer VII Upper—a scraper, flakes (Block D·E·F·G)
- (3) Layer VII — pebble tools (chopper, chopping tool), scrapers (Block J) a knifeshaped tool, flakes, cores (Block H~M)

〈Other artifacts and features〉

We found 2 small pits, 2 features resembling pit -dwelling, and 2 ditches, all of them containing no artifacts. Judging from the layers, the small pits are supposed to be feature in Jomon Period, and the other in rather modern age, but their further dating and use remain uncertain.

Other unearthened artifacts were 20 arrowheads and very few potsherds.

図 版

図版 1



1. I 区近景

(西より)



2. III 区近景

(南より)

図版 2



1. 第2地点調査後

(南西より)



2. 第4地点調査後

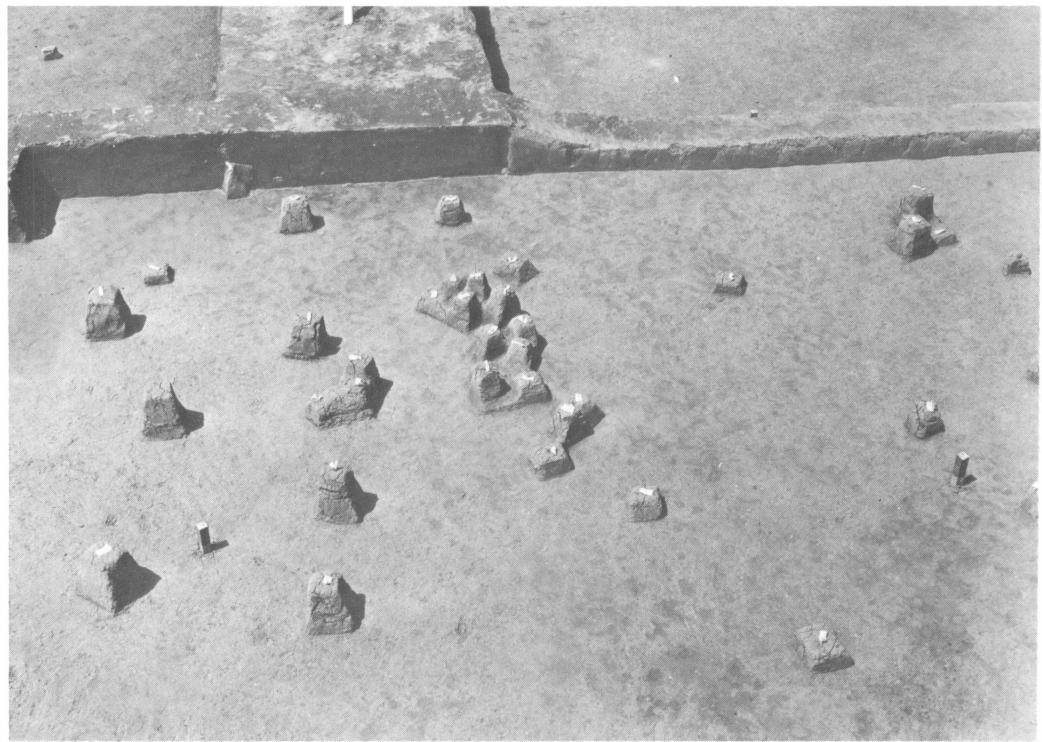
(南東より)

図版 3



1. 土層断面

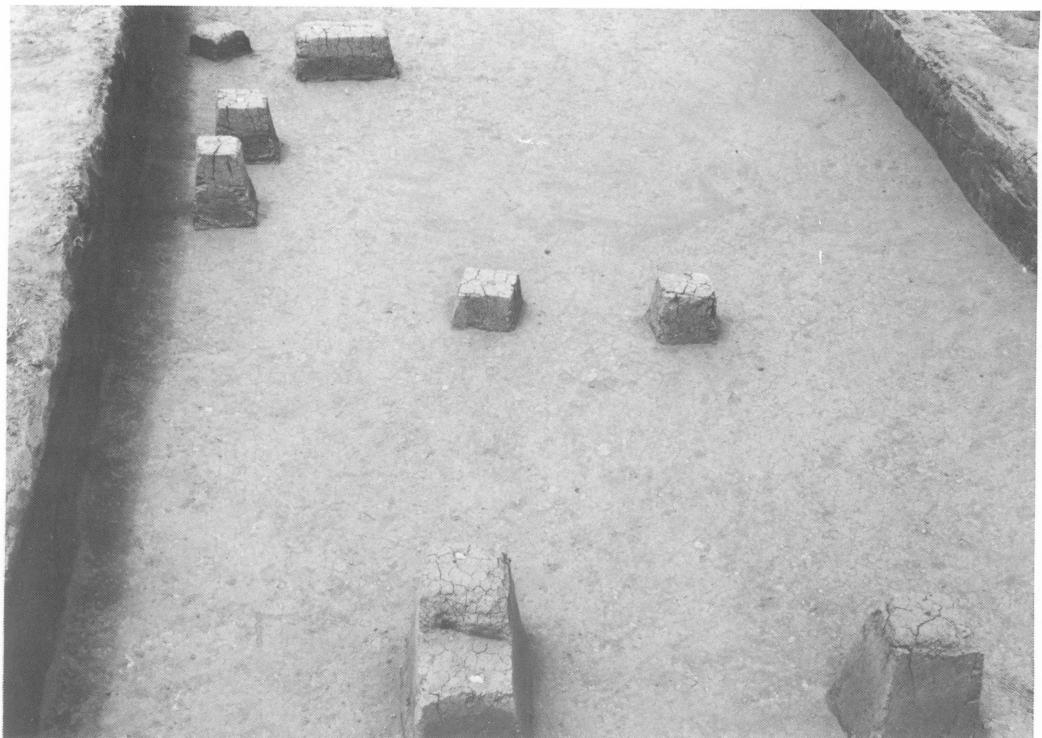
(X 25-09)



2. A ブロック遺物出土状況

(南より)

図版 4



1. B ブロック遺物出土状況

(東より)



2. F ブロック遺物出土状況

(南より)

図版 5



1. I ブロック遺物出土状況

(南より)



2. J ブロック遺物出土状況①

(北より)

図版 6



1. J ブロック遺物出土状況②



2. K ブロック遺物出土状況

(北より)

図版 7



1. Mブロック遺物出土状況①

(北西より)



2. Mブロック遺物出土状況②

図版 8



1. 002号跡

(南東より)



2. 003号跡

(南東より)

図版 9



1. 004号跡

(南より)



2. 004号跡土層断面

図版 10



1. 005号跡

(東より)



2. 005号跡土層断面①



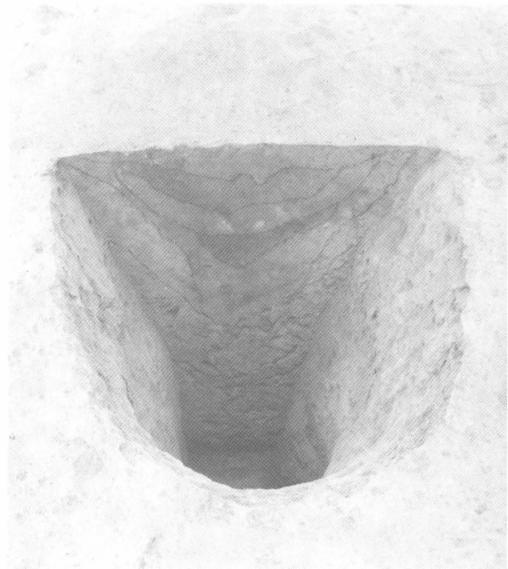
3. 005号跡土層断面②

図版 11

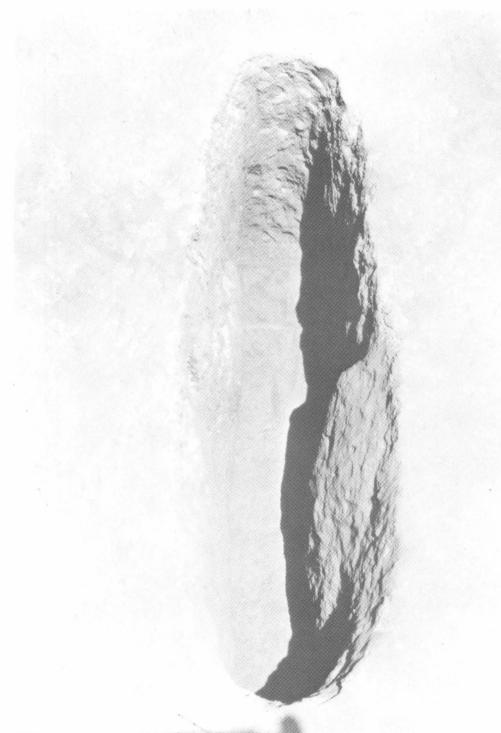


1. 001号跡

(南東より)

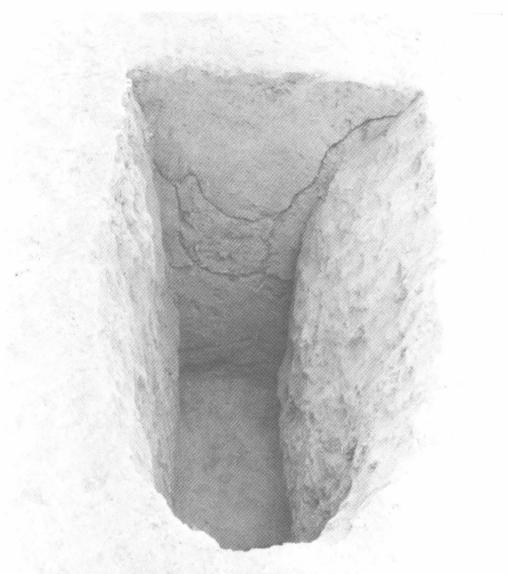


2. 001号跡土層断面



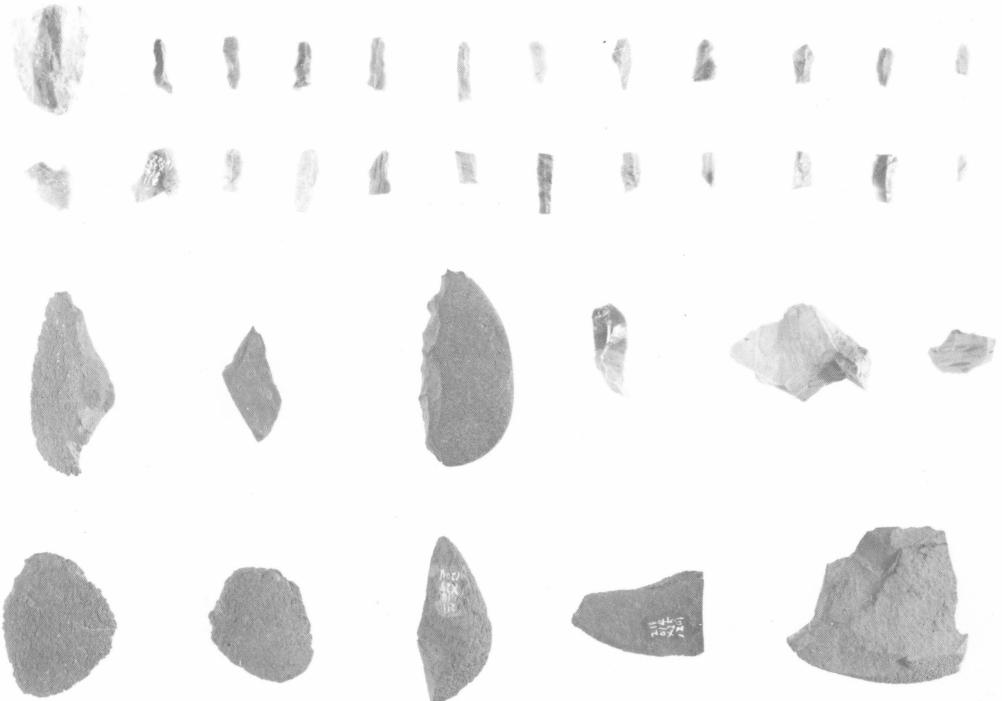
3. 006号跡

(南西より)

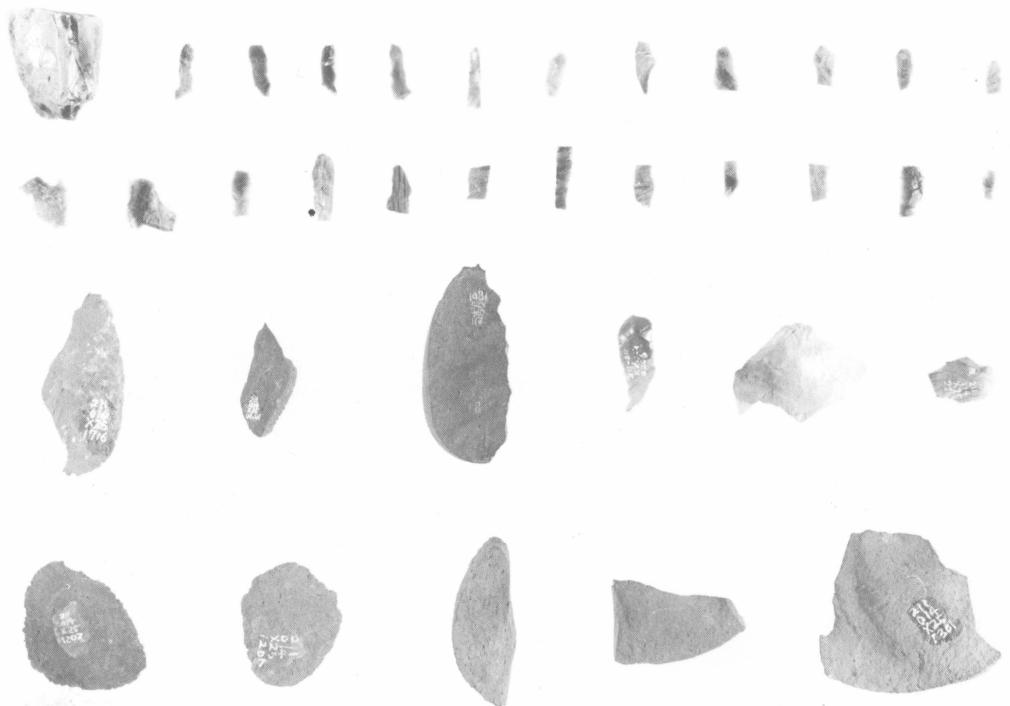


4. 006号跡土層断面

図版 12

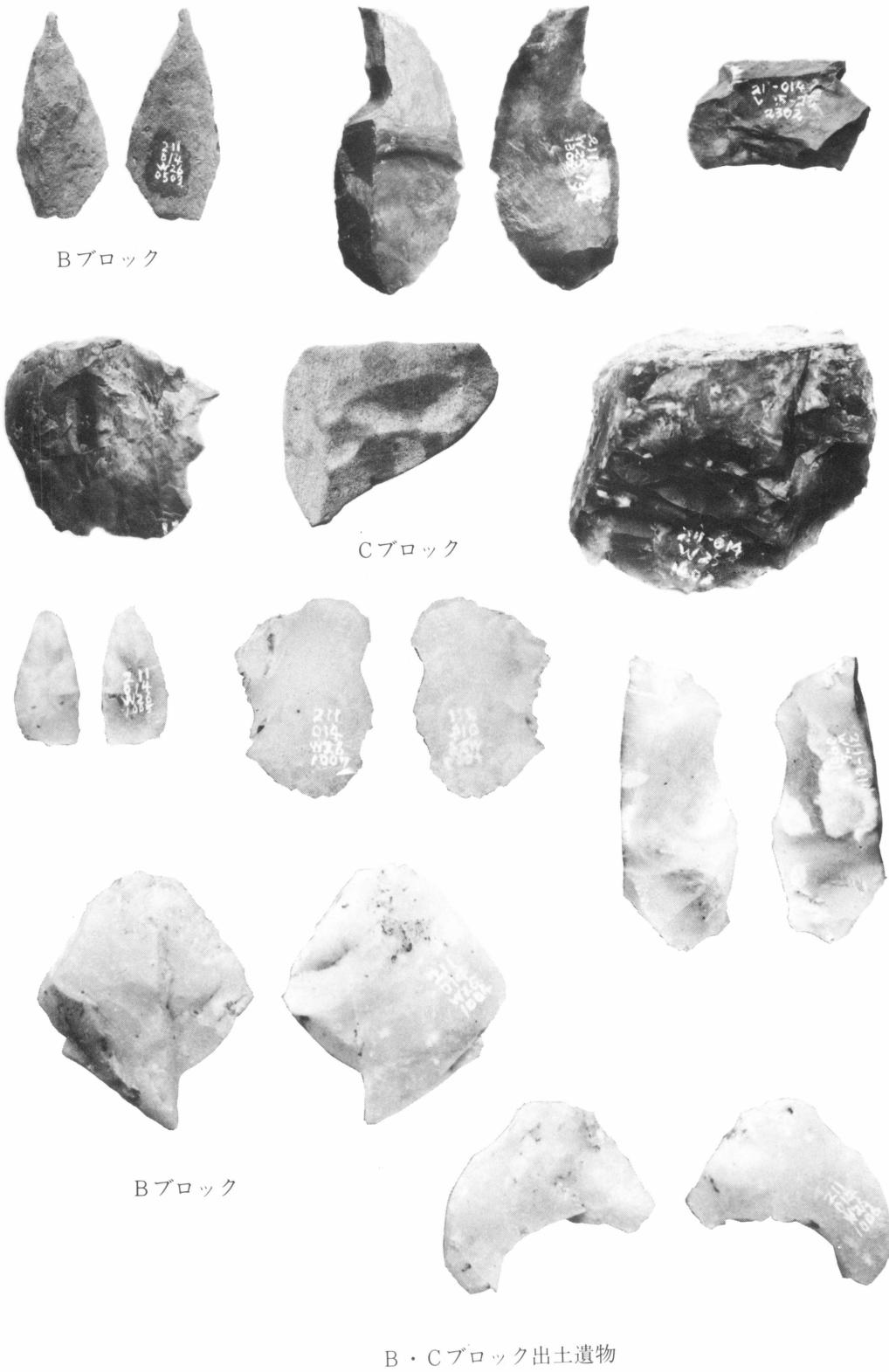


1. Aブロック出土遺物（表）

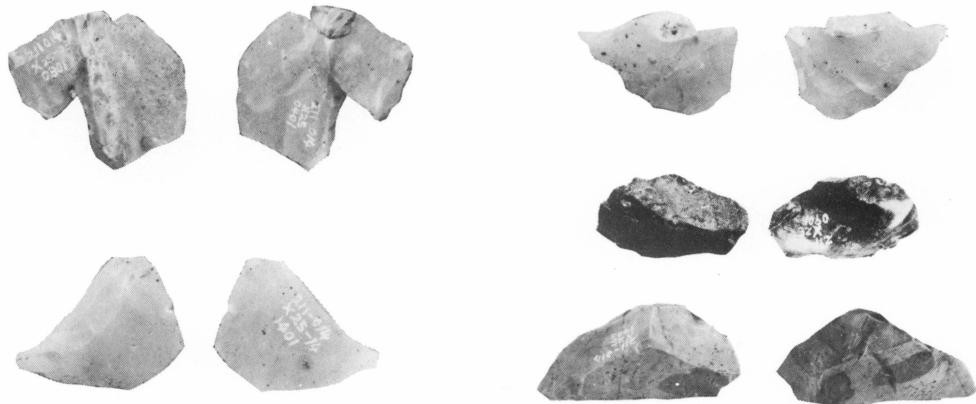


2. Aブロック出土遺物（裏）

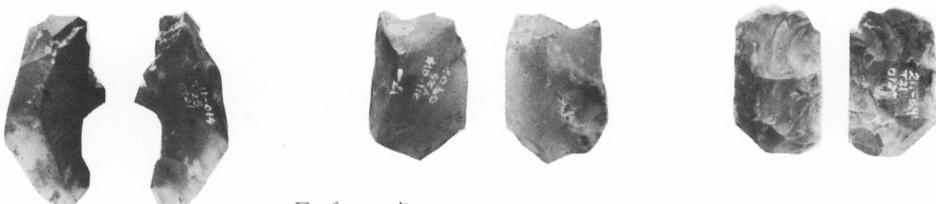
図版 13



図版 14



D ブロック

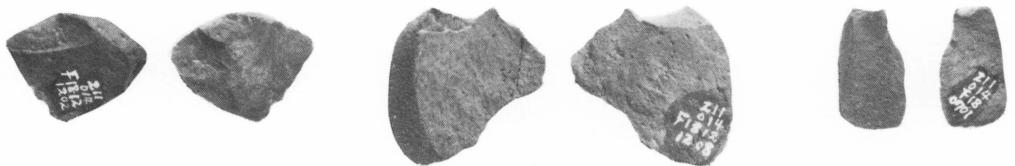


E ブロック



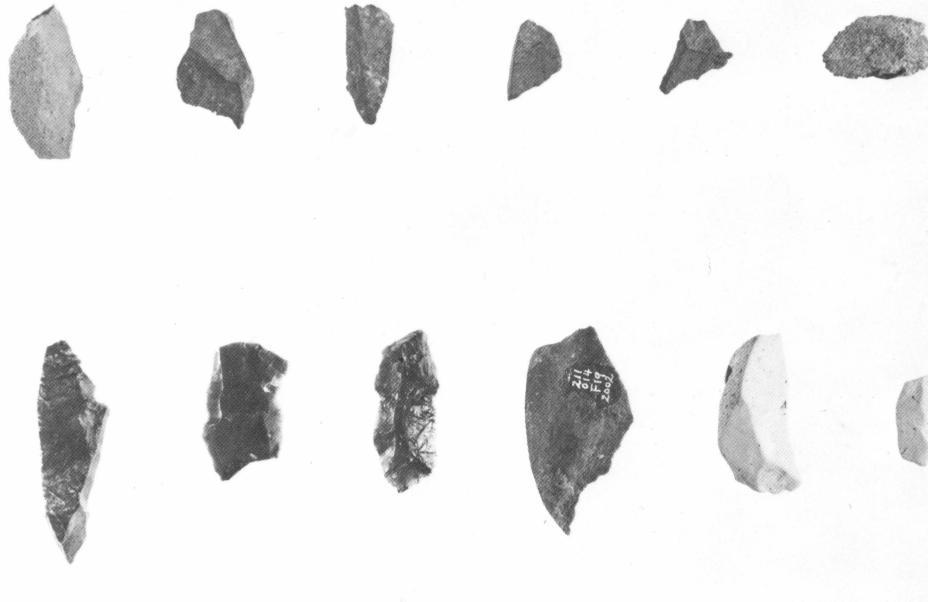
F ブロック

G ブロック

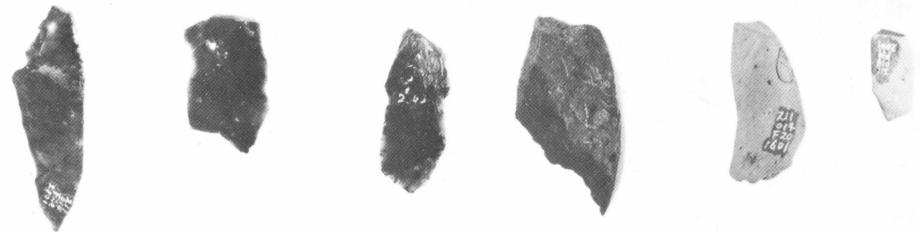


H ブロック

D～H ブロック出土遺物

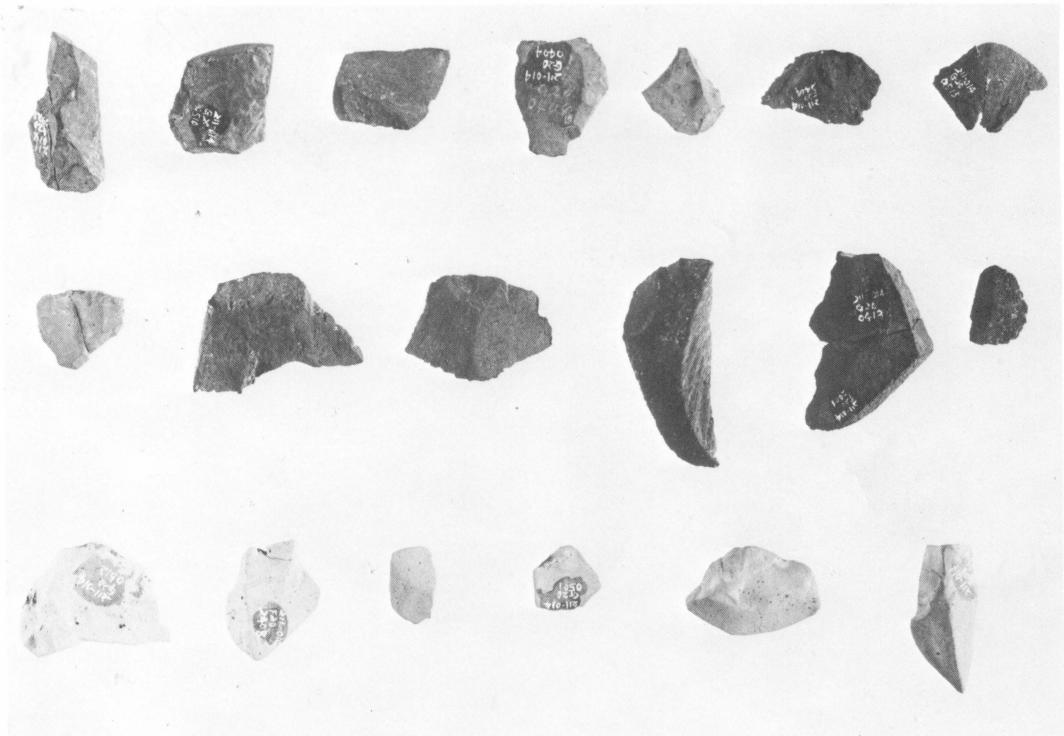


1. I ブロック出土遺物（表）



2. I ブロック出土遺物（裏）

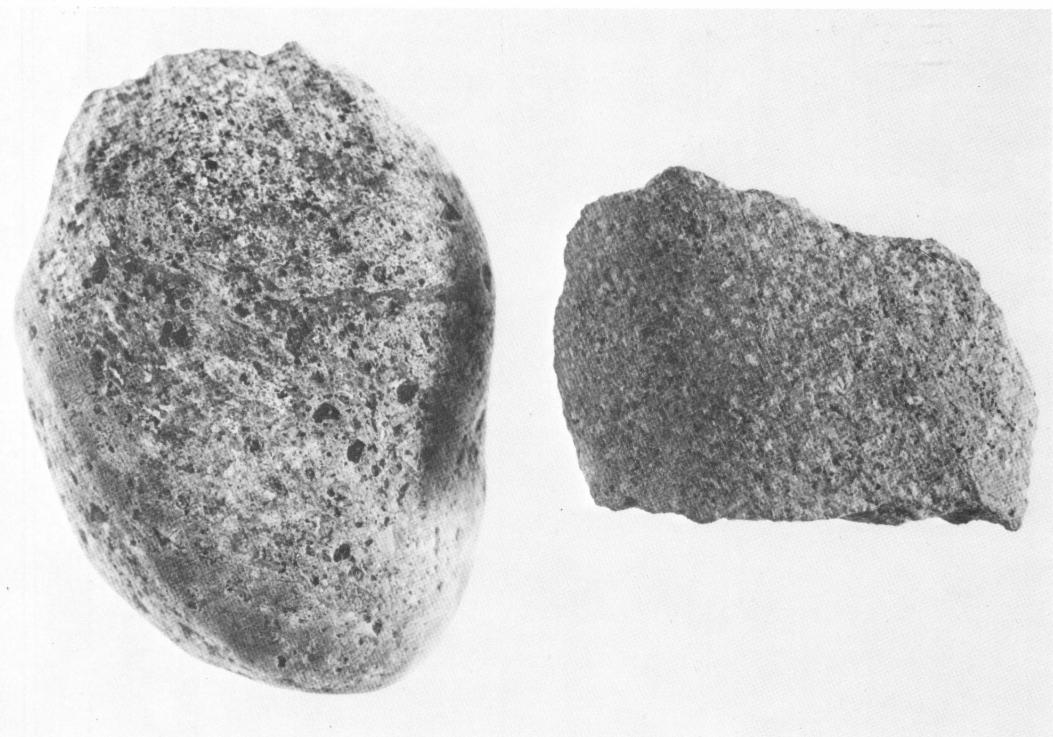
図版 16



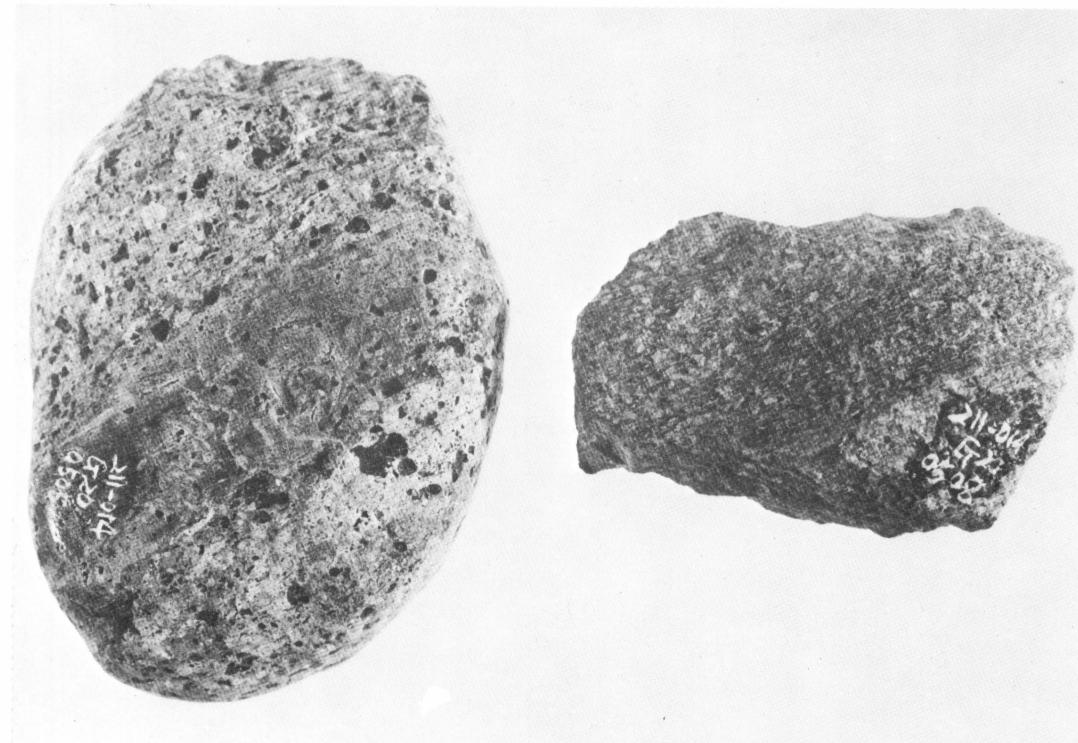
1. J ブロック出土遺物（表）



2. J ブロック出土遺物（裏）

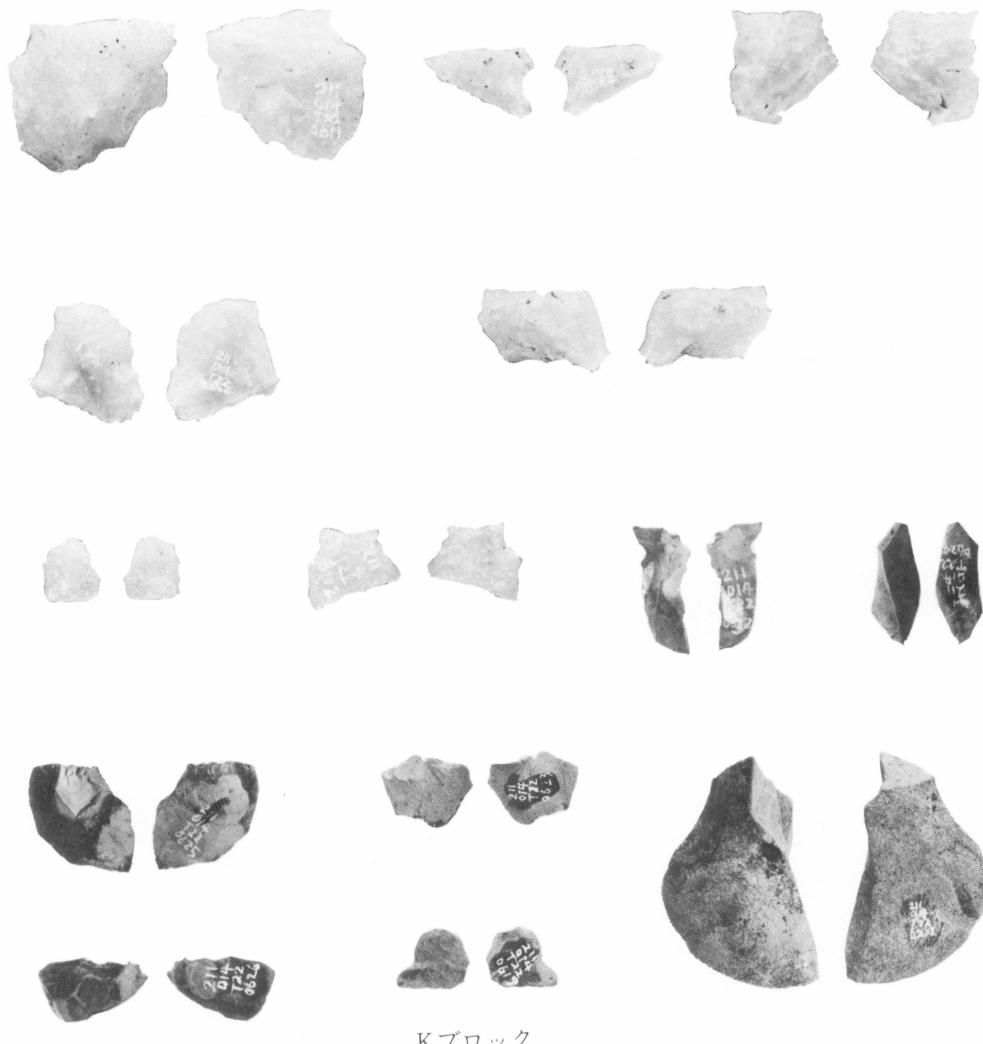


1. J ブロック出土礫器（表）

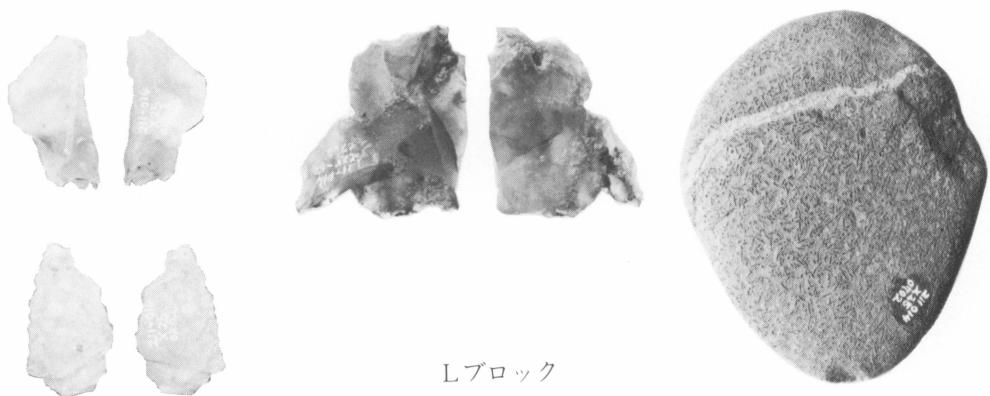


2. J ブロック出土礫器（裏）

図版 18



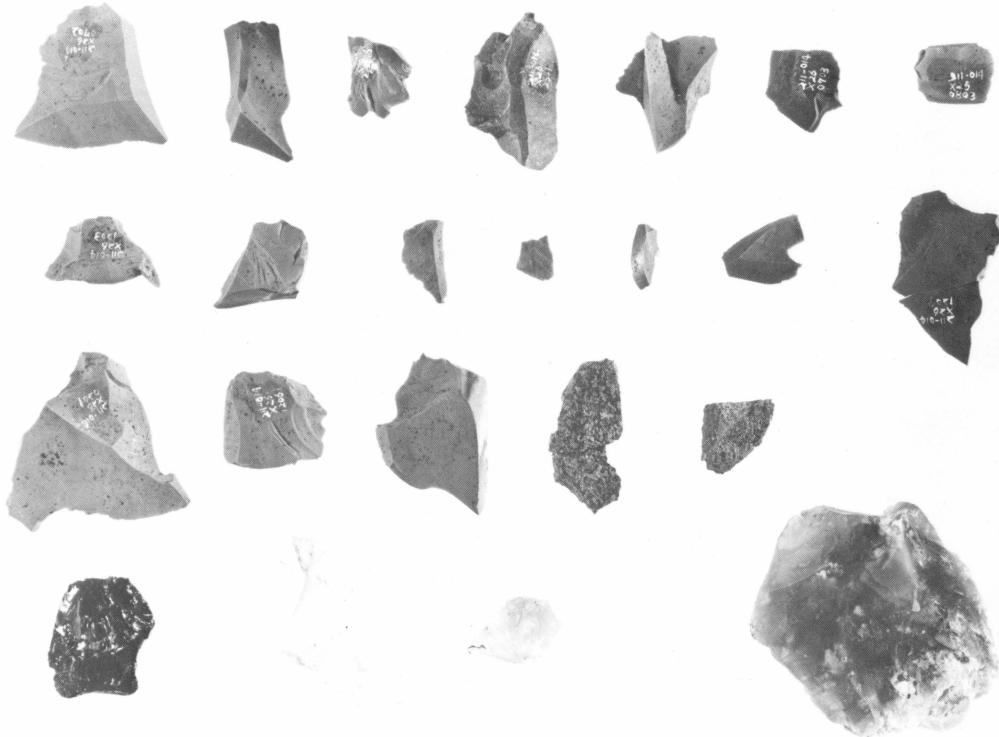
Kブロック



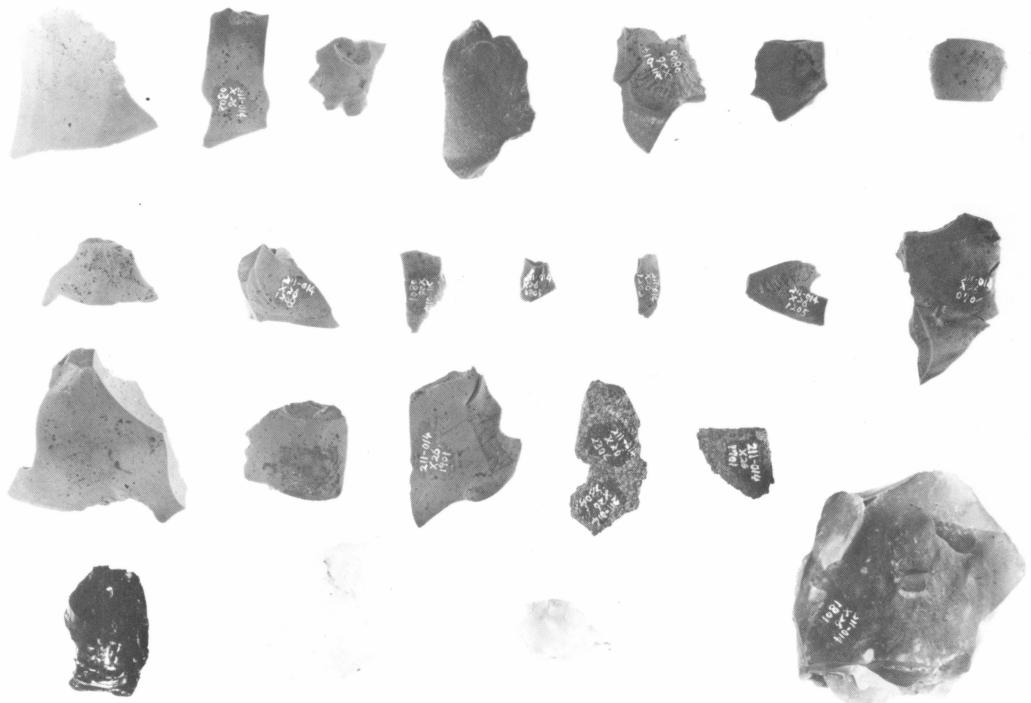
Lブロック

K・Lブロック出土遺物

図版 19



1. Mブロック出土遺物（表）

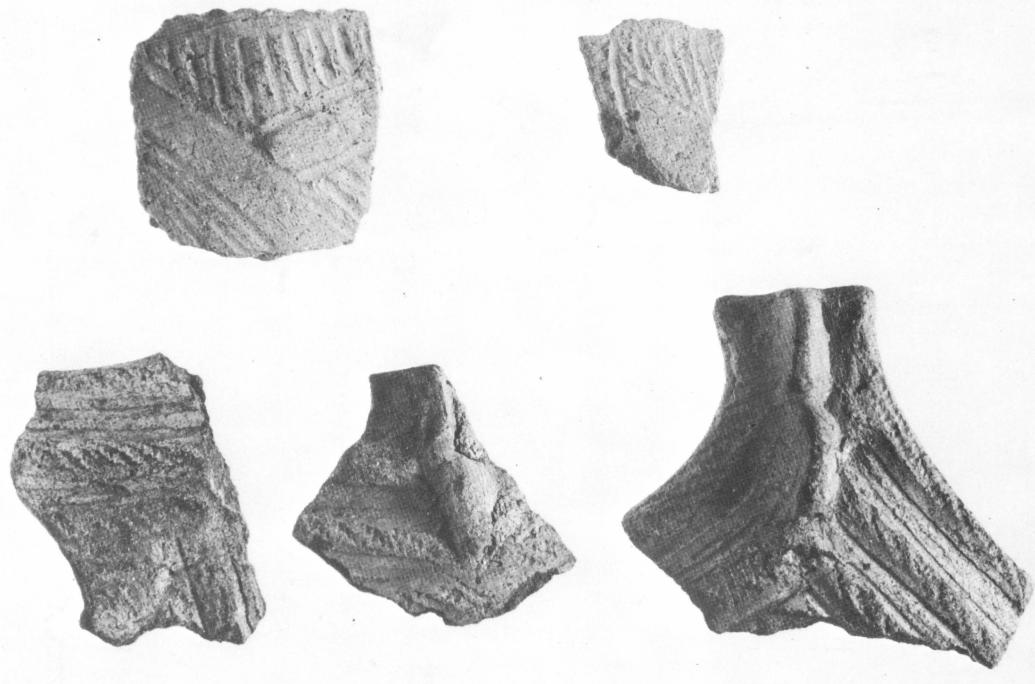


2. Mブロック出土遺物（裏）

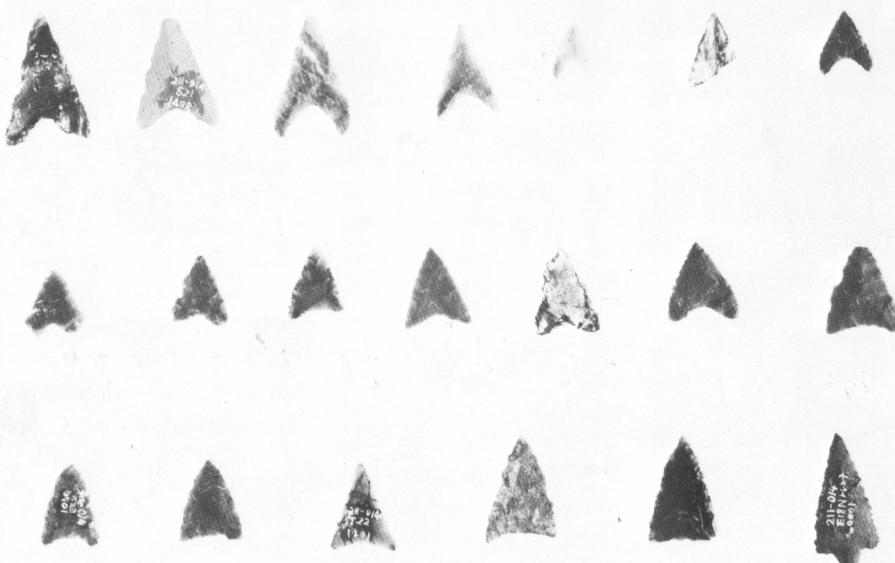
図版 20



ブロック外出土遺物



1. 繩文時代遺物(土器)



2. 繩文時代遺物(石器)

成田市三里塚馬場遺跡

印刷 昭和57年 9月20日

発行 昭和57年 9月30日

発行 千葉県住宅供給公社
千葉市本千葉町13-1 0472(27)5161

財団法人 千葉県文化財センター
千葉市亥鼻1-3-13 0472(25)6478

印刷 株式会社 ヤ カ 東京工場
松戸市田中新田5-5
